

---

# 真剣で私が恋した 8 番目！！

もっこりーズ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真剣で私が恋した8番目！！

### 【Nコード】

N8483V

### 【作者名】

もっこりーズ

### 【あらすじ】

2005年、夏

風間ファミリーと行動を友に行動を共にしていた少年が消息を経つた。

少年の名は組式彩羽<sup>くみしきいろは</sup>

強く、頭も良い完璧超人と言っても過言では無いほどの人間だった。

突然すぎる彼の失踪は風間ファミリーの面々に深い悲しみを抱かせ

た。

しかし彼の一番の友、直江大和は諦めなかった。

そして月日は流れ2009年、春――

大和の下に一通の手紙が来る。

それが物語の始まりだった。

果たして彩羽は皆を守る守護者となるのか、それとも破壊をもたらす獣となるのか。

川神に嵐が吹き荒れようとしていた。

というほどシリアスではありません（笑）

## オープニング（前書き）

自分的にマジ恋最高だと思います。

年内にはSも発売するし秋にはアニメ化されるし、今年マジ恋の年ですねw

## オープニング

2004年、夏・川神市川神小学校

今日もいつもと変わらぬ騒がしい日々が続いてると、直江大和は思っていた。

彼ともう1人、風間翔一の下作られた風間ファミリーはいつも周りを巻き込んでドタバタとしていた。

メンバーは直江大和、風間翔一、島津岳人、師岡卓也、川神百代、川神一子、椎名京ともう1人。

くみじきいろは  
組式彩羽によって構成されていた。

今日もクソ暑い学校で朝の会が行われている。

同じクラスの彩羽はまだ来ていない。

遅刻だろうか、それとも休みだろうか。

無断欠席・遅刻が多かった彩羽にとってそれほど珍しいことでもないというのがクラスの総意だった。

教師の話に耳を傾ける気も起きず、ただぼうつと窓の外に映る夏の川神の風景を眺めていた。

しかし大和は嫌でも教師の話聞くことになる。

「えー、なんと言っているのか・・・」

いつになく教師の歯切れが悪い。

この若い男の教師は良くも悪くもズバズバとものを言うのが得意だったはずだ。

大和は嫌な予感を覚えた。

「うむ・・・実は昨日電話があつてな・・・」

いつもは騒がしいクラスが静まり返る。

大和もそれに倣って黙って話を聞いた。

「組式が昨日行方不明になった。」

「・・・・はあああああ！？」

何を言っているのか、解らなかった。

「せんせー！何を言ってるのか解んねーぞ！！」

「先生、嘘だよね？だって彩羽は・・・」

同じクラスのモロヤガクトは席から立ち上がり、京は目を見開いて呆然としていた。

大和もまた、驚きを隠せずに声を上げてしまっていた。

「皆落ち着け、言いたいことは解るがまずは先生の話を聞いて欲しい。」

教師は落ち着いてヒートアップするクラスをクールダウンさせる。

(何で!?! 昨日といえば俺はその彩羽と遊んでいたんだぞ!?)

大和はファミリィの中でも特段、彩羽と仲が良かった。

おそらく性格が似ているということであつたのだらう。

昨日も大和は彩羽と2人で遊び、何の問題も無く分かれたはずだつた。

しかし、大和は記憶を手繰り寄せ昨日のことを鮮明に思い出そうとする。

(昨日は・・・)

## 回想

大和ともう1人、組式彩羽その人が話していた。

彩羽は風間ファミリィの中でも翔一に勝るとも劣らない美形の少年だつた。

翔一は元気一杯の『動』を表したかのような少年だつたが、彩羽は落ち着いた物腰の『静』といった感じだつた。

キャップである翔一のトレードマークがバンダナなら彩羽のトレードマークは頭に巻かれた包帯だつた。

頭全体ではなく、よく病院の患者がおでこに巻いている感じのアレである。

本人は昔ついた傷を隠すために今も包帯をしているとのことだったが誰もその中を見たことがない為に大和は自分と同じ状態（かなり時期の早い中二病）だと思ひ話しかけたら仲良くなったといった具合だった。

本人達は無自覚だったが、毎年ガクト涙目のバレンティンチョコ贈呈戦では常に風間ファミリーとしては2トップを駆け抜けていた。

『大和はスゲーよな、巧みな戦略と戦術で俺らを勝たせるんだからな〜』

『おうよ、お前は武、知共にスゲーが知略では俺が一番だね。』

『ああ、そうだな。だからお前になら皆を任せられる、頼もしい奴だよお前は・・・』

『ん？どうした？』

『いや、なんでもない・・・なあ大和。』

『なんだよ、いきなりシリアスぶっちゃって。』

『シリアス、か・・・そうだな、俺にこんな似合わねーよな！』

『ああ、何かあったのかは知らねーが、俺達はいつでも彩羽の味方だぜ！』

『それだけありがたいよ、俺は・・・』



回想終了

(なんかフラグ立ってるー!!)

大和は独り頭を抱えた。

その間にもクラスメイト達は教師に彩羽のことについて質問攻めにしていた。

しかし教師にまったく慌てた様子は無い、むしろ落ち着きすぎではないかとも思われた。

「昨日公衆電話から学校に電話があつてな、組式が学校を辞めると言い出したんだ。アイツ両親もいなくて親戚もいなくて天涯孤独つてヤツなんだよ。だから施設に預けられると思つたらそうじゃなくてな・・・預かり先から逃げてる最中と言つてたんだ。」

だからと言つて学校を辞めるほどののだろうか、イマイチ納得がいかない。

「それで警察にも協力してもらつて調べたところ、アイツは昨日の夜に成田空港の中東某国行き便に乗ったことが解つたんだ。」

「・・・中東!?!」

大和、ガクト、モロの3人が口を揃えて聞き返す。  
おそらくガクトは中東の意味が解らないまま言っているであろうが。

「そう、中東。そのまま組式の消息は途絶えたんだ。」

中東の某国といえは紛争が絶えず行われている国として有名だ。テレビでも何回かやっているほどに。

「でも何でそんな所に？」

モロの言うことはまっただった。

わざわざ危険と言われた場所に行くのはどう考えても死に行くよ  
うなものだ。

(死に行く・・・!?)

大和が気付いた頃、モロや京も気付いたようで顔が青くなっていた。

「彩羽・・・自殺のつもりで・・・？」

「それ以上言うな！」

モロの呟きをガクトが止める。

ガクトもガクトなりに薄々と感づいているようだった。

「とりあえず今日は緊急集会だ・・・」

大和の言葉にクラスのファミリーは反対しなかった。

それから学校側で彩羽に関する臨時全校集会が行われたりしたが、  
授業は滞りなく終わり、放課後となった。

原っぱ

「本当かよ大和!？」

「そんな・・・信じられない・・・嘘よ!」

「まさかな、だがアイツにはそれが出来るからなあ・・・」

大和の報告を受けた翔一、一子、百代が思い思いに口にする。

「俺だつてこんなこと考えたくない・・・でも事実なんだ。」

大和はこんな時でも冷静だった。いや、冷静でいようと努力した。

軍師としてファミリーの皆を不安にさせるわけにはいかない。ドッシリ構える。

それは彩羽から教わったことのひとつでもあった。

「ううう・・・彩羽あ・・・グスツ・・・」

「ほーら泣くなーワン子。おねーさんが抱きしめてやるつ。」

「ワン子は確か、彩羽にかなり懐いてたもんね。やっぱり悲しいよね・・・」

「あたりめえだ!ダチがいなくなって悲しくねえ奴なんているわきやねえだろ!」

確かにここ最近の一子は彩羽に護身術やら何やらと教わっていた。

それが突然消えたのだ、無理も無い。

「彩羽め……私の妹をこうも泣かせるとは、こりやお仕置きが必要だな……」

拳を固める百代の背中もどこか寂しげだ。

「彩羽は、よく解らないけどいい人だった……イジメの時も、隠れてお菓子とかくれた……大和がいなかったら好きになってたかも。」

普段大和以外は滅んでも構わんと公言してる京でも、実際こんなことがあつたら悲しいのも当然だった。

「軍師大和、何か策はあるか？」

翔一が神妙な顔で大和に話しかける。

「正直、小学6年生にどうこうできるような問題じゃない……でも必ずいつか彩羽のことを掴んでやる！」

大和は燃えていた。

風間ファミリー少なくともメンバーを失ったことに悲しみ、落ち込んでいたがまだ完全に諦めてはいなかった。

「私も、川神院やジジイのツテで探してみよう。」

「俺も全力で彩羽を探すぜ！もちろん、自分の足でな！」

「キャンプは中東に行つて間違つて死ぬなんてことないようにね。」  
モロも突っ込みをするくらいの元気が戻ってきた。  
「そうよ！まだ彩羽からは全部教わつてないわ！」  
一子も元氣を取り戻す。

（彩羽・・・お前は今何処にいるんだ？）

大和はひとり、消息不明となつた友に思いを馳せた。

そして、川神院や大和の人脈、翔一の行動力でさえも、組式彩羽を探し出すことは出来なかつた。

月日は流れ2009年、春・・・

大和たち風間ファミリーは地元の川神学園に在学していた。

結局5年という月日を要しても彩羽は見つからなかつた。

しかし風間ファミリーはまだ諦めてはいなかつた。

大和は寮で暇なときは大抵ネットで中東のことを探つたり、情報屋に彩羽のことを聞いたりしていた。  
結果は今のところ全滅。

目撃情報もチラホラとあったがここ一年はその目撃情報もサッパリだった。

「今日もアイツは見つからず……でも諦めないぞ、俺の心は鉄で出来ているんだ。」

軽いジョークすらも虚しい。

そんな時、この寮の寮母である島津麗子（ガクトの母親）の大きな声が聞こえてきた。

「大和ちゃん！なんかお前さんに手紙が届いてるよー！！」

「ハイー！！」

麗子からその手紙を貰い部屋に戻る大和。

「エア・メール……親父か？」

しかし普段なら書いてあるはずの差出人の欄に父親の名前は無かった。

おかしいとは思いながらも封を開け中身を見る。

「ホントに誰からだ？」

文頭には、『親愛なる友、直江大和へ』と綴られていた。

## オープニング（後書き）

そこそこのペースで進行していくので呼んでくれると嬉しいです

2009年4月24日、現れた転入生（前書き）

作者は原作全クリしましたが細かいところまではうる覚えなので原作と同じシーンでも描写やセリフが違うことがほとんどです。



2009年4月24日、現れた転入生

どんなに強い者でも、そう、あの川神百代でさえも逆らえないものがある。

それは、月曜日がやってくるということ！

島津寮

風間ファミリー発足時からの軍師、直江大和は何かにのしかかれることによって目を覚ました。

「おはよう大和、そして好き。」

「おはよう京、お友達で。」

同じファミリーの椎名京だ。

昔イジメに会っているところをファミリーで救ったら惚れられたというなんとも難儀な大和の過去だった。

「むう、後一步だったのに・・・」

「なにが後一步だ、俺にその気は無い。」

「じゃあやっぱり男の気が!?!」

「それはもっと無い!」

京は素直に立ち上がり大和に制服を差し出す。

「はい大和、制服アイロン掛けしておいたよ。」

「サンキユ、助かるよ。」

「前世から続けて来世でも続いていることだもん、もう慣れたよ。」

「出来ればそういう予言はやめてほしい。」

そうこうしている内に部屋に卵型のロボットが入ってきた。

「やあ、もう目覚めてたのかい大和。」

「おうクツキー、おはよう。」

ロボット・・・クツキーは暇だったので大和を起こすべく部屋に入ったのだが京に先を越されたといった感じだった。

「そついやクツキー、キャップは？」

「マイスターなら土曜の夜から外出中だよ。」

キャップこと風間翔一の自由奔放さは相変わらずだった。

島津寮で麗子お手製の朝ご飯を食べ終えた2人は寮の前でもう1人の友達を待っていた。

「よう、大和に京。今日も俺様ナイスガイだろ？」

2人の待っていた男、島津岳人はプロテインを飲みながら歩いてきた。

「よし、行こうぜ京、『2人で』」

「そうだね、『2人で』行こうか。」

2人はガクトをスルーして多馬川の道へと歩き出した。

「俺様が悪かった！だから無視するなーーーー！！！」

ガクトも付いてきた。

京の精神攻撃とガクトのウザ攻撃を華麗に回避しながら大和は先週届いた手紙のことを思い出していた。

## 回想

「『親愛なる……』って、なんだこりゃ。」

大和の下に届いたエア・メールは海外にいる両親による物ではなく、妙に懐かしい感じのする物だった。

『前略 大和、俺を覚えているだろうか。

小学校6年以來だな。

俺は今まで任務の為に中東の某国に居た。

急に何も言わずにいなくなってしまうたのは本当に済まないと思っ  
っている。

モモやワン子には悪いことをした・・・もちろんファミリー全体  
にもだけどな。

だが5年と長かった任務を終えた今、俺は日本に戻ろうかと思っ  
ている。

夕焼けの多馬川が懐かしい。

だけどある理由により川神には戻れても風間ファミリーにはまだ  
戻れない。

よって、ファミリーの人間には接触できないんだ。  
命令でな。

だが例外として1人だけならOKを出された。

だから大和、俺にとって一番の親友と思ったからこそ、お前にこ  
うして手紙を送った。

同時にお前に使い捨てのプリペイドケータイも送った。

こちらから一方的ではあるがコンタクトを取ろうと思っている。

ファミリーに戻れない今、お前しか頼りがいない。

だからファミリーの皆やお前の身の回りの人にはこのことは黙っ  
ていて欲しい。

おそらくお前が手紙を読む頃、俺は成田にいるはずだ。  
探そうとしても無駄だぞ、パスポートは偽造して名前も住所も偽  
名だ。

警察とかからも逃げたせいか何故か俺は犯罪者扱いだからなーH  
A H A H A

だが俺は諦めない。

いつかまた皆で遊べるといいな、あの原っぱで

組式彩羽』

大和は感動のあまり泣きそうになった。

この5年間の苦労が無駄だったことなどなにも辛に感じないほどに、  
友の帰還を喜んでいた。

「アイツ・・・心配、させやがって・・・!」

途中「任務」や「命令」などといった謎の単語もあったが今は気に  
せず、ただ今はもう成田のターミナルで荷物を受け取っているの  
であろっ彩羽のことを想うのだった。

次の日、大和宛てに小包が届いた。

中身は何の変哲も無い黒い携帯電話。

電話帳の中身も着信、発信履歴もゼロの買ったばかりの携帯だった。

そして一週間、その携帯が鳴ることは一度も無かった。

鳴らない、電

話

話 参 第

完！！

回想終了

（あれから彩羽からの連絡は一切無い・・・本当に日本に戻ってきたのか？）

あるいは他の誰かが彩羽を騙って嘘の手紙を送ってきたのか、電話込というなんとも面倒な真似までして。

そう考えると思考は悪いほう悪いほうへと向かってしまっつ。周りのことすら気にかけない程に。

「.....と、.....や、と.....」

「.....」

ガクトの呼びかけにも答ええない。

「大和！！」

「うおおおお！！？」

ガクトの大声でようやく思考の海から上がってこれた。

「どしたの大和？なんか思い悩んでいる様子……」

何故か京は勘が鋭い。

「もう皆と合流する位置だけ、ビシッと決めねえとな！」

ガクトは髪型を整えながら言った。

「っと、そら、モロも来たぜ。」

向こうからモロ……師岡卓也が来るのが解る。

「あ、皆おはようー、今日は早いね。」

モロはマンガの単行本を読みながら歩いてきた。

「おはよう。」

「まーたマンガかよ、お前も飽きねえなあ。」

「本もまともに読めないガクトのような生き物にはマンガも解らないだろうね。」

「京はいつにも増して毒舌だなあ。」

いつもと変わらない日常、しかし大和にとっては一週間前からドキドキしながらこんな光景を見ていた。

多馬川に沿って歩いていたら橋付近に大勢の人間が居るのを見つけた。

「なんだ？あの人ばかりは・・・」

「まさか俺様のファンで皆して俺様を待っていたとか!？」

「無いね、絶対。っていかどう捉えたらそうなるのさ!」

「まったくガクトはしょーもない・・・」

大和たちが近づいていったら一際大きな歓声が上がっていた。

「ん？ありゃモモ先輩じゃねえのか？」

「ホントだ・・・大勢の不良を一瞬で吹き飛ばしちゃったよ・・・」

「モモ先輩の力は異常。大和の息子並みに異常。」

「さりげなくセクハラしないでくれ!」

ギャラリーの連中から可愛い子をナンパし終わった百代が4人の所に歩いてくる。

「おう、お前らー元気そうだなー。」



投げやりな声が飛んでくる。

「いやいやいや、姉さんも元気じゃん。」

「そうだけ、なんなら俺様にも1人分けて欲しいな!」

「駄目だ!世界の美少女は私の下にくる運命となっているんだ!!」

「そんなデステイニー僕は嫌だよ!」

「モロ、デステイニーって言葉好きだよな。」

そんなこんなで5人で変態の橋を渡る。

「そういえば今日はワン子はどうしたんだろうね。」

「ワン子なら私より早く起きて私より早く朝飯を食べて私より早く出て行ったぞ・・・チヨベリバー!」

「全てにおいて遅れてるね姉さんは・・・」

「なんだと!?!最近ジジイが使ってるから安心してたのに!」

「そもそもあの爺さんを基準にすること自体間違っているであろう!」  
「とは皆解っついても口には出さない。」

「そういえば今日S組に転入生が来るってことになってるな。」

「なにい!?!それはマジか大和!」

「落ち着けガクト、（バキッ！）あ……まあ噂にはなってるな。」  
ガクトが沈黙したため百代が続ける。

「私は興味無し。」

「アハハ、京は相変わらずだなあ……でもまだどんな人かは解らないんだよね。」

情報通のモロでも転入生のことは解らなかつたらしい。

「でもS組だろ？どうせ上から見下した変な奴しかいねえよ。」

復活したガクトが悪態を垂れる。

「まあどうせそうだろうけど……でも敵が増えるってことは俺達にとって不利になるってことだと思っぞ。」

大和は常に客観的に物事を捉えようとする。

「まあ、見てみないことには始まらないよね。」

「よし！可愛い娘だったら私が連れて帰る！！」

「姉さん、そういうのはファンの連中にやってくれ……」

「ソイツも私のファンにすればいい話だ。」

彼女の中に自分のファンにならないという可能性はゼロだった。

橋も渡り終え、5人は川神学園の校門をくぐって下駄箱で別れた。

大和は転入生の情報を得るため单身職員室へと来ていた。

「さうとと、敵情視察敵情視察つと……って、アイツか？」

2・5の担任である宇佐美巨人と話している男子生徒、彼がその転入生のようだった。

「男、か……身長は高めで、髪も少し長めだな……切り揃えてはいるけど……」

モノローグに代わって大和が説明をしてくれた。

「まあアイツからは姉さんとかと同じようなオーラは感じないから危険性はゼロつと。」

大和はメモをとりながら職員室を後にした。  
しかし大和は気付いてはいなかった。

観察する対象に観察されていたことを……

## 2・F教室

「おはようー。」

大和が教室に入ってきた。

「おっはよー大和！」

元気よく挨拶してきたのは川神一子。

トレードマークのポニーテールがピョンピョンと跳ねている。

「おう、おはようワン子。今日も走ってたのか？」

「うん、今日も今日とて、タイヤ4つつけて多馬川を爆走してたわよー！」

一子がドヤと胸を張る。

(やはり姉さんと違って胸を張っても出るとこ出ないな)

大和がそんなことを考えていると横から声をかけられた。

「おはよー、ナオっち。今日は随分遅かったわね。」

クラス一の美貌を持つと言われている、小笠原千花だ。  
少しパーマのかかった髪を弄くっている。

「今日はS組に転入生がくるらしいからね、ちよいと観察に行ってきた。」

「え、S組に？男だった？女だった？」

「男だったけど・・・」

「マジで！？イケメンで優しいお金持ちだったらいいな」

かなりハードルの高い査定だった。

「ケツ、スイーツはすぐに現実にありえない希望的発言をしゃがる、ちつとは学べってんだ。」

クラスを代表するオタ……大串スグルが聞こえるように呟いた。

「アンタのようなオタの望むものと一緒にしないでほしいんですけど」

千花はあえてそのケンカを買った。

「一緒だと！？ふざけるなよ！貴様らスイーツのスカスカの脳みそで考えた低レベルなものより二次元は劣ったりしない！！同列にするな汚らわしい！！」

「あーハイハイ、オタの言うことが次元違いすぎて解らないからパスでー」

千花とスグルはたまにこのような言い争いをしていた。

「はいはい、2人とも、もうすぐ予鈴ですから着席しましょう！お姉さんからの命令ですよ！」

2・Fの良心ともいえるクラス委員長、甘粕真与が2人を着席させる。

アクの強い2・Fをここまでまとめたのだから彼女の功績は十字勲章ものだろう。

「チツ、命拾いしたなスイーツ・・・」

「とつくに死んでるような目をしてるアンタには言われたくないわ。」

「もう、2人とも！怒りますよ！」

真与の言葉を受けて2人は今度こそ席に座った。

「で、転入生の野郎はどうだったよ大和？」

ガクトが座ったまま大和に聞いてくる。

「背が高かったな・・・180はあったかも。」

「ほう、1度俺様と勝負してもらいたいところだな。」

「でも姉さんみたいなオーラを感じなかったからすごく弱いと思うぞ俺は。」

「なあに、デカイ相手を倒すことに意味がある！その後は尾ヒレが付いて俺様をより輝かせるさ。」

随分頭の弱そうな発言だった。

「まあそれは置いて、転入生についてどう思う、源さん？」

「なんでそこで俺に振るんだ！」

大和の後ろの席にいた新ジャンル・優しい不良こと源忠勝が机を叩く。

「いや、結構興味ありそうだったから。」

「俺が知るか！・・・男でも女でも、S組に編入できる程の奴ならそれなりに油断できねえんじゃねえか？」

答えてくれたことによって源さんのいい人度が上がった。

何気に一番、まともな意見を出してくれていた。

源さんが机に突っ伏すと同時に予鈴が鳴り、クラスの担任である小島梅子が入ってきた。

「きりーっ！」

真与の号令でクラスが軍隊のようにキリツと立つ。

「きおーっけー、れーい！」

生徒が座ったのをみて梅子が出欠を取り始めた。

1人を除いて。

取り終わった瞬間にヨンパチこと福本育郎が入ってきたが、時既に遅く梅子の愛の鞭によって制裁されていた。

それでも彼は幸せそうだった。

このクラスには権力者や成績優秀者など学校でエリートばかり集めたクラスだった。

しかしそれ故に生徒1人ひとりの個性が強く、纏まりが無く競争ばかりの孤独で辛いクラスでもあった。

そんなクラスの担任を任されたのだから宇佐美巨人は嘆きを止められなかった。

「おい皆ー、座っているようだから静かに聞いて欲しい。」

宇佐美の言葉に生徒のほとんどが反応する。

一部自分のペースを崩さない人間もいたが。

「皆も知ってると思うが今日はこのクラスに転入生がくることになってる。」

生徒たちの反応は様々だった。

「ほう、編入試験をSで通るとは・・・中々の奴なのじゃ。」

「フハハハハ！その者の心意気やよし！盛大に歓迎してやろうじゃないか！！」

「流石です、英雄様ー！！」

「フフツ、転入生は可愛い娘かカッコイイ人がいいですねえ。」



「若、その発言は色々危ないからやめてくれ。出来れば俺は幼児体型の女子がいい！」

「準のロリコーン、アハハハハ！」

十人十色という言葉が似合うクラスだ。

それ故に宇佐美は担任に選ばれたのであろうか。

「焦らすのもなんだしな、それじゃあ入ってきていいぞー」

宇佐美が呼んだ瞬間、前の方のドアがガラツと開く。

そして入ってきたのは大和の見たとおり、背が高く、髪を長めに切り揃えた男子だった。

「じゃあ自己紹介でもしてくれや。」

宇佐美にハイと小さく返事をして男子は黒板に名前を書いて生徒の方を向く。

「彩川羽月いろかわはづきです。テキストに実績が欲しくてここに来ました。宜しくお願ひします。」

羽月は緊張するでもなくドンと構えるでもなく、落ち着いて自己紹介をしていった。

2009年4月24日、現れた転入生（後書き）

またオリキャラ出すのかよ！  
と、思った皆さん。

惜しいですw

感想、評価受け付けておりますヨ

7回100点の男(前書き)

岡八郎、ではなく彩川羽月です

## 7回100点の男

2 - S組

自己紹介が終わり、S組生徒の自己紹介も終わり1時間目は宇佐美が気を使わせたのか自習となっていた。

「それで、彩川は何処に住んでおったのじゃ？」

「今までアメリカに居ただけで父親の地元が川神市でここに引越すことになったんだ。」

転入生こと羽月は宇佐美に言われてまだ教卓の横に立っていた。

他のクラスの生徒はS組の生徒は自分のことで精一杯で転入生のことなど興味無しだと思っだろう。

しかしクラス全員がライバルであるS組は新しく来たクラスメイト（ライバル）についての情報収集に抜かりは無かったのだった。

事実、全員が羽月の話を聞いており人によってはメモまでとっていた。

「帰国子女ってやつですね、そそられます。」

「おおお、キツコクシジヨ？」

「ユキにはまだはえーな・・・」

一通り羽月への質問が止んだ後、羽月はおもむろにポケットから何かを取り出した。

「あゝ、やっぱりコンタクトじゃ駄目だな・・・」

羽月を取り出したのは眼鏡ケースで、黒いフレームの四角い眼鏡をかけた。

「目が悪いのか？いかな、我の様に五体満足でなければ勉強など出来んぞ！」

「まったくですね、英雄様。」

「オイオイ、別に目が悪くても勉強はできんだろ。それに五体満足ってスケールデカいし・・・」

「（小声で）ハゲ、お前ちょっと2時間目から出れねえようにしてやろうか？アアン!？」

準の保健室行きが決まろうとしていた。

「いつも眼鏡で・・・カッコつけてコンタクトしてる場合じゃねえわな。」

苦笑しながら羽月は眼鏡をかける。

「ところで彩川よ、編入試験があったはずじゃが・・・そなたは何点じゃったのだ？」

不死川家の令嬢、心が羽月に聞いてくる。

「そついやあの試験ケツコー難しいらしいな。」

「そついえば一度見せてもらいましたが、あれは超高校生レベルでしたねえ……」

井上準と葵冬馬も興味深そうに聞いていた。

「そうだな、少なくとも87点がボーダーラインであつたらしいぞ。」

「たつた今九鬼の諜報部を使って調べましたー」

仕事が速かつた。

羽月は思い出すような仕草をした後で答えた。

「確か間違つてる所は無かつたぞ。」

「は？」

クラスに静寂が訪れる。

「………な、なんだつてー!!」「……」ガタツ!

間違つた場所が無い。  
つまり全問正解。

「じゃあ100点つてことかよ!?!」

「驚きましたね・・・あのテストを100点でパスするとは・・・」

「確か教科は7つじゃったから・・・7回全部100点だということか!？」

「はーちんすっごーい!」

何故かあだ名は『はーちん』だった。

他のクラスの面々もほとんどが驚いた表情で羽月を見ている。

きつと彼らには羽月がものすごくインテリメガネ君に見えているだろう。

「別に、ただの筆記なら参考書とか暗記すればいい話だろ。」

「いや、中学の内容全部と高校1年のところ全部でるテストを暗記とか・・・どんだけ記憶力絶大だよ・・・」

「確か、井上・・・だったかな。今はほとんど忘れただけど期末前に教科書全暗記とかしてるんだ。だから記憶力とかはそんなでもないぞ。」

「準でいいよ、結構お前面白そうだしな。」

羽月は準には気に入られているようだった。

「ほう、準が気に入るとは・・・少し妬けますね。」

冬馬もそうは言っているが満面の笑みだった。

「ま、まあそこそこに頭はいいようじゃが、高貴な身分の此方には遠く及ばぬわ。」

「あれー？なんか震えてるよー、えいつ！」

「ひょうおええええ！！」

凄い奇声を発しながら心は席から跳んだ。

「そろそろ1時間目も終わりだな、俺のことはここまでで後は普通に接してくれや。」

羽月は宇佐美に言われた自分の席……心の隣に座った。

「よろしく頼むよ、不死川さん。」

「ま、まあヨロシクしてやるのじゃ！」

心は胸を張って答えたが微妙に震えていた。

「さつきも言いましたが、葵冬馬です。よろしくお願いしますよ、羽月君と呼んでも？」

「ああ、じゃあ俺は冬馬って呼ぶよ。」

握手を求められたから応えたが、異様に冬馬は手をニギニギさせてきた。

不気味な熱視線を感じた。



「気を付けるよ、若はこつ見えて男でも手を出すからな。」

「えっ!?!」

とつさに手を引つ込めようとする。

しかし冬馬の異様な握力によってそれは失敗に終わった。

「なあに、すぐには手を出しませんよ。私はプラトニックな付き合いを望みますけどね。」

クスリと笑われても全然嬉しくなかった。

「フハハハハ!、我が唯一の友である冬馬が認めたのなら我も中を良好にしてやろう!」

金色のスーツを身に纏った男子がズイツと寄ってきた。

「我は九鬼英雄!いづれ世界を統べる者だ!」

(クキ?あの九鬼か・・・)

九鬼といえば世界に名立たる大財閥の九鬼財閥だ。羽月も多少なりともお世話になっていた。

「九鬼の御曹司か、彩川に聞き覚えは無いか?」

「我は無いが、あずみなら知っているかもしれん。あずみ!」

「はい、英雄様!忍足あずみ、『彩川』を絶賛検索中です!」

メイド服を着た女子がネットブックを使って九鬼の検索エンジンで検索していた。

「そっぴや俺蜂が嫌いなんだけどー」

羽月があずみの顔を見た後で思い出したように言う。

「蜂ですか、私もあまり好みませんね。」

冬馬もあまり慣れてはいないようだった。

「そうそう、特に『女王蜂』とか俺結構苦手なのよー」

『女王蜂』を強調させなおかつあずみの方を見ながら葉月が言った。

一瞬、キーボードをカタカタと動かしていたあずみの手が止まるのを、羽月は見逃さなかった。

「英雄様、彩川羽月見つかりましたー！」

何事も無かったかのようにあずみは英雄にネットブックを見せる。

「ほう、九鬼従者部隊が世話になったというのか・・・」

「昔の話だなそりゃ。」

羽月は昔、ステイシーや李といった九鬼従者部隊の戦いの訓練をさせていた時があった。

何気に彼は軍にもコネクションがあり、米軍にも多少のコネを持っていた。

「ほう、それで在野の位とはもつたいない・・・九鬼財閥に入れ！  
貴様なら高位に立てるであろう！！」

「お誘いは嬉しいけど、もうすぐ2時限目だ。」

そう言った瞬間チャイムが鳴り、教師が入ってくる。

英雄やあずみも自分の席に戻り、羽月にとって川神学園初の授業が始まるのだった。

2 - F

「ハア・・・今頃S組では転入生が来てるんだろっなあ・・・」

「千花ちゃんどうしたんですか？」

委員長の真与が親切に話しかけてくれる。

「うん、いやね、何か気になるのよね」

「ちょっとチカリンその勘当てになるわけ？」

ガングロパツキンのギャル系、羽黒が話しかけてくる。

「なーんかね、一応視察も兼ねてS組に行くわよー！」

「マジかよー！？チカリンやる〜！」

「本気ですか千花ちゃん!？」

真与が心配するのも無理は無い。

S組は元々自意識が高い人間の集まりなのだ。

他のクラスが来ても大抵は見下した態度をとるのでS組に行こうという生徒は中々いない。

「いいのよ、ちょっと見てくるだけだから。潜入よ潜入!」

千花は意気込んで2・Sに向かった。

2・S

千花はS組の生徒に見つかることなく後ろのドアの窓から教室内を観察した。

「さあーって・・・転入生はどれかな?」

そおーっとドアの窓を覗こうとするといきなりドアがガラッと開いた。

「ゲツ・・・ヤバ・・・!」

思わず教室の方に倒れこんでしまう。

倒れたところを笑いものにされる図が千花の脳裏をよぎった。

しかし千花が感じたのは倒れる先の床の冷たさではなく、何か柔らかい布のようなものにボフツと包まれた感触だった。

(アレ?なにこれ・・・?)

「・・・つとと、危ねえな。」

抱きとめられている。

そう感じたのは目を開けてから見えた光景が斜め傾いて見えたのと、肩の辺りに温もりを感じたからであった。

「おーい、大丈夫ですかー?」

(なんだろう、包容力っていうのかな?包まれてる系)

このまま寝てしまおうかと思ったが急に肩をつかまれ現実に引き戻される。

「おいアンタ!大丈夫か?貧血か!?」

「え?あ、イヤ!なんでもない・・・」

千花はその男子生徒に目が合わせられなかった。

急に倒れこんだりして申し訳ないのと、抱きとめられた時の暖かさを心地よいて感じてしまったことに恥ずかしさを覚えているのだ。

「あ、ハイ・・・大丈夫、です・・・あの、転入生の?」

千花は勇気を振り絞って男子の顔へと目線を移していく。

「ん、ああ、転入生の彩川羽月だ。よろしくな。」

目線が顔に行ったとき、千花の脳内がスパークする。

・\*:.:.。 . . : \* . . ( n , ( ) . . \* : : . . : \* ! ! !  
「上玉キターーーー!!」 訳

「わ、私はF組の小笠原千花、よろしく・・・」

「小笠原さん、ね。よろしく頼むわ。」ニコッ

ぐっはああああ!!!!!!

チカは 15の ダメージを うけた

「う、うん・・・それじゃ、行くね・・・」

千花はよろよるとF組に帰還したのだった。

(あそこが2-F、か・・・なるほどね)

羽月は嫌に目を細め、2-Fを見つめていた。

「おーうチカリン、どうだったよ？」

羽黒が意気揚々と聞いてくる。

「グツジョブ！神！！」

「チカリン、アンタ大丈夫？」

本気で心配された。

「大当たりよ！確変よ確変！！」

「ちょ、チカリン、クルシッ！」

首に決まっていた。

「あ、ゴメン羽黒・・・」

開放された羽黒が思いつきり咳き込む。

「アンタ・・・レスラーの娘絞めるたあやるね・・・」

「とにかく！ソイツやばいんだってば！！」

千花の熱弁は次の授業が始まるまで終わらなかった。

「そついえば羽月君は何か武術でもやってるんですか？」

冬馬と昼飯を食べていたらこんな質問をされた。

ちなみに冬馬達3人は弁当で、羽月は学食のあんぱん（十勝100%）だった。

「ん？何でだ？」

「あゝ、お前は川神に来て日が浅かったな。川神市には武術の総本山と言われている『川神院』ってのがあるんだよ。その当主がこの学長だから必然的にこの学園にはえらい強いのがたくさんいるって訳だ。」

準が易しくまとめてくれた。

「なるほどな、だからそついう質問か。」

「で、どうなんです？羽月君。」

冬馬が重ねて尋ねてくる。

「まあ、多少は・・・自分の身を守るくらいならな。」

「ほう、どのレベルで身を守るんでしょうねえ・・・」

「言うておくが一般レベルだぞ、へんな期待しないでくれよ。」

「その時点でフリだと気付け羽月！」

準の突っ込みも虚しくこの後羽月は恐ろしい目に会わされた。



そう、とても恐ろしい目だ。

「クッククク・・・明日の昼が楽しみですねえ・・・」

「とーまー、なんか凄く悪どい顔してるよー」

「悪どい、ですか・・・まあ愉快だからいいでしょう。」

冬馬ははがきのようなものにひたすら文を書いていた。

放課後

S組のホームルームは巨人がさっさと終わらせたいからか重要事項だけ伝えてそのまま終わりにになった。

「さて、私達は帰りますが・・・羽月君は？」

冬馬達3人が共に下校しようとして誘ってくるが羽月はそれに乗らなかつた。

「ゴメン冬馬、俺ちよつと行くところがあるから。」

だが冬馬達は嫌な顔をせずに見送ってくれた。

「おやそうでしたか、ではまた明日。」

「それじゃーな、気をつけて帰れよー!」

「まったね〜！」

「ああ。」

学校を出た後、夕焼けの多馬川の河川敷を1人歩く。

「この辺も、懐かしいな・・・」

S組は良くも悪くも個性的なクラスだった。

この中で自分を保つのは結構な修行になると思ったからこそあえてSを選んだが。

「Fでもよかったかな？」

しかし冬馬達や英雄、心の姿を思い出しその考えを振り払う。

自分で選んだ道なのだ、その道は自分で終端まで持っていく。

それが彩川羽月の決意だった。

そして不意に、羽月はすれ違う男女の顔を見た。

男の方は茶髪に少し跳ねた髪。

そして女の方は青いシヨートヘアー。

こちらには気付いていないようだった。

羽月は振り返り、徐々に小さくなっていく背中を見つめていた。

大和

京と2人で秘密基地に向かう。

夕焼けの多馬川はいつも通りで、でもそのいつも通りを彩羽は見ることが出来ないのが悲しかった。

「うーん、大和が神妙な顔をしてる・・・何かお困りで？」

「ん？いや、何でもないけど。」

彩羽に『ファミリーの皆には黙っていてくれ』と言われている以上京には何も話せない。

そう悶々しているとポケットの中で何かがブルブルと震えピピピピと音が鳴った。

(ん！？これは・・・)

それは、先週彩羽から送られてきた携帯電話だった。

「悪い、京・・・先に行つててくれ、後ですぐに行く。」

「大和？・・・」

いいからと京を先に行かせて大和は震える手で電話に出た。

今自分に電話をかけているのは彩羽だ。  
そう自分に言い聞かせて「もしもし」と声を発した。

『大和か？』

(ッ！・・・彩羽！)

電話越しに聞いた彼の声は、5年前の面影を残したままであった。

7回100点の男(後書き)

「此方」とか「くじゃ」とつけている 心

丁寧喋っている 冬馬

一番までも 準

おちゃらけ 小雪

超上から尊大に 英雄

語尾に、表は従順裏は怖い あずみ

なんて書きやすい連中なんだ2 - S!!!

## 接触（前書き）

クリ？まゆっち？

ええ、忘れてませんともハイ。

ただゴタゴタして脳内から一時的に消去されただけです。

## 接触

『大和だな・・・』

すぐに声が出てこない。

『・・・あと5秒以内で大和と確認できない場合電話を切りもう2度とかけない。返し電話も受け付けない。』

「あ、待って！」

気をつけて言葉を紡ぐ。

「大和だ・・・彩羽なのか？」

電話の向こうからは何も聞こえてこない。  
周りの音を聞いて場所を割り出そうとしたが無駄に終わったようだった。

『ああ俺だ、組式彩羽だ。』

「彩羽！・・・今何処に!？」

『川神市だ。』

その言葉に思わず周りを見回してしまふ。

自分でも焦っていると感じているほどに大和は興奮していた。

『探しても無駄だ・・・大和、今お前1人か?』

「あ、ああそうだけど・・・」

京は先に基地に行かせたし周りでこの道を歩いているのは自分1人だけだ。

『そうか・・・川神は変わらないな・・・』

しみじみと彩羽が電話の向こうで呟くのが聞いて取れた。

大和はまだ川神市を覚えてくれていたことが嬉しかった。

彩羽は昔から冷たいというか無愛想なところもあつたが絶対に自分の信念は曲げず、筋も通すといういい奴だった。

「ああ、川神市も俺達も変わってない。なのに何で俺だけなんだ?」

他のメンバーにも伝えても良いだろうと続けようとしたが彩羽は重なるように強く言ってきた。

『俺だつて皆には会いたい、でも、命令なんだ・・・』

「命令つてなんだよ!?どこからの命令だよ!?!」

思わず声を荒げてしまった。

大和も彩羽とは会いたかつたのだ。

『悪い・・・今は言えないんだ・・・だけど別に悪の組織と手を組んで悪巧みしてるわけじゃないから安心しろ。』



「でも、俺達はお前に会えなきゃ・・・！」

自分だけではない、ファミリーの皆も捜索には協力してくれたのだ。会いたいという気持ちは皆同じだった。

『俺だって会いたいさ、でも駄目だ・・・』

「何が駄目なんだよ！何のために俺達が今まで・・・！」

『・・・』

少しの間痛い沈黙が多馬川のほとりを支配する。

『・・・とにかく、今は我慢してくれ。それじゃあ切るぞ。』

「アツ！ちよつとまつ！・・・切りやがって・・・」

ツーツー聞こえる携帯を耳から離し独り佇む大和。

彼がまた歩みを開始するのは5分ほど経ってからだった。

大和から100mほど離れた場所

羽月は電話し終わった後で二つ折りの携帯を閉じ後ろを振り向いた。

先程までその場にいた大和はもう居ない。

「・・・嬉しかったな・・・」

羽月 - 彩羽はしみじみとそう呟いた。

(だがずっと周りを気にしていたな、見えない位置に移動して正解だった)

大和は通話中ずっとキョロキョロして誰か居ないか確認していた。

(まあ見つかったときにはばれない為の変装だけだな)

視力が悪く、眼鏡またはコンタクトをしている設定をしていたが実際はダテ眼鏡で、髪も昔より少し黒色を足して感じを変えた。

完璧な変装とはとても言い難いが百代などが人間を見分ける手段、『気』の判別を出来ないようにしておいた。

これなら面と向かってじっくり見つめなければ自分が組式彩羽だとばれないはずだ。

「ま、問題はいつ会うかなんだよな・・・」

言いながら彩羽はまた携帯を操作しあるところへと電話する。

3回のコール音の後でつながった。

「よお、元気か?」

『テメエ・・・何でこの番号を知ってやがる!??』

「別にいいじゃねえか、『女王蜂』さんが随分と丸くなったんだな。」

『テメエこそ回りくどい真似をしてくれるじゃねえか、偽造パスポートに偽名ならまだ良かったがまさか戸籍を作つてくるとは・・・アタイも盲点だったぜ』

電話の相手・・・忍足あずみは憎々しげに吐き捨てた。

「いいじゃねえか、中東ではエーベルバツハ共々世話になつた仲間訳だしよ。」

『アレはテメエを助けようとしたわけじゃねえ!!』

「でもエーベルバツハは感謝してるっばかったぞ?」

『ハツ!あの『猟犬』様の感謝をいただけるとありがたいこつたねえ。』

電話越しでも皮肉の念がたつぷりと感じられた。

『で、何のようだよ?アタイはこう見えても忙しくてね、用がそれだけならもう切るぜ?』

「あ、ちょっと待ってくれ。」

『んだよ。』

「俺のことは学園では『彩川羽月』と認識してくれ。」

『つてことは何か理由でもあるのか？』

「ああ、俺の正体を知られたくない奴らがいてね・・・協力して欲しい。」

『さて、どうしようかねえ・・・』

あずみは暗に「なにか見返りでもあるのか」と尋ねてきている。

「ハア・・・解った、こんどそっちの依頼を何か無料で受けてやるよ。」

『お前がそこまでするとはな・・・いいぜ、黙っててやる。』

「恩に着る・・・」

そう言って切るうとするにあずみの方から何か言って来た。

『待てよ。』

「あん？」

『お前、何で川神に来た？』

そついうのは聞かない約束だと言いたかったが彩羽は構わず答えた。

「正確には、『戻ってきた』だ。」

『戻って、来た？』

「見たい顔もいるし、会いたい連中もいるんだ・・・」

思い出すのは、まだ小学6年生だった頃の風間ファミリー。

『・・・本当にそれだけか？』

「!?!」

彩羽は思わず驚きを声に出してしまった。

(クソツ！しくった・・・！)

電話越しにあずみがしてやったりといった顔をしているのが容易に想像がつく。

『まだまだ青いなお前は・・・まあいや、その面白い声を聞けただけで儲けモンだぜ。』

「・・・切るぞ・・・」

ああ、というあずみの声を最後に、彩羽は電話を切った。

「クソツ!!」

自分でも驚いた。

ファミリーのことを考えるだけでこつこつ冷静になれないとは思わなかった。

( まあいい、これで学園では問題なし・・・後は )

彩羽は歩き出す。

「 寝床の確保だな・・・ 」

彼はまだ浮浪者だった。

## 接触（後書き）

短いですが今回はここまでです。

ええ、羽月は彩羽でしたw

自分的にはもうちょっと引張ってもいいかな？と思いましたが恐らく皆さん丸わかりだと思ったのでw

今回は4月25日火曜日です。（お話の中的な意味で）

## 日陰者同士の決闘（前書き）

26日にはマジ恋Sの公式サイトでついに紋白様のボイスが明らかされます！

準「九鬼紋白・・・なんてカリスマだ！！」



## 日陰者同士の決闘

6月25日火曜日 島津寮

今日も今日とて目が覚めて真っ先に目撃したのは自分に襲い掛かるうとしていた京の姿だった。

「おはよう京、先に飯食ってるから。」

「アアッ！状況に突っ込まない場慣れした大和も素敵！」

クネクネしている京をよそに大和は食堂に向かった。

「お、おはようございます！」

「ウオッ！・・・ああ、おはよう・・・」

入学式の時に学園敷地内でぶつかり刀を持っているからと警察に通報したが実は勘違いだった、という衝撃的な出会いを果たした後輩の黛由紀江が話しかけてきた。

「やりました松風！ちゃんと挨拶できました！」

『流石だぜまゆっち！このままABCと済ませちまおうぜ』

「そ、そんなふしだらな・・・！」

『甘い、栗羊羹より甘いぜまゆっち。こういう年頃の男子はとりあえず体で落とすのがセオリーってもんなんだ！』

「か、体で・・・ゴクリ！」

由紀江は何かと話しているようだったが傍から見たらただ独りでブツブツ言っているようにしか見えなかった。

「それは無理だね、大和は色仕掛けじゃ絶対に堕ちない。それは私とモモ先輩が実証済み。」

「そう言いながら俺の下腹部に手を当てるのは止めなさい！」

「あう、惜しい・・・」

「ごちやごちやうるせえぞテメエら！メシよそってやったから早く食え。」

同じ寮に住んでいる源さんが2人分の朝ご飯を用意してくれていた。

「流石源さん！俺らの源さん！！いい人過ぎるぜ！！」

「うるせえ！さっさと座れ！」

大和は喜びながら、京は無言で自分の席についてご飯を食べ始める。

由紀江はもう食べ終わったらしく「い、い、い、言ってきますでござりまする！」と意味不明な挨拶を残して出て行った。

忠勝は食べている途中に2人の分のご飯をよそったようだった。

「まさか源さん、俺らがきたからわざわざ・・・！！」

「勘違いすんじゃないやねえ、お茶を取ろうとしたついでによそっただけだ。」

そう言いながらも忠勝の手元にお茶は無かった。

「やっぱり麗子さんの焼くほっけは最高だな！源さんの少しちょうだいよ。」

「ふざけんな！俺も食うんだよ！！」

「むう……」

しばらく無言の食卓が進む。

その均衡を崩したのは忠勝だった。

「チツ、急に黙んじゃないやねえ！飯が辛気臭くてまずくなるだろうが。」

言いながら忠勝は、自分の皿からほっけをひと塊大和の皿に移したのだった。

「やっべえ源さん！アンタ輝いてるよ！！」

「勘違いすんじゃないやねえ、お前が態度を変えるから面倒くさかっただけだ。」

「流石源さん！！」

今日も島津寮の朝飯風景は平和だった。

島津寮隣、島津家（ガクトの実家）

「ほーらガクト！お友達もつ行つちまうよ！？」

「ま、待ってくれよ母ちゃん！あと2分で今日の朝のメニューが消化できるんだ！」

「そんなん知るか！オラオラオラオラ！！」

「なっ！？扉をラッシュで破るんじゃねえ！」

「オラ！降りて飯だ飯！！」

「いででで、耳を引つ張んなよ！」

家一軒違っただけで温度差は特大だった。

川神学園

結局晩飯を買う金はあるってもホテルの一室を借りる金は無かったの  
で彩羽は学校側には内緒で2・Sの教室で寝泊りしていた。

机を10個ほど固めて置いた上にアウトレットで買った敷布団を乗  
せれば簡易ベッドの完成だった。

戦場に長期間いた彩羽は目覚ましなど不要で、起きる時間をコント

ロールできるといふ特技を習得していた。

「・・・予定通り、7時か・・・」

まだ重たい瞼に鞭を打って起きる。

「ふあ、ああああああ・・・ねみい・・・」

布団を壁に作った隠しスペースにしまい、机の位置も元に戻す。

窓から朝日を見ていると、校門に人影を見つけた。

「女子か・・・刀？」

その女子は何か棒状の物を入れてある紫色の布を持っていた。  
そういう物の中には大抵刀が入っているものだった。

「剣道部か？イヤ、朝練は今日は無かったはずだ・・・」

この生活を誰かに見られないためにも、部活動の朝のメニューに応じて起きる時間を変える。

それが川神での組式彩羽の朝だった。

「さて、あの謎少女の観察にでも行きますかな。」

1 - C

由紀江は誰もいない教室で独り松風と話していた。

「今日こそ、お友達を、作ります!!」

(なんだ?この女子・・・)

彩羽は気配を消してドアの窓から教室を覗いていた。

『でもよーこんなに早い時間に来てどうするんだよ、寮に居た方がまだ良かったんじゃないか?』

(け、携帯ストラップが喋ってるー!?)

悲しいかな突っ込み所を間違えていた。

「いえ、今日は秘策があるんです・・・!」

『ま、まゆっち・・・燃えてるぜ、後ろに仁王像が見えるくらい燃えてるぜ!』

(あのストラップ・・・何者!?!・・・まさか!携帯ストラップに見せかけた小型無線機!?)

「ええ、狙いは近くの席の大和田伊予ちゃんです!」

『おお、あのいつも大福を美味しそうに食べてるあの子か・・・実はオラ、あの子結構タイプなんだぜ・・・』

「ま、松風!?!」

『安心しなよ、それでもオラはまゆっち一筋なんだからな・・・』

「松風……！」

(オイオイオイ、なんか甘酸っぱくなってきてんじゃんよ……)  
何故かハンカチを用意していた。

「でも、大和田さんに話しかける機会どころか、目を合わせる機会さえも無いこの状況……芳しくないですね。」

『いつそイキナリ「伊予ちゃん」とか呼んでみればいいんじゃない？ 絶対ステイニー感じちゃうぜーそう言われたら。』

「い、いきなり下の名前など！ 私にはハードすぎます!!」

『そこを突くんだよ！ いいか、人間にはな、『モテ期』ってのがあ  
るらしいぜ。』

「うっ……なんか島津さんと言ってること変わりませんよ。」

(しかし、彼女は何者なんだ？ 無線で連絡をとってるってことは、  
どこかの組織に所属してるのか?)

『でもなあ……このままじゃああの『計画』の成就なんて夢のまた夢  
だぜ。』

(計画!?! フハハハハ! ついにボロを出したな、謎の1年女子!!)

「うっ……100人への道は遠いです……」

(やはり学園に派遣されている諜報部員は1人じゃなかったんだな・

・・・)

『なーに、まゆっちは可愛いから誘えば一発でオスはメロメロだぜ！かくいうオラも・・・』

「ま、松風いけません！つてあうっ・・・！」

『うへへへ、まだ朝早いからここには誰もこないんだぜ・・・』

「松風・・・教室でだなんて・・・でも、松風がどうしてもというのなら・・・」

絵でお見せできないのが残念でなりません！！

(つてあの子いきなり何を！？)

その時だった。

突っ込みすぎた彩羽はツッコミを体で表現せずにはいられなくなり  
つついドアを叩いてしまったのだ。

「何奴！？」

由紀江は慌てて立ち上がり、ドアの方へと体を向ける。

(やべえ！・・・逃げるか？)

「逃げてても無駄ですよ、私の気の探知は4キロ四方まで可能なんですから。」



(クソッ！万事休すか・・・！？)

意を決して彩羽はドアをガラツと開けたのだった。

「フハハハハ！よくぞ見破ったな、謎の1年女子よ！！」

「なっ、本当に誰ですか！？」

由紀江が驚くのも無理は無い。

なにせ彩羽が転入してきたのは昨日のことなのだ。

しかも普段顔を合わせない2年に重ねてS組という知り合わないコンビを連発させている。

彩羽の存在はイレギュラーだったことだろう。

彩羽は何故か手を顔の前にやるといふスターのようなポーズをとって話しかける。

「貴様が何処かの組織に所属しているということは既に解っているのだ！最早隠す必要もないぞ？」

ついでにこの喋り方も必要ないよな、と心の中で毒づいてみるが今更なので変更はしない。

何気にこのポーズ自体は気に入っていた。

「そ、組織？？」

「とぼけるな！計画がどうのこうのって言ってたのを聞いたんだぞ。」

「

先程の会話で既に裏は取れている。

「う、そ、それは・・・」

由紀江は顔をカアアアと赤らめるが答えないことによつて彩羽はますます自分の推理が当たったものだと思つて気を良くする。

「まあ理由はそれぞれにあるしな、今のところは見逃してやる。」

「え？いいんですか？」

『オイオイオイ、実はおめえ結構いい奴なんでね？』

「なつ！まさか今の会話は無線機を通して盗聴されていたというのか！？」

彩羽が松風を見て驚く。

「あ、ご挨拶がまだでしたね、私は1年C組の黛由紀江です。よろしくお願ひします。ほら松風も。」

『オツス、オラ松風。まゆっちの親友だぜ』

「あ、俺は2 - Sの彩川羽月だ。よろしくな。」

「2年生の方でしたか、通りで見ない顔だと。」

（いや、昨日転入だから見なくて当たり前なんだけどね・・・）

「ん、ああ・・・でも今の会話を聞かれていた今、君を見逃すわけにはいかなかった・・・」

『さつきと殺気の量がチゲー！ねえねえいま』さつき『と』殺気『をかけたんだぜ、中国でも真似できない高等技術なんだぜー！』

「松風、たしかに面白いですが今この場所ではそれも場を和ませられません。」

(いや、普通につまらなかつたんだが・・・そりゃ中国も真似したくないだろうよ)

『お前今不届きなこと考えてたろ？』

「え！？いや、別にそんなことはないでござるよ・・・？」

『いや、オラには解るぜ、お前はどうせ全然面白くねえと考えていた。違うか？』

「自覚してたなら最初からやるなよ！」

『やっぱり思ってたんじゃねーかー！ムキー！！』

「ま、松風！？」

『こつなつたら・・・その薄汚いツラを剥いで校門に吊るしてやる・・・怒つたオラはホンキだぜ？』

松風の目が妖しく光った（気がした）。

「まさか・・・無線機としてではなくカメラまで付いているのか！  
？ということは何処かの本部で解析・・・・・・・・早  
急に手を打たないとな。」

彩羽はさつきとは全く異なる、冷たい視線を由紀江に浴びせた。

(・・・ッ！！やはりこの人、強い・・・！それに本気だ！)

由紀江は襲い掛かる視線に耐えながらも刀をいつでも抜けるように  
準備する。

「その刀ぬいたら本当に容赦しねえぞ？」

彩羽は見たところ丸腰。

だが由紀江は直感で服の下に何かあると確信していた。

「構いません、私は負けませんから。」

『まゆつち舐めんなよ！こつ見えても内なる衝動は東北屈指なんだ  
ぜ！・・・！』

由紀江は躊躇うことなく刀を抜いた。

「強気じゃねえか・・・なら！」

彩羽が軽く跳び一気に由紀江へと接近する。

由紀江もそれに応戦すべく構え・・・

「ホイ、そこまでじゃ。」

突如現れた老年の男が2人の間に割って入る。

「なっ!?!」 「えっ?」

ぶつかりそうになった彩羽と由紀江をそれぞれ片手でいなし笑ってすます老人。

「ほっほっほ、2人とも血気盛んじやのう。」

「えーっつと……」

彩羽は思い出せず言葉が濁すが由紀江はすぐに彼の正体を思い出した。

「あ、学長!」

「あ、そうそう、学長学長!」

彩羽も思い出し調子を合わせる。

「彩川、お主忘れておったな……?」

「ウツ……」と発してから彩羽は学長 - 川神鉄心の方を見る。

あまり怒ってはいない感じだった。

「強い気を感じて来てみれば……お主達決闘の儀礼はしたのか?」

決闘。

川神学園の中で唯一生徒同士が合法的に戦える場である。

「決闘、やるんですか？」

彩羽は渋った。

ここで黛由紀江という不安要素を合法的に排除出来るならそれに越したことはないが万が一学園生が見てる前で本気を出してしまったらこれからの学園生活がやりにくくなる。

主にMOMOMOYO関連で。

「しかたねえ、やるよ。」

このままでは由紀江が所属している（と彩羽が勘違いしている）組織（彩羽が存在していると思っ込んでいる）の情報得られない。

多少の不自由を感じるようになってもここは受けるのが得策だと思えた。

彩羽が自分のワッペンを由紀江の席に置く。

そして由紀江は自分のワッペンを彩羽のそれに重ねるように置いた。

「うむ、立会人はわしがやろう。種目は何がいい？」

「勿論、ガチンコ勝負。」

「黛はそれで問題ないかの？」

「ええ、問題ありませんけど……」

「どうした？何か気乗りせぬことでもあったのか？」

「いえ、何で私彩川先輩の決闘受けたんだろって……」

彩羽が口を挟んだ。

「黛、男が勝負事をするのに理由なんざいらねえんだよ。」

「あの、私、おんな……」

彩羽は自分では決めた気になっていたが実際は結構空回りしていた。

(フム、彩川はもう少し冷静沉着キャラかと思っていたのじゃが・  
・なかなかどうして違うものじゃのう……)

「では、勝負は朝のHRが終わってからグラウンドで始めるぞい！  
各々それでよいな？」

「ああ」「はい」

2 - F

「それでこんなに話題になってるんだな。」

大和はヨンパチから聞いた『2-Sの転入生彩川vs1-Cのブラックホース黛』という決闘カードのことをガクトと話していた。

「ああ、話によると人の少ない朝早くから2人は会ってたらしいぜ。」

「随分裏のありそうなバトルだな・・・」

「まあ、俺様はS組の奴も年下の女子にも興味は無いけどなあ！」

「ガクトってそういう目線でしかものごとを見れないのかなあ。」

モロが苦笑しながらツッコミする。

「でもよお、黛ってウチの寮の住んでるんだろ？俺様、どうせ応援するならそつちだと思っただが。」

「まあそれが通りだろうけど。」

「キャップがいたらこれも賭けにしたんだろうけどなあ・・・」

モロの言葉に大和はこの勝負を見れない翔一に同情した。

違う場所では千花や真与が決闘について話していた。

「やっぱり彩川君の圧勝だつて！相手は1年なんだし。」

「千花ちゃんは彩川君のことばかりですね。」

「アレ？もしかしてマヨ、嫉妬してる？」



「いえいえ、お姉さんとして寛大な心を持つ私は彩川君を応援する  
千花ちゃんを応援します！」

「フフツ、ありがと、マヨ。」

（スイーツはS組側か、なら俺は全力で1年を応援しよう）

スグルはヨンパチと満を集めてこちら側につけようとしていた。

「やべ、もうすぐ予鈴だ。」

誰が言ったかその台詞にクラス全員が席に着く。

梅先生の圧倒的な指導力の賜物だった。

2 - S

「よお羽月、なんだって1年と決闘ってことになったんだ？なんだ  
って年下とバトルになんてなったんだ!？」

「ちよ、近い、近いよ準。」

「まあまあ、羽月君にも並々ならぬ理由あったことでしょう。」

「はーちん、頑張つてねー!。」

「あ、ああ頑張るよ。」

改めて『決闘』のスケールの大きさを知る。

昔百代に決闘を挑んだ男子生徒が病院送りにされてそのまま出席できず退学になったらしい。  
なんとも恐ろしい話である。

「のう彩川、相手はどうでもいいとしてこの勝負は勝てる勝負なのかや?」

隣の席なので羽月と心が話す機会は結構多かった。

「うーむ……正直な話解らないな……」

「というかお前、まともに戦えんのかよ? 悪いが俺から見たら結構勝算薄い気がするんだが……」

準が心配そうに言うてくる。

「まあ相手はかなりの使い手と見て取れたからのう、彩川よ、骨は拾ってやるから安心して殺されてくるのじゃ!」

「縁起悪いわ!」

「フハハハハ! 彩川よ! 王である我がの応援があれば勝てないものなどない!」

「これで負けたら……解ってんだろ? ア?」

英雄からはありがたい応援が、あずみからは半ば脅迫じみた応援が届いた。

(まあ、コイツに限って負けはありえないだろうけどな・・・)  
あずみだけは彼の決闘を楽観視していた。

「ほーら、予鈴はもう鳴ってたんだ。早いとこ席に着け、決闘も大事だがまずは目の前のHRに集中しろ。」

巨人が入ってきて皆が席に着く。

彩羽は別段慌てることなく事態を静観していた。

1 - C

「ま、黛さん大丈夫なの？先輩の決闘なんかうけちゃって・・・」

勇気のある女子生徒Aが由紀江に話しかけた。

「え？ええ、負けたくはないから一応ちゃんとやりますが。」

「へえー、黛さんって結構強さとかに自信あるの？」

「特に自信というほどではありませんが・・・」

「でも、やるからには勝ってよね！応援するよー！」

「あ、ありがとうございますー！！」

もうすぐ予鈴だからと女子生徒Aが去っていった後で由紀江は松風

に話しかけた。

「やりました松風！皆が注目してくれてますよー！！」

『決闘つてすげえんだな、いつそ決闘しまくって自分を売り出せはよくね？』

「そう軽々しくするものではありませんよ、決闘とは大切なものなのです。」

案の定由紀江は早速クラスに少し引かれてた。

「ちよ、黛さんまたストラップと・・・」

「結構話しやすくもいい人なんだけど、アレがねえ・・・」

友達100人計画はまだまだ前途多難だった。

2 - F

「全員いるな、よろしい！」

梅先生の出欠とりも終わり、連絡事項にはいった。

「今日はHRが終わったら決闘がある。2 - Sの転入生の彩川羽月と1 - Cの黛由紀江だ、といっても皆知っているようだがな。」

梅先生は淡々と連絡事項をこなしていった。

「最後に、今週の金曜日にウチのクラスにも転入生が来る。」

おおおおお？

ざわざわとするクラスに梅先生の鞭が音を立てる。

「静かに！転入生はドイツのリューベックから来る。何か質問は？」

千花がハイと手を挙げて質問する。

「男ですか？イケメンですか？お金持ちですか！？」

「女ですか？美人ですか？胸ありますか！？」

ガクトも負けじと質問する。

梅先生は落ち着いて答えた。

「フフ、ヒ・ミ・ツ！」

「「「「「「」」」」」」」

「まあ、ともかく金曜日を楽しみにな、以上！」

梅先生が出て行った後クラスが騒がしくなる。

「はあ、あの先生は時々意味不明な冗談をかますから怖いぜ・・・」

「何言ってるんだよ！時代は転入生の話題だろ！？」

ヨンパチが興奮しながら近寄ってくる。

「女だといいな、ナイスガイな俺様に釣り合うくらいなの。」

「そうだな、美人で巨乳だったら俺絶対女にして揉みまくるぜ！」

程よくヒートアップしたあたりでアナウンスが入る。

『もうすぐ、2 - Sの彩川君と1 - Cの薫さんの決闘を行います。  
5分後にグラウンド。ただいまより……』

「おっとそうだった。決闘だったな。」

皆が思い出したように教室を出て行く。

だが大和は転入生について考えていた。

(コイツは……儲けられそうだな、キャップに連絡いれておくか  
……連絡つくか解らないけど)

大和は考えた謀略を翔一にメールで教えておいた。

## グラウンド

「朝飯代わりの料理はいかがー？お安くしておくよー？」

料理部が一儲けしようと思当を用意するほどにグラウンドには人が集まっていた。

「久しぶりに学長立会の決闘が見られるぜ！」

「ああ、どっちが勝つんだろっな!？」

「1人は未知のS組転入生、もう1人は未知の一年生・・・見物だな!！」

グラウンドはトラックに柵を設けその内側で戦えるようになっていた。

「おお!出てきたぞ!！」

彩羽と由紀江が校舎から出てトラックの内側に向かっていく。

「アレがS組の転入生か・・・」

職員室で見た時と同じだったが唯一の違いは眼鏡をしていることだった。

「なあ大和、どう見てもこりや黛が勝つちまう気がするんだが・・・」

「イヤ、そうとも限らないぞガクト。」

「ウオツ!?!?モモ先輩か。」

「オツス、おらモモヨ。今からわっくわくすっぞ!！」

百代が後ろから大和を抱きかかえてトラックの中を見る。

「で、何で姉さんは彩川とかいうのが強いと思うんだ？」

百代がいつになく真面目な顔をして答える。

「見てみる、黛もそうだが彩川とか言うあの転入生も全く隙が無い。

」

「確かに強そうに見えるね。」

京も同意する。

「フム、中々どうしてあの黛とかいう女子、強そうではないか！」

「そうですね、英雄様！」

「彩川ー！もし負けたら高貴なる此方が下半身の間接をすべて外してやるから期待してるのじゃー！！！」

心声を聞こえていない振りをして彩羽はトラックの中に入った。

「ユキはどっちが勝つと思いますか？」

「うーん・・・解らない！」

「ほう、ユキが悩むほどのバトルとは、興味深いですね。」

「まあ俺らは羽月を応援するだけだわな。」



トラック内

「2人とも準備は済ませてきたようじゃな、此度の決闘はわしが審判をとる。『まいった』と言うかわしが戦闘不能と思ったら負けじや。もし終わっても相手に攻撃を仕掛けようとするならわしが止めに入るからそのつもりでな。」

2人は無言で頷く。

2人とも制服だったが由紀江はすでに刀を袋から出していた。彩羽は何も持っていない。

「黛は刀、彩川は素手でいいかの？」

また無言で頷く。

嵐の前の静けさと言っていいほどの静寂だった。

「それでは、今より決闘を始める！！」

その言葉にギャラリィが沸く。

「いいぞー！」「やれー！」

「西方、彩川羽月！」

「ああ。」

「東方、黛由紀江！」

「ハイ！」

「各々準備はいいな？それでは・・・」

「行くぞ？」

「構いません、本気でくるといふのなら本気で相手仕るのが礼と  
いうもの。」

彩羽は笑って由紀江を正面から見据える。

隙が無い。

どう崩しているのか考えている時にその合図は起った。

「はじめー！！」

## 日陰者同士の決闘（後書き）

念のためですが彩羽が言ってるまゆっちの「組織」とか松風無線機説はまったくのデタラメです。

感想・評価お待ちしております。

日陰者同士の實力、それぞれの真剣（マジ）（前書き）

今回は長いです。

そしてまゆっちがすぐく真面目といつかやるときはやる娘といつか

## 日陰者同士の實力、それぞれの真剣（マジ）

川崎市郊外

「ふぁーあ・・・ねみい・・・」

バンドナをした少年が川原で寝転がっていた。

傍らに転がっているビニール袋にはネギがたくさんつまっている。

「メシ屋では変な野郎のせいできいっばぐれるし、なんかソイツ倒したらテレビとかなんとか言ってくるし・・・」

その時、彼の携帯が鳴った。

「お、大和からか。なにになに・・・ほうほう、転入生ね・・・」

彼はニヤリと口角を上にする。

「こいつぁ儲けの時間だぜ！」

立ち上がったところでもう一通メールが入る。

「お、今日は用が多いな。」

差出人はまた大和。

「なにになに・・・決闘？」

大和は彼に決闘のことも送っていた。

「へえ、面白そうじゃねえか。」

彼の顔が好奇心で満ちる。

「よし！行ってやろうじゃないか、風の様になー！」

そして彼は本当に風のようにその場を後にしたのだった。

### 川神学園

対戦者の2人はそこに立ち止まったまま動かないでいた。かれこれ5分はこれが続いている。

「なんだ、2人は戦わないのか？」

「いや、既に戦いは始まっているさ……」

大和の呟きに答えたのは百代だった。

「2人はお互いを気で攻撃している。」

「てことは2人の間には見えない攻撃が飛び交ってるのかよ？」

「そつだ、ガクトやるなあ。」

確かに2人はまずお互いを気で牽制し合っていた。

(気の量と質は私とほぼ同等、こんな人がいただなんて・・・！)  
気に関しては自分に自信があった。

川神百代は別として気では父親ですら凌駕していたのだ。

そこに現れた自身の先輩はいとも既に自分の領域に達している。

少なからず由紀江は衝撃を受けていた。

(気での勝負はほぼ同等・・・強いなコイツ)

一方彩羽は由紀江の底知れない強さに驚いていた。

おそらくここまでの猛者は人生の中では中東でやりあったマルギツテくらいしかいないであろう。

(潜在能力だけならおそらく四天王入りはできるだろうな)

由紀江の強さに気を引き締めつつ最初の拳動を決める。

「来ないのか？なら・・・！」

(ッ・・・来る！)

由紀江は刀を正面に構える。

今回の決闘のために学校側から用意された刃を潰したレプリカだが

充分に威力はある。

「おとなしくしてなよ！」

彩羽が由紀江に飛び掛る。

あくまで低空のジャンプを使い瞬時に懐に潜り込もうとしていた。

( 迅い、でも対応できない程じゃ！ )

由紀江は半歩退いて剣を構える。

その動きは彩羽の拳が由紀江を捉えるより迅かった。

「チツ、中々にやる！」

彩羽は急いで刀のリーチ外に出る。

しかし由紀江は素早く距離を詰め横薙ぎに刀を振った。

それをしゃがんで回避した彩羽はそのままアッパーの体勢をとり由紀江に殺到する。

しかしここで彩羽の誤算があつた。

それは由紀江が体勢を元に戻すのに1秒ほどかかると思っていたこと。

しかし由紀江は彩羽の計算を遙かに上回る0.2秒で体勢を戻し迎撃の構えをとっていた。



「なッ！ 迅いなオイ！」

すぐさま攻撃をやめ避けようとするも間違はなく避けている間に由紀江の剣が自分に到達することを悟った彩羽はそのまま攻撃を受けとめる決意をした。

（避けない？ でも容赦はしません！）

勢いを重ねてそのまま彩羽に上段からの剣撃を当てようとする。

このままいけば彩羽の肩に命中し鎖骨を持っていくはずだった。

だが、

「秘技、片手白刃取り。」

その刀は彩羽が直前で左手で受け止めていた。

「「「「「おおおおお！？」」「」「」」

周囲のギャラリィに動揺が奔る。

由紀江の必殺の太刀筋を片手で止めたのだ。

見てるほうとしてはかなり面白い戦いだっただ。

「す、すげえ……」

「やるなあ、あの2人……どっちも下手したら四天王レベルかも知れないぞ。」

「そこまで行く？」

百代はあの2人をみてゾクゾクしていた。

あの2人と戦ってみたい。

そんな思いが脳内を駆け巡る。

(どっちもなんて贅沢なことと言わないからどっちかでも！)

そんな百代を放っておくかのように2人の戦いは続いていた。

両手で刀を振り下ろした由紀江と違い、片手で止めた彩羽は腕が1本フリーなのだ。

「もらった！」

渾身の力を込めて由紀江の脇腹に右フックをいれる。

「う、はぁ・・・」

由紀江の体が軽々と吹っ飛んだ。

寸前で彩羽が刀から手を放していたために逃げられたもし彩羽が刀を放さなかったらおそらく由紀江はさらなる蓮撃を加えられていたことだろう。

それでも彩羽は敢えて逃げ道を作った。

「おお！入ったぞ！！」

「すっげえ飛んだな！！」

「こりゃあの1年立てないんじゃないのか！？」

ギャラリィは彩羽の勝利を確信するが、彩羽は静かに由紀江を見据えていた。

「立てよ、こんなもんじゃないだろう。」

彩羽が言った瞬間、由紀江はムクリと起き上がった。

「どうして手加減するんですか？」

あくまで由紀江は冷静だった。

「そりゃ、『決闘』っていう学園でのイベントだからだろ。」

「ふざけないでください！私は真剣なんですよ！」

普段から由紀江を見ている者はこう思うだろう。

彼女の雰囲気がいいつもと違う。

少なくとも彼女は本気で彩羽に挑んでいた。

「真剣？・・・本当にそうか？」

「何を・・・」

「真剣勝負ってのは、こういうものだろ！..」

彩羽が由紀江目掛けて一直線に突進して来る。

最初の突進も迅かったが今回はその段違いのスピードだった。

あまりの迅さに由紀江も反応が追いつかない。

「ハアツ！」

突進の勢いを利用して蹴りを数発入れる。

「なっ！」

その全てを受けてしまった由紀江はその場に崩れ、膝立ちになった。

「威力はそんなになかったはずなのに……」

確かに彩羽の蹴りには威力はなかった。

しかし由紀江はそれを食らうとまるで力が抜けていくかのようにその場に立てなくなってしまうのだ。

「人体の急所つてのは複数あつてな、今のはそれをチヨイと突いたのさ。」

所謂秘孔を突いた形となった。

「なにが刃を潰したレプリカだ、なにが終わったら手をださないだ・  
・そんなのは真剣勝負じゃねえ！」

彩羽はギャラリに聞こえないよう、由紀江と鉄心にだけ聞こえるように言った。

「でも、本物を使ったら下手したら死んでしまうことだってあるんですよ!？」

由紀江は負けじと言う。

「そこから真剣じゃないんだよ!命のやりとり以外は俺は真剣とは認めん!！」

少し本音を出しすぎたかと危惧したが本当に鉄心と由紀江には聞こえていないようなので続けることにする。

「負けたら死ぬから真剣マツになれるんだ!勝たないと殺されるから真剣マツになるんだ!お前らみたいなぬくぬくと生きてきた人間には解らねえだろうがな。」

鉄心は何も言わない。

どうやら不干涉を貫くようだった。

しかし由紀江の方は力強く言った。

「たとえそれが貴方の答えでも、私は貴方に勝ちます!」

「面白い!勝ってどちらが正しいか決めようじゃないか!！」

2人は同時に突っ込み激突する。

「ヤアアアアアッ!！」

由紀江の斬撃は確かに迅い。

彩羽も避けるのに精一杯で反撃に転じられない。

このまま由紀江が押し勝ちするかと思っただが、

「秘技、片手白刃取り2（ツー）」

彩羽は再び由紀江の刀を片手で受け止める。

そしてもういちど開いた手で攻撃をしようとした矢先。

「最早それは私には通じません。」

由紀江は片方の手を刀から放し彩羽のパンチを受け止めた。

「ぐぐぐぐぐ！」「むむむむむ！」

2人とはお互いを掴んで放さない。

「オイオイ、なんか互角なんじゃねえの？コレ。」

見かねた準が冬馬に話しかける。

「そうですね、素人目から見たらこれは互角に見えますが・・・」

「バーカ、互角なんかじゃねえよ。」

あずみが2人の間に割ってはいる。

「お、英雄はいいのか？」

「英雄様には少し許しを頂いた。それより見てみる。」

見ると由紀江の刀に緑色の何かが纏わりついていた。

煙のような、空気のような。

「あれは・・・気、ですね。」

「そうだ。あの黛とかいう1年、何者か知らねえがそうとうやる奴だぜ。」

瞬間、刀を掴んでいた彩羽の左手に切れ目がはしる。

「なっ!?!」

そしてその切れ目は切り傷となり、彩羽の左手を出血させた。

「グアアアツツ!」

思わず刀から手を放しそのまま由紀江に蹴りをいれようとす。

しかし由紀江は悠々と跳躍し避けて見せた。

見ると傷付近に緑色の何かがあるのが見えた。

「クソツ、気か・・・!」

由紀江から彩羽の手に流れた緑色の物。

それは由紀江の気だった。

「その気になれば気だけで擬似的な剣も作れますよ。」

本物の刀と気で作り出した刀の二刀流で彩羽に迫る由紀江。

左腕を庇いながらも着実に避けていく彩羽に由紀江は少し焦った。

「すげえぞアレ！どうやってんだ！？」

「というか、彩川の奴怪我してないか？」

「ハッ、S組の転人生がどうなるうとしたこっちゃんいぜ。」

「今言った奴出てきやがれ！このハゲがお相手するぞ！！」

場外でも乱闘が起ころうとしていた。

「すげえな・・・どつちも。」

大和はとても寮で見せるオドオドとした彼女と今戦っている彼女が同一人物とは思えなかった。

上手く言葉に出来ない気迫のようなものが伝わってくる。

「すげえな！あの2人！！」

「ああ、つてなにを今更・・・」

後ろから聞こえてきた声に呆れながら答えて振り返るとそこには自



分達のよく知る人物が立っていた。

「きゃ、キャップ!？」

「よう、大和。」

「何でいるんだよ!？」

大和の予想では今頃翔一は多馬川の河川敷で昼寝でもしていると思っていた。

「何でって、お前がメールで決闘の話をしてたから居ても立ってもいられなくなつてよ!」

風のように走ってきたぜと答える翔一を尻目にガクトとモロはヒソヒソと話していた。

「なあ、キャップってあんなに決闘好きだったか？」

「ううん・・・お祭り好きなのはあるけど・・・大和がどんな文面で送ったのか謎だよね。」

そんな2人に気付かず翔一は自分の考えを言う。

「この前から思ってたけど、あの薫って奴、ファミリーに入れないか？」

「え!？」

大和も驚いてはいたが声を上げたのは京だった。

「キヤップ、こんな時に何を。」

「だって、普段挙動不審で面白い奴だし結構強いじゃん！」  
哀れまゆっち。

「というか、あの黨の相手は誰だ？」

「ああ、昨日転入してきた彩川羽月っていう奴だよ。」

「ほーう、転入2日目から決闘とはやるな！アイツ面白えな！！！」

「まあ、気に入ったんなら今度S組に会いに行けばいいだろ。キヤップならあの連中から何言われたって無事っぽいし。」

そんな中百代が口を挟んだ。

「見る、決着がつきそうだぞ。」

その言葉に全員がトラック内を見る。

2人は正面で向き合って必殺の構えをとっていた。

「このままいかせてもらいます！」

由紀江が突っ込む。

彩羽は余裕の表情のまま迎撃した。

しかし彩羽の放った右ストレートを由紀江はかがんで避け、気で作った刀を思いつ切り彼の脇腹に叩き付けた。

(やった・・・え!?)

しかし、手ごたえに違和感を感じる。

「クッククククク・・・」

彩羽は勝ち誇ったような笑みを浮かべ由紀江の腹に掌打を食らわせた。

「ウウウツ・・・!」

思わず数歩退き体勢を整える。

「残念だったな・・・」

彼は懐から一冊の少年雑誌を取り出した。

「あれは・・・週刊少年ジャソプ!」

準が敏感に反応する。

「このジャソプがなければ、今頃お前の勝ちだったかも知れないのにな。」

彩羽の手元でジャソプがボロボロと崩れ散る。

「ご丁寧に気を流してくれたようだったが、無駄に終わったな。」

彩羽がジリジリと由紀江に近づく。

「無駄では、ありません！」

由紀江は立ち上がり気の刀を解き、立ち上がる。

「思ったより頑丈だな、今の攻撃は女子にやるようなものでもなかったが。」

「確かに、ウツ、苦しい、ですよ。肋骨、折れてる、かも、しれませんが。」

息も絶え絶えに答え刀を正眼に構える。

鉄心が何も言わないということは由紀江はまだ戦えるのだろう。

しかしそれも限界のはずだった。

(最後の一撃、ってやつか……)

彩羽もそれに答えようと迎撃体勢をとる。

「行きますー！」

「来なよ、お前は確かにとてつもなく強いがその攻撃は俺には届かないぞ。」

何を強がりをと由紀江は思った。

先程の攻撃で彼の最終兵器は無くなった。

これであと一撃、必殺の型を決めれば勝てる。

「ハアアアアアツ！！！！」

怒号と共に突っ込む。

彩羽はカウンターパンチを当てようと構えた。

そして彩羽のリーチに入った時、完全に由紀江の動きを見切った彼のパンチが、由紀江の顔面を襲った。

「これで！！」

彩羽は終わりを確信した。

しかし

拳は由紀江をすり抜けて空振りに終わった。

「なっ！？（バカな！完全に捉えたはず！）」

そして当たったかと思われた由紀江が少しずれたところから出てきた。

「それは私の気で作った残像です。」

「ま、ゆずみいいーーーー！！！！」

「これでおしまいです!!」

由紀江が肩目掛けて刀を振り下ろす。

技の後の硬直で、彩羽は動くことが出来なかった。

「があっ!!」

刀が肩に当たる。

勝った。

由紀江は自身の勝ちを確信した。

ギャラリィからも歓声が沸く。

しかしそれでも彩羽は笑っていた。

(これは・・・!)

由紀江はまた彼に当てた攻撃に手がたえがないのを感じていた。

気で切り裂いた制服の間から見えるのは黒いインナー。

「鎖、かたびら・・・」

「ククク、惜しかったな。」

普通なら由紀江はこの時点で勝っていた。

しかし相手は防具を用意していた。

これは由紀江の誤算だった。

「羽月君、倒れませんねえ。」

「てかどんだけ強いんだよオイ！」

「がーんじょーう!!」

S組の面子からも驚きの声上がる。

「おそらく防具が何かを着込んでいたな。」

「素晴らしい洞察力です！英雄様」

猫かぶったあずみが英雄を褒め称える。

(てゆうーかマジでひやひやさせられたぜ・・・あの小娘、本格的に  
ただもんじゃねえな)

彩羽は勝ちを確信していた。

このまま由紀江の腹部にもう一度掌打を当てれば彼女は悶絶して自分の前に膝をつく。

その光景が自然と脳内で流れた。

「悪いが、これで・・・!？」

視界がグラリと揺らぐ。

（バカな！？攻撃が身体まで届いていた、だと！？）

確かに攻撃自体は鎖帷子が防いでくれた。

しかし由紀江の人一倍ある気が彩羽を防具の上から攻撃していたのだ。

「これが私の必殺・・・でも、もう限界、かも・・・」

由紀江を支えているのは精神力だった。

同じく彩羽も絶対に負けられないという思いで立っている。

「クッ！！」

彩羽が苦し紛れに放った掌打は由紀江の腹部を捉えていた。

「アアアッ！！」

声を上げつづくまる直前まで来る由紀江。

お互い、限界が近かった。

「ハアッ、ハアッ、ハアッ、ハアッ・・・」

どちらの息遣いか、あるいは2人のものである息遣いが場に響く。



ギャラリーは未だ歓声をやめない。

2人の根競べはまだまだ続いている。

「お前……」

口を開いたのは彩羽だった。

「これほどの力を持ちながら、何故……」

そんな軟弱な思想なんだ、と言葉に出来ず途中で止まってしまふ。

しかし由紀江は彩羽の言いたいことを理解したようで答えてきた。

「私は先輩のように冷酷になれない、父と母と妹、私の周りにいる人を守ればそれでいいんです。」

由紀江はそれだけ言って気絶した。

彩羽もそれを聞いた瞬間に気絶し、2人は同時に地面に倒れこんだ。

ギャラリーからどよめきの声上がる。

「同時に倒れたぞ！」

「これってどっちが勝つんだ!？」

「ハラハラ」

グラウンドにいる生徒達が固唾を飲んで見守る中、鉄心が2人に近寄る。

「フム、これは2人とも気絶しとるのお・・・ということはお・・・」  
生徒達が息を飲む。

「両者気絶により、引き分けと見なす!!」

鉄心が宣言し、生徒達が沸いた。

「ウオオオオオ！すげえ勝負だったぜ!!」

「ああ！あんなんモモ先輩レベルじゃねえのか!？」

「どっちか戦えー!!」

どさくさに紛れて百代が叫んでみるも歓声に掻き消された。

「それでは、この者達は保健室に運んでいくからお主らは解散せよ  
！」

鉄心の言葉で生徒達がゾロゾロとグラウンドから去っていく。

そして残ったのは風間ファミリーの面々と2 - Sの彩羽の友達だけ  
だった。

「さて、彩川は無事であるつか、って一子殿!？どうしてここに!  
？」

「ウゲツ、九鬼君、やほ・・・」

「オオツ！我が愛しの一子殿が挨拶を・・・！これだけで今日学園  
に来て良かったと思いますぞ!!」

「あはは、授業は受けていきなよ?」

「ええ!一子殿の頼みとあらば、それは父上の頼みと同義!必ずや授業の悉くをものにしてみせましょう!」

「バカやってないで行くぞ、羽月が心配だ。」

「アアン?ハゲコルア、誰がバカだつて?」

スチャと二刀が準の首筋に突きつけられる。

「い、いえ!何でもござりません!」

「よし、それでいい。」

二刀が下げられる。

「あつぶねー・・・ちよつとした失言が命取りだからなあ、ここは

「ほら、準。バカやってないで行きますよ。」

「バーカバーカ、キャハハ!」

「好き放題言うな!」

戻ってきた英雄と帰りかけていた心を連れて6人で羽月の下に向かう。

残された風間ファミリーはどうするか相談していた。

「どうする？もう教室に戻る？」

モロが切り出す。

「どうするも何も、終わったんだから教室に戻るっぜ。」

「同感。」

ガクトと京は早く帰りたい組だった。

「ええー！せっかくあんなバトルを繰り広げた奴らだぜ？顔見に行こーぜ！」

「アタシもアタシも！あんなに強いんなら今度はこっちからしかけてやるわ！」

活発な翔一と一子は行く組。

そして百代は既に帰っており、大和とモロは静観組だった。

「まあ、別に何かあるわけでもないから見に行ってみようぜ。」

「顔を見るだけだしね。」

頭脳派の2人が言ったので反対組もついていくことになった。

彩羽はまだ気絶しており、担架で運ばれようとしていた。

「羽月君に目立った傷は左手の裂傷と肩の鎖骨骨折ですね。」

「あゝあ、結構支障でるぞこれ。」

「ねえ、トーマ、はーちん大丈夫なの？」

「まあ、日常生活に支障はないですが体育とかは受けられませんね。」

「ううゝ・・・」

「しかし寝ている羽月君・・・ハアハア、これはアリです！」

「まあ彩川の無事も解ったことだしそろそろ教室に戻らぬかえ？」

心の言葉に英雄が頷く。

「そうだな、これ以上ここにいたら邪魔であるし授業に遅れるかもしれない。」

「そうですね、それじゃ皆さん行きましょう！」

2・Sの面々は去っていった。

続いて風間ファミリーがやってきた。

「あれ？眼鏡なんてかけてなかったのにな。」

職員室で見た時とはやはり変わっていた。

「でもあんまり強そうには見えないわね・・・気が無いというか。」

「でも、さっき戦ってたのは紛れも無くコイツだぜ。まったく俺より目立つなんてやるじゃないか!！」

「キャップ、一歩的なライバル意識は駄目だよ。」

「顔はそこそこいい、女子にモテそう。」

「なんだと!? 部位を教える京、俺様が破壊する!！」

「じゃあまずガクトの顔。」

「うおおおお! 消え去れ! 俺様の顔オオオ!！」

ガン! ガン! ガン!

ガクトが地面に顔面を叩きつける。

「ちよ、ガクト!?!」

「放っておけ、それよりコイツ、どこかで見たよつな・・・」

「!?!? それはどこ!?!」

大和の呟きに京は敏感に反応する。

「京! 近い近い!?! なんか見たことあるなーくらいだから!」

「むう、大和が男にはしつたのかと思ったよ。」

「それは断じてない。」

「まあどんな奴かも確認できたし、行こーぜ！」

「そうだね、ほらガクトも行くよ。」

ガクトはまだ地面に頭を叩きつけていた。

「待て京、モテる部位が俺様の顔ってことは、俺様はモテるってことか!？」

「バカなこと言っていないで行くよガクト。」

「待てモロ!俺様は京に!」

「しょーもない、行こう、大和。」

「あ、ああ。」

結局、彩川羽月の顔を、その日が終わっても誰かの顔と特定するとは出来なかった。

日陰者同士の實力、それぞれの真剣（マジ）（後書き）

お疲れ様でした。

まだまだ下手な表現ですみません。

評価・感想ドシドシお待ちしております〜



## スレッドで起きて（前書き）

間違えて2つ投稿してしまったため穴埋めとして投稿します。

ベッドで起きて

保健室

「リリは・・・」

彩羽は目覚めた。

「・・・・・・・・」

隣には由紀江。

まだ彼女は目覚めていない。

「あれ？・・・」

ベッドは1つ、使用者は2人。

「・・・なんで1つのベッド2人で使ってるの？」

何故か保健室のベッドは1つだけダブルだった・・・

「・・・・・・・・んっ・・・・・・・・」

(ヤバイ！ここで目覚められたら間違いなく誤解される！)

しかし相手はもう目覚めてしまいそうだ。

「どっする・・・っ」

改めて由紀江を見る。

「……………寝顔はかわいいな……………」

( ってそんなこと言ってる場合じゃねえ!! )

そのとき、由紀江が寝返りをうつて向こうを向いた。

とりあえず寝た振りをしてすごす彩羽であった。

一方由紀江は既に起きていた。

( わわわわ、わた、わた、し、私のののの、ね、ね寝顔が…………… )

バツチリ聞き取られていた。

( か、かか可愛いなどと…………… )

結局彩羽と由紀江は保険医教諭が起こしに来るまでずっと互いに寝た振りをしているのだった。

ベッドで起きて(後書き)

それでは次回を書きますかね

ドイツからの使者(前書き)

ずっと涼しければいいのに・・・

## ドイツからの使者

結局、彩羽は鎖骨を折っており全治3週間という診断を食らったのだった。

ベッドは保険医教諭に懇願して1人1つずつになっていた。

『ようクソ野郎ー今どんな気分？ねえ今どんな気分！？』

隣の松風キャスターから嫌味をタラタラと言われていた。

「こら、いけませんよ松風！彩川先輩は今療養中なんですから静かにしないと・・・」

由紀江も同じく肋骨を骨折しており、内臓などに害が無いものの全治1ヶ月をもらったのだった。

ちなみに2人はどちらもベッドで寝ているという体勢だった。

『だってまゆっちこんなに重い怪我を負っちゃったんだぜ！？この恨み晴らさでおくべきか・・・！』

松風からそこそこの殺気が送られてくる。

それを彩羽は軽くスルーしていた。

『無視すんなこの野郎ー！！』

彩羽は目が覚めた後で由紀江から松風について説明をつけていた。

曰く「松風は父が彫ってくれた木彫りのストラップに九十九神がとり憑いて生まれた」とのこと

曰く「その気になればビームを撃つたり巨大化できる」とのこと

曰く「あくまで松風は松風個人（？）であり、由紀江とは別物」とのこと

かなり疑わしい設定だったがどこか抜けている彩羽はすんなりと納得した。

その時は由紀江の方が逆に驚いている程だった。

「やっと、やっと松風のことを認めてくれる人に出会えましたー！！」

『やったぜまゆっちー！ついにオラの時代が来たんだYO！』

こうして松風（CV・黛由紀江）は彩羽に認知された。

そして今に至る。

もう4時間目が終わったようでも外も騒がしく腹も空いてきていた。

『なあまゆっちー、何でオラ達はメシも食えないんだ？』

「保険医の先生が言うにはもうすぐお昼ご飯を持ってきてくれるらしいですけど・・・」

「まだ昼休みが始まって5分くらいしか経ってないだろ、少しくらい待とうや。」

そうは言っているが彩羽は朝飯を食べていない。強がってはいるが由紀江よりも腹は空いていたのだ。

「そ、そうですね・・・誰か気を利かせて持ってくるかも知れませんし・・・」

『まゆうちそんな友達いたっけ？』

「いません・・・ウウウツ！」

屋上

百代は授業をサボって屋上で寝転がっていた。

「あゝあ・・・あの2人とは今すぐ勝負したいのに怪我なんかしやがって・・・」

いつもやってくる挑戦者達は弱すぎる。

かといってこちらから攻めることは出来ない。

不良共は論外。

そして今日やっと対等に戦える相手を見つけたかと思えば。



「何が全治3週間だ・・・ハア・・・」

結局、今回も相手は見つからない。

「3週間も待つてられるか！私は今すぐ戦いたいの・・・！」

百代が愚痴を言っていたが途中で止まった。

「これは・・・なんだ？この感じは・・・！」

何か大きな気が近づいているのを百代は感じていた。

「ふ、フフフフ・・・これはまた、楽しめそうだな・・・！」

保健室

彩羽と由紀江も強い気の接近を感じていた。

「これほどまでに強い気・・・一体誰なのでしょう？」

『ごりゃあ彩川の旦那くらい強いぜ、それにしても尖がった気だな〜』

彩羽はベッドに寝転がりながら首を傾げていた。

(どう考えてもこのトゲトゲしい気は・・・いや、アイツは今任務で欧州のはずだ。こんなところにいるはずが・・・)

川神上空

一機のへりが川神学園目掛けて飛んでいた。

「准尉、もうすぐ川神学園上空です。」

パイロットの男が後ろに声をかける。

「そうか、では予定通り私はパラシュートで降下する。」

「ハッ、ではご武運をお祈りしています。」

そして後ろにいた人物、赤毛に眼帯の軍服女性は1人笑っていた。

(武神の住む地・・・楽しみだ)

そしてひとつのパラシュートが川神学園上空に舞った。

保健室

「もう駄目だ！俺はメシを食いに行く！！」

『やめるんだ彩川！その発言は推理小説なら真っ先に殺される奴の台詞なんだぜ！！』

鎖骨が折れたからと言って下半身は元気だった（エロい意味ではなく）。

保険医には動くのを止められていたが別段歩けないという訳では無かった。

「ですが先生に止められているのでは・・・」

「そんなん知るか！俺は今この瞬間を生きているんだよ！！」

『カツケエ・・・でもな彩川、理由が理由な分あんまり迫真ではないんだぜ。』

彩羽は苦しそうに、しかし一步一步ドアへと歩を進める。

そして彼の手がドアの取っ手に届いた時。

保健室のドアが轟音と共に表側から蹴破られた。

「ぐおおおおおおおっ!？」

もちろんドアの目の前にいた彩羽もそれに巻き込まれて吹き飛んだ。

「あ、彩川先輩!？」

『だからだ、言わんこつちやない・・・』

そして保健室に入ってきたのは軍服を着て、眼帯をした赤毛の女性だった。

「ここがホケンシツか・・・邪魔をしたな、怪我人。」

「え！？・・・あ、はぁ・・・」

由紀江には突然過ぎて対応出来ない。

「ふむ、お前も中々に強いな・・・だが負傷中か、万全な時に私の相手をしなさい。」

「へ！？」

『オイオイなんだこのねーちゃんは、急に備品ぶっ壊しやがってよー』

いきなりのことに松風の反応を遅れていた。

「失礼した、許しなさい。私は今軍の極秘任務でこの学園の下見をしていたのだ。」

女性は悪びれも無く淡々と言った。

「ご、極秘任務！？」

『てゆーか学園の下見って言っちゃまった時点で極秘じゃなくね？』

「構いません、気にするのはやめなさい。」

女性が出て行くこうとすると彼女が蹴飛ばしたドアから呻き声が聞こえてきた。

「きくさくま………!!」

その瞬間ドアが粉々になり破片が女性に飛ぶ。

破片が由紀江に行かないようにコントロールされた攻撃だった。

「ほう……」

しかし女性はそこから動くことなくヒョイヒョイと避けて見せた。

「いきなり人ごとドアを蹴飛ばすたあ随分と躰がなつてねえなあ！  
！」

(い、彩川先輩が怒ってる)

「人がいたとは思わなかった。許しなさい。」

「許せるかあ！」

彩羽は飛び出し、女性に突撃した。

「食らえ！鎖骨骨折キック!!」

鎖骨も使わなければ相手の鎖骨も狙わないキックを繰り返した。

「フツ、甘い！トンファーガード!!」

女性はトンファーを使うことなく腕で受け止めた。

2人は組み合ったまま動かない。

「なっ！・・・このトンファーを全く使ってないのにまるで関係あるように言ってる技名は・・・！」

「・・・この唐突なネーミングセンスは・・・」

2人はハッと気付いた。

自分が対峙している相手が何者なのか。

「組式彩羽！！」 「マルギツテ・エーベルバツハ！！」

その時、廊下が騒がしくなった。

どうやら轟音を聞きつけた生徒が教師に通報したようだった。

「クッ、彩羽、預けておきます。」

マルギツテはそういい残して走り去っていった。

「エーベルバツハ・・・何故ここに・・・？」

彩羽が佇んでいると教師が2人ほどやってきた。

「あ、おい！これは何の騒ぎだ！？」

「ドアが破壊されているが、これは君が？」

彩羽は2人の声が聞こえていないかのように考え事をしていた。

「オイ！無視すんな！！」

1人が手を伸ばそうとしたところで由紀江が割ってはいる。

「違うんです！校内に不審者が侵入してきて、彩川先輩はその人から守ってくれたんです！」

由紀江が一気に捲くし立てる。

「不審者？そんなの何処に・・・」

「先生！さっきあっちのほうに変な赤毛の女の人が走っていきました！」

女子生徒の言葉にどうやら本当だと理解した教師達はそのまま去っていった。

「あの、先輩？」

『気にすんなよーそんな場所にいたら疑われて当然なんだからよ』

（さっきの話では学園の下見と言っていたが・・・何故そんな必要が？）

結局、再び空腹と気が付くまで彩羽は由紀江のことにも気が付かなかった。

女子トイレ

「ハア・・・まさか彩羽がこの学園にいるとは・・・」

トイレの一室にマルギツテは隠れていた。

「どのクラスかは解らないが、お嬢様と同じクラスになったら困るな・・・ってん？」

何故自分は彩羽と彼女が同じクラスになると困るのか。

「イヤイヤイヤ、お嬢様があの男に誑かされないという意味であって決して彩羽がどうかではなく・・・」

一体誰に言い訳しているのかも解らず、マルギツテは黙り込んでしまった。

「ハア、一応私の編入も申請してみるか。」

マルギツテはその後、学園を一回りして上司に報告をした。

その行動が全て学園内で行われたにも関わらず校内で誰一人として彼女の姿を目撃した者はいなかった。

## 保健室

「ああ、もう駄目だ・・・このままでは俺は電車の駅名しか言えない男になってしまう・・・」



ドアは学園側の迅速な対応で直り、既に先程のトラブルなど無かったのようになっていた。

しかし彩羽の空腹は誰にも癒せない。

「せ、先輩。もうすぐ来ますよ！ほら、足音が聞こえてきますよ！」

確かに保健室に向かっていているかのような足音が聞こえてくる。

「・・・橋本、多摩境、南大沢、堀之内・・・」

『やべえ！京王相 原線・・・これは重症だ！！』

その時、ドアが動いた。

番組名ではなく。

「彩川よー、高貴な此方が哀れなお前に差し入れを持ってきてやったのじゃー！感謝せよー！！」

入ってきたのは心だった。

「ぬ？お主は確か、彩川と戦った・・・」

「あ、1年C組の黛由紀江です。」

「おお、そうじゃったそうじゃった。此方は2-Sの不死川心じゃ。彩川は、そっちのベッドかや？」

答えを聞かずに心は彩羽の寝ているベッドに寄っていった。

「稲田堤？（何の用？）」

未だ続いていた。

「彩川よ、勝負に引き分けたお主に、此方の高貴なる関節技と、ついでに昼飯を持ってきてやったぞ。」

「メシ！？うおおおおおお！！」

彩羽は昼飯と聞いた瞬間、心に飛び掛った。

「によわー！！？何をするのじゃー！？」

心は思わず目を瞑ったがいつこうに痛みや苦しみなどはやってこない。

ふと手に持っていた重さが消えたのに気付き、恐る恐る目を開ける。

「あれ？此方の昼飯は・・・？」

後ろを振り向くと、3人分のカツ丼に食いつく彩羽の姿があった。

「コラー！何やつとるのじゃー！？」

心は引き剥がそうとするが上手くいかず、彩羽を動かすには至らなかった。

「せ、先輩。それ、どうみても1人分じゃない気が・・・」

「おお、いいぞ黛！もっと言ってるのじゃー！」

彩羽はやつと気付いたかのように由紀江を見る。

「おお、悪いな、ほね、お前の分だ。」

「え？あ、あわわ、あ、ありがとうございます……」

由紀江はカツ丼を1つ受け取ると上品に箸を使い、食べ始めた。

「ほう、なかなか物の作法が解つておる一年のようじゃの。」

しかしいつまで経っても心の下に丼が来ることはなかった。

「オイ、彩川よ……いつまで待たせる気じゃ？」

「え？何を？」

「とぼけるでないわ！此方の分のカツ丼も買ったのじゃ！それをはよじよこせ！」

彩羽はわり、と言って丼を心に渡す。

「そうそう、そうやって素直に……って、中身がないのじゃー  
ー！」

「わり、全部食っちゃった。」

テヘツと反省のポーズをとる彩羽。

しかしその行動が心の逆鱗に触れることとなった。

「お主は、此方を怒らせた・・・」

「え？」

『すげえ、あの不死川って人のオーラが目に見えるぞ。』

彩羽は律儀にお盆に丼を2つ重ねて置いた。

「あ、黛も食べ終わったらここに置いてくれよ。後は不死川が持つていってくれるから。」

「解りました。」

「此方を無視するな——！！！」

心は彩羽の右腕にしがみつくとそのまま極めた。

「グアアアアアアア！」

「ほらほら！ゴメンナサイと言っのじゃ、さもないと利き腕が逆に曲がることになるぞ！？」

不死川が力を込めるとそれに比例して彩羽の悲鳴の音量も上がった。きた。

「ハラハラ・・・」

『やべえぜまゆっち！このままじゃ彩川の旦那の全治が3週間から1ヶ月になっちまうぜ！』

このまま極まってしまうと思われたその時、心の体がヒョイと持ち上げられた。

「ほぐら、怪我人になにやってんだ。」

「井上！？放せ、放すのじゃ〜！」

俺らのハゲこと井上準に持ち上げられていた。

「じゅ、準か・・・助かった。」

彩羽は右腕を擦りながら立ち上がる。

「オイオイ、なんで不死川は羽月に関節技決めてんだ？」

「そうじゃ、聞け井上！こやつあるうことか此方がさりげなく楽しみにしていた庶民の食べ物、高貴なる此方はこんな機会でもなければ一生口にすることもなかってであるうカツ井とやらをこやつは此方の目の前で此方の文ごと食べてしまったのじゃ！！」

心は長いカツ井がいかに庶民の食べ物であるかを言った後に彩羽を指差した。

「なーるほどな、お前後で殴るから。」

「によわ！？」

結果準の怒りを買うはめになった。

「羽月も、不死川に分まで食っちまうこたあねえだろ。」

「悪いな、ついカツとなつて。」

「そんな犯行動機みたいないわれかたしても許さんわ！お前のせい  
で此方の昼飯がなくなつたのじゃ！午後の授業をどうすこせという  
のじゃー！！」

確かに、今日一日は安静にといわれたので午後も授業にできることは  
ない彩羽とは違い、心にはまだ授業が残っていた。

「しかたねえな、これやるよ。付いてきたおしんこ。」

「いらんわ、そんなもの！」

「なんだよ、美味しいのに・・・ポリポリ」

心は未だ食べ続けている由紀江の方を見た。

「のお黛、美味しいか？」

「へ！？え、ああ、お、美味しいです・・・」

「そうじゃろつそうじゃろつ、高貴なる此方がわざわざ持ってきた  
のだからな。」

彩羽と準は心が由紀江にたかろうとしていることが一瞬で理解出来  
た。

しかし由紀江はあまり他人と話したことがなかったので会話の先が  
全く予想できないでいた。

「もし、お主が此方に少しでも恩義を感じているのなら・・・」

「そ、それはもう!」

心はここで初めて顔を笑みに歪めた。

「なら、此方にその残ったカツ丼を寄越すのじゃ!」

（うつわー本当に後輩にたかつてるよ・・・）

2人の意見が合致した。

「え?・・・あの、あげたい気持ちは山々なんですけど・・・」

「ならとつとと寄越すのじゃ!」

「で、でも・・・」

由紀江がおずおずと丼を見せる。

『まゆっちはオメーラがうるさいことしてる間に全部食っちゃったんだな。』

「な、なんじゃと〜!?!?」

結果、心はこの日、昼飯抜きで午後の授業を受けることになった。

ピンポンパンポン

校内全体の回線を使っているのだろう放送が流れる。

「お、放送か……って今日火曜日じゃねえか!！」

準がカレンダーを見て絶叫する。

ちなみに心は放心状態で灰になっている。

由紀江は驚いて萎縮していた。

「どうかしたのか？」

必然的に彩羽が質問する役になった。

「いや、な……毎週火曜日にやってるラジオがあつてよ……」

「ラジオ？」

するとスピーカーから声が聞こえてきた。

『あーあーマイクテスマイクテス……』

(モモ?)

その声は幼い日に聞いた仲間の声に似たものだった。

「げ、やっぱりモモ先輩だ……」

準が髪の毛の無い頭を抱える。

随分と抱えやすそうな頭だった。

『2-Sの井上ハゲ、2-Sのハゲノ上準。至急放送室に来るよう』



に。繰り返す、2・Sの……」

「うおおおお！行かねえと殺される！という訳で羽月、またな！！」  
そして準はダッシュで放送室に向かっていった。

2分後

『わりい！モモ先輩！今日は怪我したダチの見舞いに……』

『問答無用！でやあ！！』

『又ギユ又エアア……！！！！』

ラジオという名の公開処刑（音声のみ）が始まったのだった。

## ドイツからの使者（後書き）

次の話でも彩羽とまゆっちはベッドで待機です。

ですが次の話で退院ならぬ退室です。

退院？ならぬ退室（前書き）

先に言っておきます。

次でクリスだします！

## 退院？ならぬ退室

放課後・2 - F 教室

百代以外の風間ファミリーが一同に会していた。

「よし、皆いるな。」

「キャップ、放課後に呼び出してどうしたの？」

京が訳が解らないといったように聞く。

「俺様、これからジムで鋼の肉体作りに励む予定だったんだが。」

「僕もスグルとゲーセン行く約束してるから早めに頼むね。」

「俺はヤドカリの餌やりだ、早急に迅速に！」

他のメンバーも中々に都合が悪かった。

「まあ落ち着け、今朝のビックイベントの功労者達に会いに行くだけだ。」

翔一が得意げに言う。

「ビックイベント？」

「決闘か。」

大和の勘はいつも通り優れていた。

「そう！俺達に感動を与えてくれた彼らに敬意を宿して称えるんだ！」

「で、ぶつちやけた感じは？」

京はスーと呟いた。

「面白そうだから見にいきてえ！」

翔一はぶつちやけた。

「だから行くぞお前ら！」

翔一は無言を言わず皆を保健室へと連れて行った。

保健室

「もう帰っていいんだろ？」

といても寝床は学園内だが。

彩羽と由紀江はもうあまり遠慮することなく話していた。

心は5時間目が始まる直前に帰っていき、既にこの場にはいない。

既に保険医の教諭からは「あんまり無理な動きをしないなら帰ってもいい」といわれていた。

「そうですね・・・私は友達もいないので独り寂しく帰りますウウツ！」

『せめてあの団体に入れればなー』

「あの団体？」

学園内で『団体』と呼ばれているならそれなりに『力』があるはず。そう加味した上で彩羽は探りをいれようとした。

「はい、私と同じ寮に住んでて、明るくて凄く楽しそうなんです。どうやら仲間内でワイワイやっているような集団のようだった。

「そうか、というかお前、何で友達がいらないんだ？子供の頃からの付き合いとか無いのか？」

すると由紀江はズーンと落ち込みベッドのシーツにのの字を書き始めた。

『おめえ・・・まゆっちのダークゾーンに土足で踏み入ったな？』

「あ、悪い・・・そういうの鈍くて。」

由紀江はやつと顔を上げブツブツと言い始めた。

「私生まれも育ちも北陸で・・・何故か子供の頃から友達が出来なくて・・・妹に抜かれて・・・でもそんな中父からもらった松風が私に話しかけてくれたんです。それ以来ずっと松風と話してたんで

すけどそれでも友達が出来なくて・・・ひとり百人一首も極めて・・・」

とどどんトラウマを掘り下げてきた。

「でも、川神学園に来て何か変わるかなって思ったんです。友達百人できるかなって！」

「あ、うん・・・へえ・・・」

今まで友達がいなかったことを聞いて彩羽はドンドン鬱になっていった。

「いや・・・本当、悪かったな・・・俺、昔から空気読めないとかネーミングセンス変とか言われててさ。気持ちは少しだけ解るよ・・・」

「彩川先輩・・・それだけで嬉しいです。」

彩羽と由紀江の中である種の握手が交わされていた。

「友達百人、頑張れよ。何かあったら助けてやれるかもしれん。」

「あ、ありがとうございます！頑張ります！！」

由紀江はベッドに座りながらも深々とお辞儀した。

「おう、じゃあ俺が黨の友達第一号だな。」

「えっ・・・」

由紀江の動きが止まる。

（あれ？そんなに俺が馴れ馴れしくするのにショックだったのか！？）

彩羽が悶々としてしていると由紀江がプルプルと震え始めた。

「う……」

「あ、悪かったな……馴れ馴れしくすぎt「嬉しいです……！！」  
「へ？」

由紀江がバツと顔を上げ彩羽の手を掴んでくる。

「凄く嬉しいです！本当に……いや本当に……！！」

ブンブンと腕を強く振られる。

「おい！そんなに動かしたら骨に「ウツ……！！」言わんこつちや無い……」

かくいう彩羽も腕を振られたおかげで鎖骨がまた痛くなってきた。

「す、すみません……つい我を忘れて……」

「いや、構わないけど。」

由紀江は脇腹をおさえ深呼吸をする。



「ありがとうございます・・・」

「別にそんなに大きなことじゃない、定義は人それぞれだが一緒に遊びにいたり仲良く話したりすればそれは立派な友達さ。」

由紀江は感動してつい涙がちよちよ切れそうになった。

「は、はい・・・私、頑張りますよ!!」

「おう、頑張れ!」

2人が熱い友情を確認し合っていると、廊下から騒がしい声が近づいてきた。

「この声・・・」

「知ってるのか?」

由紀江はどうやら今から保健室に来ようとしている人間を知っているようだった。

「はい、この声はさっき私が言ってた人たちです。」

「ならちようどいい、今から仲間に入れてもらえばいいじゃないか。」

『馬鹿だなー彩川は。奥手のまゆっちにそんな高等技術ができるわきゃねーだろ。』

そうこうしている間にドアがガラッと開いた。

「うーっす!!!」

入ってきたのはバンダナの男、翔一。

彼に続いて続々と風間ファミリーの面々が入ってきて一気に内部の人口密度が上がった。

「お、いつも寮で会ってるよな。俺は風間翔一だ。」

「ま、黛由紀江です・・・」

しかし大半のメンバーが知ってるといった顔をしていた。

「あれ？もう1人いると思ったけど・・・お前1人か？」

ガクトの言葉に由紀江は反応した。

「いえ、もう1人隣のベッドに彩川先輩がいますよ。」

「カーテンかかってるから寝てるだけかも。」

京はそう言ってカーテンをシャーと動かした。

「あれ？いねえじゃん。」

「もう帰ったのかなあ。」

男2人の言葉に由紀江は驚いて隣のベッドを見る。

しかし先程まで居た先輩の姿は無く、ベッドがそこにあるだけだった。

「え？でもさつきまで・・・」

彩羽が出て行ったような動きはなかった。

それに彼らが入ってくるまで自分は彩羽と話していたのだ。

「あれ？へ？」

結果風間ファミリーは由紀江の周りに集まることとなった。

「お前結構強かったんだなー！」

翔一が好奇心に満ちた目で言う。

「確かに、モモ先輩とは行かないまでも京よりは強かったんじゃないか？」

「その辺については否定はしない。」

「京のお墨付きをもらうとは、すごいね。」

口々に褒められて由紀江は顔を真っ赤にした。

「え、いえ・・・私なんかそんな。」

（や、やっぱり無理ですー！ー！）

『まゆっちは褒められてんじゃん、やるう〜』

(ま、松風！？私のフォローに？)

「なんだなんだ！？」

ファミリーの面々は驚いているようだった。

「ですが松風、恥ずかしいですよ・・・」

『何言つてんだ！そんなんじやいつまで経っても自分に自信が持てない駄目な奴になっっちゃうぞ！それがまゆっちの目指すゴールか！？違っただろ、ゴールは皆と仲良く！それを忘れて何がまゆっちだ！』

「ま、松風・・・」

唐突すぎることに由紀江以外の人間は啞然としていた。

「まゆっちは強い上に面白いやつだなー！」

ただ翔一はいち早く復活し笑っていた。

「そのままかと思ったらどんでん返しを用意してくるとはな・・・」

大和は深読みしすぎていた。

「え！？え！？」

由紀江は自分のあずかり知らぬところでそこそこ大物扱いされていた。

「さて！まゆっちの面白さも解ったところで、帰ろっぜ！」

翔一は立ち上がり皆に号令した。

「大和は立たなくていいよ。」

「どうしてだよ？」

「既に私が別の場所を勃たせて・・・」

「さあ帰ろっぜ。」

「ああっ！待つて大和！！」

結局意味不明な掛け合いを残して風間ファミリーは去っていった。

「なんだったんでしよう・・・あの人たち・・・」

由紀江は独り呆然としていた。

「よう、お疲れ。」

気付くと彩羽は隣のベツトで胡坐をかいていた。

「あれ？先輩？・・・あれ？」

(さつき先輩はいて風間さん達が来たらいなくて今はいて……え？あれ？)

『おいおい彩川の旦那よー、いったいどうなってんだ？』

彩羽は悪びれもせずと言った。

「なーに、隠れ身の術、ってね。」

右手で忍法を使うようなポーズをとり誤魔化した。

「よかったじゃないか、あいつらに好印象を持ってもらって。」

「はい……ていうか見てたんですか!？」

「ああ、見てたよ。」

何でフォローしてくれなかったのかと思う以前に、何で隠れたのかという念が大きくなる。

そして由紀江はそれを言葉にした。

「あ、あの……なんで隠れてたんですか？」

そう聞いて彩羽の顔に陰が差すのを見て、由紀江は聞いたことを後悔した。

(なんか理由があるのかな……)

彩羽はそんな由紀江を見てなんでもないように装った。

「いや、別に何かあったとかじゃなくて、ただ単に騒がしいのは好きじゃないからよ。それで隠れ身の術ってね。」

「そうですね・・・」

由紀江はそれでも不安そうだったが納得してくれたようだった。

「そら、もう帰って寝てる。日も暮れそうだぞ。」

西日は保健室を直接照らしており、オレンジが室内の色を支配していた。

「そうですね・・・彩川先輩も、帰らないんですか？」

「俺はさっきの不審者のせいで鎖骨が痛いからまだここにいるわ。」

彩羽のベッドは窓側にあるため、彼の表情は逆光によって確認できなかった。

「は、ハイ。じゃあさようならです。」

『まったなし』

由紀江はそう言い残して帰っていき、部屋には彩羽1人だけとなった。

そして足音もしなくなるところで彩羽は左腕に付けていた黒いリストバンドのような物をいじった。

するとリストバンド内に収納されていたと思われる長い楕円形の物が出てきて、それも操作し始めた。

「光学迷彩、並びに気配探知機能、問題なく起動成功。起動時間にも問題は見つけられず・・・」

そうして彩羽は立ち上がり保健室を後にする。

残されたのは風でカーテンがなびき、夕日によって赤く染められた保健室だけだった。



退院？ならぬ退室（後書き）

最近彩川羽月と組式彩羽がごっちゃんになってるようです。

注意してはいるもののこういうのは避けられないのかなあ・・・

見つけたらご指摘お願いします。

バレた？バレない？（前書き）

夏休みの宿題で更新できずあしからず・・・ちゃんと序盤にやって  
おけば・・・

そしてクリ吉大登場！

バレた？バレない？

4月28日金曜日

彩羽はいつも（？）通り朝6時半に教室で目覚めた。

「ん・・・もう朝か・・・」

こんな台詞を続けてもう4日目になると思うと少しだけ時間の流れを感じる。

水曜日以降、彩羽はS組での人脈作りとあずみへの口止めを怠ってはいなかった。

（大和を見習ってみたが・・・大変だなこりゃ）

S組には冬馬や準のような友好的なタイプもいればまさに周りには全員敵、といった感じの者。最初から自分の能力に驕るか、1年生相手に引き分けた彩羽を見下している者など色々いた。

もつとも、最後の人種は決闘を見ていないかよく見ていない者に限られていたが。

「さて、今日は弓道部と陸上部が朝練だったな。急いで戻すか。」

昨日の晩買ったパンを腹に詰め込み、机を戻す彩羽。

流石に始めて4日目ともなると、手際が良くなっていた。

多馬大橋

今日も『変態の橋』は変態さんでいっぱいだった。

「まったく、私に挑むならそれ相応の実力をつけてから来いってんだ！」

今日も挑戦者を秒殺した百代が大和やガクトに愚痴を漏らしていた。

「ていうか、毎日毎日……一番大変なのは川神院の救助部隊だと思うんだが。」

「それは言えてるね。」

ガクトとモロのコンビは今日も息が合っていた。

「それは負ける相手が悪いんだ！なあ大和？」

「姉さん！どうでもいいから首！首絞まってるって！！！」

ヘッドロックのつもりがいつの間にか殺人技に変わっていたようだった。

なんとか抜け出した大和だったが背中に誰かがぶつかっただような衝撃に思わず後ろを向いて謝っていた。

「あ、すいませんでした。」

「私の方こそ余所見をしていた。」

その相手は軍服のような服を着ている50代くらいの男だった。どことなく漂う威厳が普通の人間ではないことを教えてくれる。

「今のは『果し合い』か、いいものを見せてもらった。」

男は感服したかのように頷く。

「若者の謝り方もしつかりしているし……」

そう言われて大和は少しこそばゆくなる。

「うつすらと見えるアレはフジ山……！日本に来て良かった……  
フフフ……」

そして男は不適な笑みを浮かべながら学園側へと歩いていった。

（なんか危なさそうなオツサンだな……）

ぶつかっておいてなんだが大和の彼への第一印象はそうであった。

「大和、今の誰？」

「知らないなー、今日初めて会った人だし。」

「ひよっとして今のが転入生だったりしてなー！」

百代の言葉にモロが悪ノリする。

「そういえば、ギャルゲーでは朝ぶつかった相手が転入生だったりするんだよね。」

「なんだそりゃ、オッサンと大和のフラグが立ったってか？今回はかりは大和がちつとも羨ましくねーな！」

ガクトが笑いながら言っていたが大和命の京にはシャレにならないようだった。

「私が嫉妬してソイツを虐殺するグロゲーになる・・・！！」

「止める京！冗談に聞こえないぞ！？」

「ククク・・・中に誰もいませんよー？」

京は「調理室から包丁とってこよう」などの聞き捨てならない発言を残して歩き出した。

それに続いて風間ファミリーの面々が歩き出す。

翔一は何故か珍しく先に行っているようで不在であったが、ファミリーは気にせず学校へ行った。

「フハハハハ！九鬼英雄、光臨であるうううう！！！！」

「オラア！道開けるやあ！！」

「皆さん！お姉さんからちゃんと言わないといけませんね。」

「2-F委員長、おはようございます！！（イエス、ロリータ、ノ

「タツチ！」

「「「冬馬くん！こっちむいてー！」「」

「やれやれ、まったく困りますね。（ニコッ）」

「「「キヤー！ー！！」「」

「あ、チヨチヨ！待てー！」

今日も変態の橋は変態でいっぱいであった。

## 2・S教室

「そろそろ登校してくる人間が増えてきたな。」

彩羽は窓から校門を見ながら黄昏ていた（まだ朝なのに）。

「じゃあ俺もそろそろ登校してきた振りを・・・って、ん？」

廊下からダダダダダと走る音が聞こえてくる。

しかもどつやらこちらに向かっていているようだった。

そして予想通りドアがガラッと勢い良く開いた。

「風の赴くままに、俺参上！ー！」

入ってきたのは赤いバンダナの男、風間翔一だった。

(げえっ！？な、何でキャップが！？)

まさか身内とは思わなかったのでステルスを使うのを忘れていた。

そのせいで居留守を使おうにもバツチリと姿を見られてしまったのだ。

「お、なあお前。彩川羽月って男子しらねえか？この前決闘してた奴なんだけどー」

嘘についても何もならないので正直に答えておく。

「あ、ああ、俺だけど……」

「お前かー！！！」

翔一の目が一気にキラキラと輝き始めた。

「この前の決闘見てたぜ！凄かったな！！」

「あ、やあ……まあ引き分けだったけどな。」

まるで有名人のサイン会に行ったファンのような態度の翔一。

案外有名人になってしまったのかもしれない。

「いやいや、あの黛って奴、俺と同じ寮なんだけど凄く強いんだ！そんな奴相手に引き分けたお前は充分つえーよ！憧れるぜ！」



決闘を思い出しているのか翔一はウンウンと頷きながら喋っていた。  
そうしている内に翔一が彩羽の顔を覗き込んでいた。

(ッ!・・・マズイ・・・)

勘のいい翔一なら彩羽の顔も思い出してしまうかも知れない。

「お前の顔、どこかで見たような気が・・・どこだっけ？昔だったかなー・・・」

(ああそうさ、小6まで一緒だったろ)

しかし翔一にバレるのは非常にマズい。

(仕方ない、最後の手段といくか・・・)

彩羽は翔一の背後に目をやり、問いかけた。

「そういえば・・・さっきから教室の前にいるあの集団って、お仲間?」

「あれ?アイツらもう来たのかー、はえーなー俺が10年に1度あるかないかの早起きをしたというのに・・・」

そうやって翔一が後ろを向いた瞬間に彩羽は左手の中の機会を操作し状態をステルスモードにした。

「なあ、誰もいないんだがってアレ!?彩川は!？」

予想通り彩羽が急に消えたのでビックリしていた。

「おかしいな・・・隠れてるのか？」

教室を見渡したが隠れているような気配もない。

「アレ？・・・ホントにどうなってんだ？」

翔一はしばらくウーンと考え込んでいたが廊下に気配を感じて教室に戻ることにした。

「まさか、彩川は忍者の末裔とかなにかか！？だったら隠れ身の術ってことで話は繋がる・・・」

(それって俺が黛に言った嘘と同じだよな・・・)

翔一の推理は若干当たっていた。

2 - F

「あ、キャップ何処に行ったんだよ。急に早起きするもんだから明日は雪かと思っちまったぞ。」

「悪い悪い、ちょっと彩川のところに行ってきたんだよ。」

「彩川？何で彩川なんだ？」

翔一がここまで執心するのも珍しい。

大和はそんな彩川羽月に興味を持った。

(ちよつとヒゲ先生釣って調べてもらうかな)

「それでさーアイツ忍者でさー！にんにん！」

その後、予鈴が鳴るまでずっと翔一の話が聞かされる大和であった。

2 - S

「ほうほう、それでこの『インクトウルゲルスの法則』はどう説明するのじゃ？」

「この法則は比較的特徴が極端だからなあ、この公式さえ抑えれば後は楽さ。」

彩羽は順調にクラスに溶け込み始めていた。

「羽月君は本当に頭がいいですねえ、期末試験では抜かれそうですよ。」

「ちなみに、若の上は1位しか無いからな。」

そして予鈴が鳴り宇佐美が入ってくる。

「ほーら、席に着けお前らー。遅刻なんて書くの面倒だからな。」

相変わらずの適当ぶりだった。

「今日はF組に転入生が来るからなー……って、お前らがそんなん気にする玉じゃねえか。」

「当然なのじゃ、S以外、ましてやF組など、蔑むことはあるうとも気にすることはないわ！」

心はやはりF組をかなり見下していた。

「大体、F組に来る転入生など、所詮はあの山猿達と同じ山猿に決まっておるのじゃ。」

『そんなもの、いないに決まっておろーが……!……!』

「によわー!? な、なんなのじゃー!? 」

突如聞こえてきたオッサンのもののような怒声に心は飛び上がり、クラスの生徒達がキョロキョロと周りを見る。

「今のは……隣のF組からじゃないのか? 」

「じゃあ今のが転入生!? 」

「随分老けた感じの声だったけど……」

「というか、まんまオッサンそのものじゃなかったか? 」

クラス内で様々な憶測が飛ぶ。

そんな中、英雄とあずみが口を開いた。

「様々な想像をしているな庶民共よ、だがお前らの想像は全て無駄だぞ。我が朝その転入生と邂逅して来たわ！」

「転入生は、金髪で色白で真面目そうな女子でしたよー」

その言葉にクラス内にはまともな人間だったことへの安堵と、本当にオッサンじゃなかったことへのガツカリ感が漂った。

（フーン・・・転入生、ねえ・・・）

自分とほとんど同じタイミング、それも同じ週となるとどうも何かを感じた。

まったくの偶然ということも否定できないが調べてみる価値アリと彩羽は判断したのだった。

放課後

（朝の決闘を見る限り、怪しい感じはしなかったな）

HRの後、その転入生と一子が決闘をしているのを見た。

久しぶりに見た一子は、泣き虫だったあの頃より数段強く、そして

数段弱くなっていた。

クリスティアーネ・フリードリヒ・・・クリスと言っらしい。

クリスは初めての環境にも適応し見事決闘で一子を倒した。

強いということはこの学園の女子は共通してしまうのか・・・という思いがまだ不慣れな彩羽の中で渦巻く。

そして放課後の今、単身2・Fへと向かっていた。

教室の近くに来て、青い髪の子がそそくさとどこかに行くのが見えた。

(アレは、京？随分急ぐんだな・・・)

またもや久しぶりに見た幼馴染に、強くなったと感じさせられた。

「さて、視察視察〜っと、アレは、大和と・・・あのクリスとか言うやつか」

2人の会話に聞き耳を立てると、今から大和がクリスに川神市を案内するということだった。

そして京が案内役から逃げたことも知った。

(ハア・・・相変わらず他人には無関心なのね)

トイレに入り誰も見ていないことを確認しコントローラーを使いステルスモードを発動させる。

結局、ストーカーまがいなことをしながら2人を追うことになった。

川崎市

学園の案内が終わった後は市内の案内。

商店街、駅前、川神院、一通りの場所を回った後で駄菓子屋の通り  
に来た。

(ここまでのクリスの行動に特に怪しいものはないな・・・まさか  
本当に偶然で転入してきただけなのか?)

2人はベンチに腰掛けて葛餅を食べていた。

ステルスモードは解かずに、彩羽も一息つく。

すると2人が何か言い争いをしているのが解った。

『しかし、そういうのには感心しない。お前のやってることは卑怯  
だ!』

『俺はそういうタイプなんだよ!大体俺が好きなのは闇丸だし・・・  
』

『闇丸!?悪じゃないか!』

今までの会話の中からクリスが一本気の正義好きだということとは理  
解していた。

おそらく正攻法大好きちゃんには卑怯と呼ばれる大和の考え方に反発したのだろう。

『むむむ・・・!』 『むむむ・・・!』

言い終わって2人の間に沈黙が流れる。

大和のことだから筋は通して最後まで案内するだろう、そう思った時だった。

『よ～～っお!弟ー!』

百代がどこからかやってきて大和に抱きついてた。

『げ、何で姉さんが!?!』

『甘い物のあるところに私ありだ、さあ奢って貰うぞ弟よ!』

クリスは突然の乱入者に呆然としていた。

『む?お前は今日来た転入生か。』

『あ、はい、クリスティアーネ・フリードリヒと言います。』

『そうか、呼ぶの面倒くさいからお前はクリな。』

『く、クリ!?!』

相変わらず奔放とした人だった。



夕日の差す多馬川の河川敷を大和達3人があるいていた。

「しかし、百代先輩の言い分も解るがやはり大和には納得いかない。」

クリスはまだ大和の考えと対立していた。

「こればかりは『そういうもの』だと受け入れるしかないぞクリ、人の考えなんかそれこそ十人十色さ。」

百代もそう言っていたが流石にクリスも自分の考えを曲げたくないらしく、まだむむむとしていた。

彩羽はそれを5メートルほど離れて聞いていたが前から来る集団に目が行っていた。

「オウオウオウ！川神百代かあ！？」

どう見ても不良の集団だった。

軽く数えただけでも50人近くはいる。

「そつだが・・・私のファンか？」

「”ちば”の本体だよ！テメエに全員やられたっていつから俺らが直接会いに来てやった訳だ。感謝しな！」

代表格の男が百代と啖呵を切っている。

大和はさりげなく後ろに後退していた。

彩羽はステルスを解除せずに成り行きを見守っている。

(別にモモ相手なら問題ないだろうかな)

「そうか・・・欲求不満の私のためにわざわざ来てくれた訳か・・・これは感謝せざるをえないな。」

「おおっ！早速テメエをバラバラにして「まずはお前か。」へ？・・・ぎゃあああああ！！！」

百代が早速不良達を倒し始める。

50人近くいた不良が一瞬で10人ほど削られていた。

「な、なんだこのバケモンは!?!」

「こ、こんなのに勝てるわけねえ!」

「馬鹿野郎！それでもやるんだよ!!!」

そんなことを言っていた不良達も他と同等に粛清されていた。

「ほらほらほら！私の暇潰しになれよ!」

百代が無双している中、その嵐から抜けた不良が2、3人大和達のところに来てくる。

「こっつなったら、連れだけでも!」

不良が手を出そうとするも、それはクリスによって全ていなされて

いた。

「貴様らのような不埒な悪党を、退治してくれよう！！」

クリスは何故か時代劇の役者になりきって対処していた。

「ぐ、コイツも強ええ！オイ！2人がかりでやってお前はあの男をやれ！」

「おう！」 「まかせろ！！」

良く訓練された不良達が2でクリスを、1人で大和を攻撃しようとしていた。

「なっ！何て統率のとれたフォーメーション！！」

「って、俺にくるなし！！」

大和は慌てて逃げようとするも相手は既に殴りの体勢に入っている。避ける準備をしていた大和は次の瞬間、驚くべきものを目にしたのだった。

攻撃しようとしていた不良が急に何かに吹っ飛ばされたのだ。

百代がクリスが助けてくれたものだと思いお礼を言おうとするも、2人はまだ不良達の相手をしている（百代の場合は遊んでいたが）。

飛んできた不良がたまたま当たったわけではない。

百代が気を使ったわけでもない。

「アレ？何で？？」

大和は途方に暮れていた。

(ふう、まあこれくらいはしてもいいよな)

姿を消したまま殴ったため大和には見られていない。

おそらく見えない何かに吹っ飛ばされたと考えるであろうが『姿を消している誰か』とは思わないだろう。

(ま、こいつくらいなら大和は避けられただろうがな)

だが一撃で撃沈は出来ないだろうと思い、彩羽は姿を消したまま大和を助けたのだった。

百代とクリスが不良達を完全に沈黙させるのにそう時間がかからなかった。

「まあ、少しは楽しめたな。」

「これからはこのような悪行などさせぬ！」

体育会系の2人は喜んでいた。

一方、頭脳派の大和は先程の現象に首を傾げている。

「おい大和、このまま基地に行くか？」

「そうだね、行こうか姉さん。」

「キチ？軍のか？」

クリスは秘密基地のことを知らないので頭の上に疑問符を浮かべている。

しかしそれは彩羽も同じだった。

(基地なんて作った憶えねえよなあ・・・?)

その時、百代が彩羽の方をキツと見た。

(ッ!?!見えてるのか!?!)

まさかとは思いつつも相手はあの川神百代だ。  
もしもという事態をホイホイ連れてきてしまう相手なのだ。

「どうしたの？姉さん。」

「何かいる・・・」

百代が彩羽のいる空間に気をぶつける。

(グッ・・・、ここでバレる訳には・・・!)

「フッ・・・そこか!」

百代は一直線に彩羽に殺到する。

彩羽は急なことに対応出来ず、百代の攻撃を受ける羽目になった。

「そこだ！」ガッ

「クッ！」

大和とクリスには百代は空気を殴ったように見えただろうが、百代は確実に相手の腕を殴った感覚を味わっていた。

「ガアッ！」

咄嗟にガードしたがいかんせん威力が大きい。

彩羽は河川敷の草むらを転がっていった。

「上手く気を消しているな、気付かなかったぞ。だがさつき不良を倒したのはお前だろ？その時だけ強い気を感じたぞ。」

クリスは意味不明な顔をしていたが、大和の方はハツとなり百代が対峙しているであろう相手を探す。

「さつき私が気をぶつけたのはソナー代わりだ。瞬時に逃げておけば良かったのにな。」

彩羽は片耳にそれを聞きながらも左手の中にあるコントローラーを操作していた。

（クソツ！まさかバレるとは・・・さっきの攻撃か・・・故障しやがって！）

草むらの上に青白いスパークがバチバチと音を発しながら出る。

それは大和やクリスにも見える物だった。

そしてやがてそのスパークは人の姿を形作っていった。

「そこか！」

百代が飛び出して右ストレートを繰り出す。

「クツ！」

呻きながらも彩羽はそれを凌いだ。

「ほう、随分やるな。だがもう姿が見えそつだぞー？」

（解ってる！）

スパークの走る体で急ぎコントローラーを設定し、ステルスモードに戻す。

「また消えたぞー！」

「どうなってるんだ・・・」

2人は消えたことに驚くが百代はまた気をソナーのように使い彩羽の位置を特定する。

「悪いな！その手は私には通じないぞ？」

また百代が彩羽に攻撃を繰り返す。

こんどは避け、反撃に転じようとしたが百代の放つ圧倒的な気に気圧されてしまった。

そのせいで百代の攻撃を受けることは彼らの間では当たり前だった。

「グアアアッ！」

今度は叫び、原っぱを転がっていく。

またスパークが走り、3人が彩羽を視認するのに時間は必要なかった。

「もう姿を消すのは止めたらどうだ？無駄だと解っているだろう。」

百代の言葉に彩羽は心で反論していた。

(顔を見られる訳にはいかないんでね、このまま・・・！)

そんなやり取りが4、5回続いた頃、彩羽に変化が訪れた。

左手に収まるコントローラーがピー、ピーと音を立てた。

「なんだ？」



慌ててコントローラーを見ると、『異常発生したため、再起動します』と画面に表示されていた。

(ヤベエー!)

恐らく百代からの攻撃が当たったのかなにかしたのだろう。

再起動するということは一度電源を切ること。

電源を切るということはステルスモードを切ることだった。

もう見慣れたというレベルとも言えるスパークが、3人の前に現れる。

しかしそれはしっかりと、人の形を作り、彩羽の姿を夕日に染めてしまった。

「お前は……?」

「クソツ……」

観念したかのように彩羽が百代を睨む。

細工をして正体はバレないものの、『彩川羽月』とバレることもマズいのだ。

百代や大和は未だ気付かない。

最近来た転入生というものに対してはまだ名前と顔が一致していないというのが大きかった。

クリスに至っては今日来たばかりなので誰かなど解らない。

「誰だ？見ない顔なのにウチの制服とは……」

「まさか、彩川？」

勘の良い大和はすぐさま彩川羽月に気付いてしまった。

「チツ……」

思わず舌打ちが出てしまう。

その仕草に3人には『彩川はちょっとコワイ感じ』というイメージを持たれた。（百代の場合は一線引いた感じだが）

「彩川羽月か、まさかそつちからやってくるとはな……！」

百代が邪悪な笑いを浮かべる。

「でも彩川はまだ怪我中じゃ。」

「当たり前だ、悪いが川神百代、アンタの相手をしている暇は無い。」

彩羽はそう言ってその場を後にしようとしたが、そうは問屋がおりさないようだった。

「そう連れなないこと言わずに、私と遊ぼうじゃないか！」

襲い来る右ストレートを悠々と避け、大きく跳躍する。

「姉さんの攻撃を避けた!？」

大和が驚くのも無理は無い。

百代の攻撃を避ける、もしくは捌くことのできる人間など鉄心やル  
ー師範代など数えるほどしかないのだ。

「やっぱり強かったか。嬉しいなあ!」

(クソツ! 怪我さえしてなけりゃあな・・・仕方ない、足だけで行  
くか)

痛む肩を押さえながら自分の靴にあるスイッチを押す。

その瞬間辺りの空気が微妙に変わった。

「風が吹いてきたな・・・いや、集まってる?」

そう、風は発生していた。

しかしそれは下から上への上昇気流。

「アイツが何かしたなあこりゃ。」

百代は余裕を持って彩羽を見据えた。

「くらいな!」

彩羽が勢いよく足を振るう。

すると次の瞬間、百代は吹き飛んでいた。

「なっ!?!」

「姉さん!?!」

百代が地面に倒れる頃、彩羽が地面に着地した。

「空気圧縮の爆発・・・結構威力高いんだな。」

彩羽の靴には仕掛けがあった。

スイッチを押すことで起動し、周りの空気を吸い込み圧縮する。

そして圧縮された空気を蹴りで相手にぶつけるという中・遠距離技だった。

「ていうか空気を押し出すほどの脚力ってかなりのものじゃないのか!?!」

大和の言うように普通の蹴りでは空気を裂いて進むようなものだが、彩羽の蹴りは常人とは違い、内部に溜まった空気を一気に押し出すことを可能としていたのだ。

百代はまだ立ち上がらない。

「じゃあ俺はこれで。」

彩羽は大和とクリスに挨拶をしてその場を去ろうとするが、自分に襲い掛かる大量の殺気に歩みをとめることとなった。

「やっぱり強かった……」

百代がユラリと立ち上がる。

「やっと私と互角で戦える奴と出会えたんだ、逃がすものか。」

百代の殺気が増大していく。

「……お前、玩具で遊んでる時に間違っつて壊すタイプだろ。」

彩羽はまだ余裕を見せて対峙するも、2人に割つてはいる影に止められた。

「それまでじゃ！」

「……ジジイ？」 「学長……」

何処からともなく現れたのは、川神学園学長こと川神鉄心だった。

「こら、モモ！ 仮にも怪我人になにをしとるんじゃ！！」

「イタツ、痛いからやめろジジイ！」

鉄心は百代に拳骨をくらわせながら彩羽の方を見た。

「お主も、仮病でないことは解つとるんじゃから程々にせいよ。」

「スンマセン……」

彩羽は形だけ謝っておいたが、鉄心は全て見透かしたように「フム」

と言って百代を連れて行った。

「お主には少し灸が必要なようじゃな、返ったらミッチリ絞ってやるぞい。」

「テメエジジイ！それはないだろ！！」

「俺も帰るか・・・」

2人は飛んで、彩羽はまだ痛いのか肩を押さえながら帰っていった。

彩羽達3人が去った後、空気と化していた大和とクリスはただ立っていた。

「・・・寮に帰ろうか・・・」

「・・・そうだな・・・」

2人の仲はそこまで悪くはなっではいなかった。

バレた？バレない？（後書き）

これからは更新は少し早くなると思います。

ないと思うけど誤解を招かないため、「彩羽は忍者の末裔」嘘です。

「そんなもの、いないに決まっておろーが！！！！！！」

byクリス父

まあ解るとは思いますが念のためw

セエシユンツテエエー!!!ナンヤアアアアアー!!! (前書き)

ここから先のストーリーをあまり覚えてないのでややオリジナルになりそうです。

原作通りを期待した皆さん、ごめんなさい。

オリストを期待した皆さん、お待たせしました。

でも箱根には行きます。





「うーむ、女子にモテるには・・・」

ガクトが変態になったのはこの頃からだったろうか。

「興味なし、モロの言う通り、今がいい。皆でずーっと。」

京はなんか・・・大和以外眼中に無いというのは助けてから変わっていない。

「青春はいいぞー！私も早く青春したいなー！」

モモは昔から明るい。

今はその明るさにも何処かごまかしがある気がするが。

「青春、か・・・俺達がそういうものを体験するのにはあと3年かかる、そして、青春なんて思春期の衝動がもたらす感情の一端に過ぎないぞ。」

一番の友達だった大和は何故か昔はあんな感じだった。今思えばあれが中二病というやつなのだろう。

・・・まさか今もあんなじゃないよな？

見たところ大丈夫なようだが・・・心配だ、友として。

「なんだよ、ちゃんと答えてくれたのはモロと大和だけかよ。」

そう、昔から皆でバカやって・・・今も俺を除いて皆はバカやっているのだろう。

俺はそれを青春だと思った。

でも、それは何処か違って。

人には出来ないことが出来るせいで『青春』の定義が狂っていたのかもしれない。

元々その力があつたからスカウトされたというのもある。

それでもあそこは居心地が良かった。

こんな俺でも迎え入れてくれた。

あの時間を青春と呼べるのなら、俺は構わなかった。

だが俺の中で何かが言うのだ。

『それは青春なんかじゃない』と。

じゃあ、俺の青春は何処にあるんだ？

5年間居た戦場にあるのか、それともこれからやってくるのか。

「俺は、青春を探すことにする！」

子供だったな、昔は・・・

カッコつけてこんなことを言っても文字通り子供の言うことだ。簡単には見つけられなかった。

そして今も・・・

俺の青春は、何処にいつてしまったんだろう。

あるいは、最初から無かったのかもしれない。

誰か、誰か、俺の夢を叶えて。

誰か、一緒に青春を探して・・・

闇の中、ファミリーの皆の顔が思い浮かぶ。  
そして口々に言うのだ。

彩羽、彩羽、と。

違う、今の川神での俺の名前は・・・

『彩羽！！』『彩川さん！！』

後に聞こえてきた声は、面白いくらいクリアに聞こえた。

そして意識は、光の世界に戻っていった。

目が覚めて最初に見えたのは、慣れ始めた教室の天井だった。

「・・・また同じ夢か・・・」

百代と交戦してから数日後、コントローラーも直り彩羽はよつやく  
落ち着くことが出来た。

そしていつも通り朝がやってくる。

「さて、今日も1日がんばろー・・・ハア・・・」

全く気合が入らない。

百代に遭遇してから彩羽の身の回りは不幸だらけだったのだ。

怪我が悪化し、全治1ヶ月に。

学長に目を付けられたようですれ違う度に視線を感じる。

コントローラーの修理に金がかかった(これ重要)。

メシが足りない。

あれ以来同じ夢を見ている。

などなど。

どうせ今日も気だるい1日が始まると思うと憂鬱だ。

いつも通り机を戻し朝食を食べたら、コントローラーを操作しステ  
ルスを起動テストさせ、切り姿を現す。

以上が無いことに彩羽は安心した。

いつも通り(?) 同じ夢だったが今日は何故か最後に違う声が聞こ  
えていた。

聞いたことが無い訳ではない。

「なんか最近聞いたような・・・」

「あ、あの!!」

「うおおおお!!?」

まったく気配を感じなかった。

聞いて初めて理解した。

さっきの夢の中の声と同じだと。

「まゆ、ずみ？」

気がつくとも教室の中に由紀江が入ってきていたのだ。  
しかも起動中に。

「……えーっと……見た？」

いきなり聞いても解らないだろうが、おそらくステルスのことを聞いているのだと由紀江は感じた。

「ええ、まあ……」

見られた。

(どうする？消すか……?)

今ここで由紀江に口止めもしくは彼女を殺すことは簡単だ。

しかし目の前にいる後輩の女子がどこかの組織の駒とは思えない。

彩羽は揺らいだ。

由紀江が意を決したように話しかけてきたのはその時だった。

「あ、あの……」

瞳には微かな怯え、しかし話すのを止めようとしなない。

「わ、私、風間ファミリーの中に入れてまして、それで「それが？」え？あ、えーと・・・それだけで、嬉しいなって・・・」

(なんてタイムリーな輪なんだ、あいつら・・・)

少し由紀江との連帯感を感じた。

しかしまさかそれだけで来たわけではあるまいと聞いてみたがそのまさかのようにだった。

「そうか、良かったな。それで何で俺に報告するんだ？」

全く脈絡がないように思えたが由紀江にとっては大切なことだったのだろう。

「えと、一応、応援してくれましたし・・・なんとなく言わなきゃいけない気がして。」

「・・・そうか。」

かつて自分もいたこともある。

あの輪の中に戻るのはいつなのか、早く戻りたいという思いを殺しつつ由紀江に向かい合った。

「なあ黛、お前は何であいつらの仲間に入ったんだ？」

突然の質問にも由紀江は堂々と答えて見せた。

「私は、あの輪を見て楽しそうだなと思ったんです。そして、私もあの輪の中に入りたいと思って入ったんです。」

最初から用意されていた台詞ではない、本心からの声が彩羽に届いた。

「そうか、なんにせよ、おめでとさん。でも同じ1年の中にも友達を作らないとせっかくの学園生活をエンジョイできなくなるぞ?」

ウツと由紀江がうるたえだが、虚勢を張るように持ち直した。

『なんてどストレートな言葉なんだ! キュートなガラスハートのまゆつちがやられちまうぞ!』

「大丈夫ですよ、こんな、ことで・・・でも随分明るい方なんです  
ね、彩川さんって。」

いつの間にか呼び名が『先輩』から『さん』に変わっていたのが自然すぎた為彩羽にはその変化に気付いていなかった。

「そうか? 俺はただ、一度しかない学園生活を悔いなく過ごして欲しいだけだな。」

由紀江はクスツと笑い、思わず見惚れてしまうほどに良い笑顔だった。松風を撫でた。

「それって、随分年長者の言葉ですよ? 私と1つしか変わらないのに。」



「あ、いや・・・」

彩羽は登校する生徒がチラホラと見えてきたグラウンドを見て呟いた。

「俺はただ、青春を見つけれただけなんだ・・・」

一気に雰囲気が変わった彩羽を見て由紀江は何かを感じた。

「あの、今の・・・」

「え？あ、すまない！何でもないぞ。」

もちろんその呟きは由紀江に聞こえてしまっていた。

溢れ出る母性に思わず口走ってしまったのかも知れない、と彩羽はそう結論付けることにした。

200

朝のHR後

「オイ彩川、ちょっといいか？」

担任の宇佐美が珍しく個人的に話しかけてきた。

「ハイ？いいですけど。」

廊下に出て2人が話す。

「実はF組の直江からお前のことを教えて欲しいって言われてなあ、俺が知ってることは言ったがいかなせん本人からのコメントが少ないと報酬が減るわけだよコレが。」

「いつもながらヒドイ理由ですね。」

（やはり大和は俺のことを探ってきたか）

あの時、百代と戦った時には大和とクリスも見っていたのだ。

本当はそれ以前にも大和は彩羽にチェックを入れていたが当の本人はそれに気づいてはいない。

（まあ大和にも連絡いれるの忘れてたし適当に言っておくか）

「俺は・・・宇宙人です。」

「は？」

宇佐美だけでなく周りにいた生徒達も面食らっている。

（あれ？結構いい感じに場が和むと思ったのにダメだったのか？）

「・・・嘘です・・・」

「いや、解ってたが・・・彩川もジョークを言うんだな。だが今度はもっといいネタを頼むぞ。」

そう言って宇佐美はどこか疲れた感じで去っていった。

「俺・・・何か失敗したか？」

ジョークの時点で失敗していると言えるほど周りの生徒達は上級者ではなかった。

2 - F

「お、ヒゲ先生からだ。何かいい情報かな？」

携帯を開け確認。

「なになに、『ギャグセンスゼロ』・・・どういう意味だ!？」

大和は余計に混乱していった。

帰りのHR

S組ではちょっとした騒ぎになっていた。

「あー、突然だが明日転入生くるからな。準備しとけ。」

「「「「「は!?!」「」「」「」

当然、クラスの面々は面食らう。

面なだけに、ってハイハイ、面白くないですよーだ・・・

「センサー、準備って何の準備ですかー？」

「そりゃもちろん、ワクワクする心の準備だろうが！」

「何で準が答えるんだよ……」

彩羽のツッコミは誰よりも早かった。

「それで、何故こつ唐突に？しかも先の2人と連動してるようにも思えますが。」

冬馬は冷静に質問していった。

「それがな、なんかF組に入ったクリスって生徒の目付役？みたいな奴が入ってくるようになったんだが、能力が高すぎて間違えてSに入ることになったんだと。」

「なんて奴だ……」

誰かがそう言うのも無理は無い。

彩羽のようにオール満点で入れるような者がそうそういるとは思えないがそれでも間違えてS組入りの人物というのは最早未知数のレベルなのだ。

（また転入生か……こつも連続で来ると何か陰謀を感じるな……）

本当は1人の某ドイツ軍中将の私情なのだが彩羽は知らない。

夜

彩羽は多馬川沿いの道を歩いていたらいつの間にかある場所に来ていた。

「自然とここに来ちまうんだな・・・」

竜舌蘭の苗がこの廃ビルのすぐ傍にあることは既に調査済みだった。

彩羽がここに来るのはこれで3回目だ。

皆で守ったこの花の子供を、彩羽は皆との繋がりの一つだと信じていた。

「まあ、見るだけで何かするって訳でもないんだが・・・しかし、さっきのアレはなんだったんだ？」

彩羽が廃ビルに着いた時に、中から何か喧嘩のようなものを感じた。

すぐに収まったが凄い殺気だったということは覚えている。

( 薫とかがへましてないといいがな )

その後、しゃがんで竜舌蘭を見ていたら、後ろから声をかけられた。

「そこで何をしている!」

凜とした声。

守るぞという意思を感じるここの出来る声だった。

「その花はまたいつか皆で見ようという約束の花だ！勝手な真似は許さんぞ！」

振り向いてみるとそこには金髪の子が立っていた。

「えーと、確かクリティアーネ・フリーヒッヒーだっけか？」

「フリードリヒだ！私を知っているのか。」

「そりゃあウチの転入生のことなら知ってはいるぞ。」

ちよつどこちらが暗がりなので相手から彩羽の顔は見えない。

「転入生、ということは学園の者か？」

「まあそうなるな、というかこの花をどうしようって気はないぞ？」

「フン、狼藉者の言い分は時として見苦しいな。」

（いや、本気で見ていただけなんですけど・・・）

彩羽の脳内人物ワードに『クリス「KY」』という図式が追加された瞬間だった。

「そんな不埒な輩を倒してくれようぞ！」

「わあああ！ちょっと待ってっ！」

その時、後ろから話し声が聞こえてきた。

「皆か、これでお前もオシマイだな。」

「クソツ！面倒だがコイツでいいか。」

カシヨントと左手のコントローラーを収納状態から使用状態に持っていく。

「皆、来てくれ！ここに狼藉者が！」

ぞろぞろと来たファミリーの面々はクリスの指差す方向を見て首を傾げた。

「……誰もいないんだが。」

大和の言葉に一同は同調する。

「そんなバカな!？」

クリスも自分の指差した場所 - 竜舌蘭の傍を見てみたが誰もいないことに啞然とした。

「自分は、確かにこの目で……」

「クリ、さっきの失敗を取り戻そうというのも解るが、流石にいない者のことを言われても対処のしようがないんだ。」

「いや、あの・・・」

クリスがうるたえるのも無理は無い。

彩羽は確かにここに『いた』のだ。

ただ彼にステルスという手段があったために、クリスは少しばかり疑われてしまうことになった。

(俺はこの隙にトンスラと行きますか)

そして彼らが話している間に彩羽は学園へと帰っていった。

「まあクリスの与太話は放つとして。」

「だから本当だと何度！」

クリスの発言に違和感を感じた者も居なくはなかった。

黛由紀江、川神百代、直江大和。

この3人は、自らが見て体験した彩川羽月という男子生徒のステルスという能力を知っている。

特に大和は最近羽月を探り始めただけに、彼の方へと意識が向いていた。

(クリスが嘘をつくようにも思えないし、やっぱり彩川羽月か？しかしそうだとしたらなんのために・・・)



(彩川さん、なのかな・・・いや、まさかあの人がそこまで)

「まあそんなのはどうでもいいじゃねえか！それより、コイツが竜舌蘭だぜ！」

一同がビルの脇に植えられている苗木を見る。

「これがあの写真のように大きくなるんですね・・・」

「ああ、また変な花を咲かすんだろうな。」

確かに写真と本人達の言葉から、この花もおそらく綺麗とは言い難いものになるのだろうがそんなのはお構い無しだった。

「俺達はまた数十年後に、皆でこの花を見るんだぜ！もちろん、お前らも含めた全員で！！」

「ああ、『全員』でな。」

大和の言葉に古参のメンバーは少し暗くなり、新参の2人は少し頭に疑問符を浮かべていた。

「あ、あのー、これで全員ではないんですか？」

由紀江は意を決して尋ねてみた。

「まゆまゆ、クリ、お前は自分をこのファミリーの中で何番目だと思っ？」

「何番目って……9番目、だと思えますが。」

「まあまゆっちがそう言うなら私は8番目なのだろう。」

この場にいる全員を数えて2人は答える。

「ブー、ハズレだ。」

「何故だキャップ！」

大和は重々しく口を開いた。

「本当は、風間ファミリーは全部で10人だったんだ。」

「「え？」」

「本来なら、ここにいるはずの8番目の男がいないんだよな。」

「彩羽、大丈夫かなあ……」

最古参の大和、翔一、一子が心配そうに夜空を見上げる。

「その、イロハという人はどんな人なんだ？」

クリスの質問に答えたのは百代だった。

「うむ、変な奴だったな。それに最初からファミリーにいたし、大和とも仲が良かったな。」

「そうねー、ギャグのセンスは落第点だったわね。」

「とうか、面白い奴だったな！」

「「??？」」

頭の上に疑問符を浮かべる2人の内、由紀江が聞いてみた。

「あの写真には写ってなかったみたいですけど・・・最古参なら写っててもいいはずなのに。」

「ああ、アイツは・・・」

## 回想

竜舌蘭を守ったあの日、モチロン彩羽も参加していた。

「クツ！なんて風だ！！」

「これが嵐・・・神は俺達に試練を課しているんだ！！」

「大和お前ちょっと黙ってる！！」

百代は飛んでくる木片やコンクリート片などを叩き落とし、たまに飛んでくる猫などをキャッチしたりしていた。

一子は百代に守られたままシートを守り、ガクトやモロ、京もシートを死守していた。

「ざけんなツ！こんな嵐ごときに俺がツ！！」

彩羽は少し離れたところで何かをしていた。

飛んでくる破片を落としているのはいいのだがいかんせん皆を守っているという感じではない。

「修行だろーッ!? 私達を守るつという意思是感じるんだからいいじゃないのか!?!」

大声で百代は言っていたが逆に彩羽がピンチだ。

気を抜けば飛ばされそうだった。

「グ、ガガ、ガガガアッ!! アアアーーーーッ!?!」

「あー! 彩羽アアア!?!」

ついに飛ばされた。

その後、見事竜舌蘭を守りきったはいいが、彩羽は発見されず、写真にも出れず、発見は1週間後となってしまった。

花を見れたのは1日だけだった。

回想終了

「・・・なんと憐れな・・・」

「それは、なんというか・・・」

『バカのレヴェルを超越しちまつてるんだぜー!』

「こら松風。私も踏みとどまったワードを口にするんじゃないやありません!」

『うづう、まゆっちの心を代弁しただけなのに〜』

1人芸もささやかに、本日の風間ファミリーの臨時集会はお開きとなったのだった。

翌日

「今日は昨日も言った通り転入生がくるぞー」

最早転入生の希少性が薄れつつあるこの学年でもまだクラスの皆はWk tkしていた。

「さて、今回はどこの馬の骨が来るのか、楽しみなのじゃ。」

「しっかし、よくもまあバンバン入ってくるもんだなーしかもS組に。」

「その分、期末試験では負けられませんね。」

「とーまは一番だからいいんじゃないの?」

「他の人たちに言ってるんですよ、フフツ・・・」

会話もそこそこに、宇佐美の指示で前のドアが勢いよく開いた。

まず、クラス一同の総意は『変』。

赤毛に眼帯、なにより制服じゃないということにかなりの違和感を感じていた。

それにどうみても20歳前後だ。

「コイツが転入生のー」

「マルギツテ・エーベルバッハです。よろしくしなさい。」

かなり上から目線の態度だった。

「は!?!」

そんな中彩羽は、独り見覚えのある顔に驚いていたのだった。



マル、眼帯の向こうに（前書き）

めいりん！・・・じゃなかった、今回はマルさんです。

ええ、りのさんです。



## マル、眼帯の向こうに

「彩川羽月、黒板が見えません。突っ伏しなさい。」

「彩川羽月、お前の弁当は偏りすぎです。このサプリを飲みなさい。  
(おかずを取り上げながら)」

「彩川羽月、机の位置はしっかり修正しなさい。」

「うがあああああ！お前を修正してやらああ！！」

掃除中、1日注意されて鬱憤が溜まっていた彩羽がついにプツンした。

「いい筋だ。だが狭い教室というフィールドで箒という長い得物を使うことは無謀だと知りなさい。」

今日転入してきたばかりのマルギツテは箒を軽々と捌き彩羽の腹に一撃加えた。

「ぐぶううー！」

「限られた空間では主武装ではなくサイドアームが役に立つ。覚えておきなさい。」

結果、彩羽は冷たい教室の床に頬をつけることとなった。

しかし、その体勢のまま彩羽は手に持つ箒以外の物体をマルギツテに見せ付けた。

「じゃあこういう武器も小回りが利いて役に立つ訳だ。」

ヒラヒラと手に持つのは黒く鈍い光を放つ鉄の塊、拳銃であった。

「なっ！？私の銃・・・いつのまに・・・」

「軍人ともあろう者が簡単に武器を取られてどーすんの、ほれ。」

投げ返された銃を受け取ったマルギツテは警戒心を強めて彩羽を見た。

「今のは完全に私の失態だ。油断した。」

「いやいや、頑張ったと思うよ。」

「しかし、私は自分が『軍人』とは一言も言っていない。何故解った？」

「あ・・・」

しまったと思ったときには既に時遅く、マルギツテの疑いを一身に受ける身となってしまった。

「え、えーと、重さからしてその銃は本物だろ？ならドイツから来たというなら日本で銃を持っていられるのは警察か軍だけ。しかもそれでいて帯銃を許可されるのは軍人だけだ。よってお前は軍人つてことになる、でいいか？」

慌てながらもどこか落ち着いた説明にマルギツテは頷いた。

「その見解で合ってますよ彩川羽月。完璧です。しかし完璧すぎて疑わしいというのはこのことです。」

マルギツテは詳しくすぎる彩羽の説明に猜疑心を強めるのだった。

次の日

人間学の授業が始まる前に宇佐美が言った。

「お前ら！時代はデスマッチだ！いやマジで！！」

その言葉に生徒達はいつものことかと思いつつも次の言葉を待った。

「決して、小島先生が休み時間にデスマッチバトルロイヤルをカバンの中に入れてた訳ではないからな。」

デスマッチバトルロイヤルとは今最も熱いサバイバル雑誌として有名な本だ。

「だからこの時間はグラウンドを使って2組に分かれてサバイバルマッチをやるぞ！」

「人間学関係ねーじゃん・・・」

誰がそう言ったのかは解らないがその言葉はある意味核心を突いていた。

「武器は何を使っても自由だが殺傷能力の無い物を使えよ。」

「ではこの銃も暴徒鎮圧用のゴム弾としましょう。」

マルギツテは皆の前でホルスターを装填しなおした。

「じゃあ俺は知り合いの軍オタから借りてきたエアガンでいいか。」

彩羽はそう言ってどこかに連絡し、3分もしない内にクラスメイトの半分の量のエアガンを用意した。

チーム制というのを理解した判断だった。

今の彩羽の連絡先は軍オタの知り合いなどではなく、実銃も取り扱う専門店だった。

表向きにはエアガン専門店として本当の軍オタに好まれてはいるが裏ではヤクザや海外マフィアに好まれている店だった。

ちなみにBB弾の費用やレンタル料は彩羽のコネで無料に済んでいた。

「随分本格的だな、コレ。」

準がライフルのスコープを覗きながら感嘆の息を漏らした。

「問題ないな、じゃあこの紙を配る。ランダムに配ってAとB2チームに分かれてもらうぞ。」

(皆は素人だし、今回はステルス無しでいいな)

宇佐美から紙をもらいそれぞれのチームに分かれながら生徒達はグラウンドに降りていった。

グラウンド

Bチームとなった彩羽はトラックを挟んでAチームと対峙していた。

「よもやこんなチーム編成になるなんて・・・」

Bチームの主要な面子、彩羽と他よりも交友の深い人間は心とユキの2人だけだった。

「なんじゃ彩川、高貴なる此方と同じチームになれたのじゃ。家柄面では勝ったも同然じゃ！」

家柄の差が、戦力の決定的差でないことを教えてやる！  
とも言えないので彩羽は甘んじて心の高らかなお言葉を受けた。

「う~~~~！トーマと準が向こうだなんて~~~~！」

ユキは友達と一緒にの班になれなかった席替え後の小学生のような反応をみせていた。

「まあ、物は使いようだしな・・・皆に期待するか！」

他のクラスメイトを見る。

「彩川！俺らをなめるな！」

「あたし達、モブキャラだけど負ける気は無いから！」

「俺らの底力、見せてやるーぜ!!！」

「『『『『『『オオオオオオオ!』』』』』」

(おまえら……! その異様に士気のあるお前らに感動したぜ!!!)  
彩羽を総大将としたBチームは謎の気合に包まれていた。

「サバイバルゲームと言えど、戦闘なら私の出番です。私を推しなさい。」

「それは問題ねーけど……参謀なら若がやったほうがいいんじゃないのか？」

Aチームは冬馬、準、英雄、あずみ、そしてマルギツテと、実践向けの人材が揃っていた。

「葵冬馬の知力は確認済み……なら参謀役はあなたにやってもらいましょう。」

「いいですよ、女性の頼みは断らない主義ですしね。」

総大将にマルギツテ、参謀に冬馬をつけたAチームの面々は負ける気がしていなかった。

「あずみよ、我を護れ! 敵陣に切り込むぞ!」

「了解です！命を賭してお守りします！」

「井上準、あなたは葵冬馬の護衛につきなさい。私は前線で戦います。」

「おう、いいぜ。」

「ではこの場所には葵冬馬、井上準ともう1人を残して全軍開始と同時に敵陣に突っ込みます。」

マルギッテの言葉にAチームの面々は反論した。

「でも向こうは銃だぜ！？勝ち目あんのかよ！」

「痛いのだ〜・・・」

その反論を聞いてもなおマルギッテは意思を曲げなかった。

「エアガンと言えど、ソレを扱うのは素人です。それに皆にはゴミ箱の蓋を利用した盾と集めたさすまたがあります。接近戦になればこちらの勝利なのですから安心しなさい。」

何人かはまだ不安げだったが戦闘をマルギッテが務めるということで了承した。

「不死川、榊原。」

「あ、はーちゃんは『ユキ』でいいよ〜」

「そうか、じゃあユキ達に頼みたいことがある。」

「なんじゃ？何でも申してみよ。」

「そうか、じゃあお前ら2人には俺の護衛を頼みたい。」

小雪は快諾してくれたが心は不思議そうに首を傾げていた。

「お主の戦闘能力は九鬼の所の小娘達より上なのじゃろう？護衛などいらぬじゃろうが。」

確かに九鬼従者部隊に昔手解きをしたことのある彩羽なら自分の身は自分で守れることだろう。

だが彩羽はそれでも2人に頼んでいた。

「頼む、相手があんな面子だったら俺の行動を邪魔されないような戦力が必要なんだ！」

心の手をギュツと握り頭を下げる。

「によわ！？・・・ま、まあお主がそこまで言うなら、高貴なる此方が護つてやらぬこともないのじゃ・・・」

心はそっぽを向きながら答えてくれた。

「心、顔赤いよ？大丈夫？」

「な、な、な・・・そんなことないのじゃー！..!」



心は何処かに行ってしまったが1分後には戻ってきていた。

「お前ら、信じてるからな。」

その言葉に心は少しやる気がでたのだった。

それぞれの準備が整った頃、彩羽とマルギツテの2人はある懸念を抱えていた。

「後は誰が裏切り者か、だ。」

宇佐美は1つの特別ルールを作っていた。

それは「裏切り」。

宇佐美から渡された紙に両チームに1人ずつ、「マークが書かれた紙があった。その人物は相手の総大将に知らせ、命令を待ちその命令が来たら裏切るというものだった。

彩羽とマルギツテは相手陣地に潜り込んだ裏切り者の正体は解るがこちらに潜り込んだユダの卵は解らないのだ。

このサバイバルゲームの要はそのルールにあるといっても過言ではなかった。

「じゃあお前ら、準備はいいな？敵の総大将を倒したら勝ち、気絶したら九鬼の従者部隊の奴らが回収してくれるらしいから安心しとけ。それじゃあ始めるぞ。」

固唾を飲んで開始を待つ両チーム。

そして開始の笛が鳴った時、戦場を渡り歩いてきた両者が動き出した。

「突撃です！盾を前面に構えて私に続きなさい！！」

「迎撃するぞ！マシンガンを持って横一列に並べ！合図と共に一斉射撃だ！！」

Bチームは彩羽の指示の下、心とユキを残して全員が列になり敵の突撃に備えた。

「まだまだ・・・まだ・・・今だ！撃てー！！」

BチームのマシンガンがパラパラとBB弾を撃ちこんで行く。

しかしマルギツテは勿論、盾でガードしているAチームにはそこまでの効果は望めなかった。

「甘いな、素人に銃を扱わせるなど愚の骨頂！」

「キャッ！」 「ぐああ！」

マルギツテは隊から突出し次々と敵を無力化していった。

既に4分の1が武器を失い、後にやって来るさすまた部隊の餌食になる予定になった。

しかし、簡単にやらせるほど彩羽は甘くはなかった。

ハンドガンを2丁両手に構えながら彩羽は味方の隙間を潜り抜けて撃ちまくる。

「素人が盾を構えても狙う所はいくらでもあるぜ。」

盾と言えども所詮はゴミ箱の蓋。

体は守っても足は守りきれないでいるという所を彩羽は狙った。

「いつてえ！」 「いつたあ！」

足を撃たれたAチームの面々が次々と転ぶ。

「クツ、やはり真つ先に潰すべきは彩川羽月か！」

マルギツテが銃弾をかくぐり彩羽に肉薄した。

その手にはトンファーが握られている。

「Hasen Jagd!！」

彩羽の防御は間に合わない。

しかし彩羽はマルギツテに構わず撃ち続けた。

マルギツテは諦めたなと思いきのまま攻撃したがそれは違った。

「させぬのじゃ！」 「ぞんねん。」

それは諦めでは無く、信頼。

彩羽は2人に絶対の信頼を置いた。  
その信頼に応えたのは心。

小雪はただ言われたことをやれと言われたからやっただけだったが  
心は彩羽に応えるべく、奮闘していた。

「食らうのじゃ！此方の高貴なる関節技を！！」

小雪がマルギツテの足止めをしている隙に心は速やかに近づいてい  
く。

そして心の攻撃範囲に入った時、そのままの勢いで手を伸ばした。

「甘い！」

「によわ！？」

マルギツテは回し蹴りを小雪に繰り出しその勢いのまま心も撃退し  
た。

「私を止めることは無駄と知りなさい！」

再び彩羽に接近するマルギツテ。

「逃げるのじゃ彩川！！」

回し蹴りをまともに食らってしまった心は膝をつきながら叫ぶ。

それでもマルギツテと心の視線の先にいる彩羽は、底無しの余裕を  
ひけらかしていた。

「よくやったな、ユキ、不死川。」

大ピンチだというのに聞こえてきたのは助けを求める声ではなく、感謝の声。

「ここまで時間稼ぎをしてくれれば充分だ。」

「なっ!」

瞬時にマガジンを再装填しクルリとマルギツテに向き直る。

マルギツテの攻撃と彩羽の射撃。

どちらが速かったのか、2人は密着したまま動かない。

「まさか、今のを避けるとはな・・・」

「この攻撃を防ぐとは・・・」

2人の攻撃はお互いに当たってはいなかった。

彩羽の銃弾はマルギツテが身を捻ってかわし、彼女のトンファーは避ける行動をしたために彩羽のエアガンに防がれていた。

お互い、先には動けない。

しかしその膠着状態を打ち破る報告が2人の下に入った。

「彩川! 敵部隊との衝突で半分が気絶しちまった! 一応退却させておいたぞ!」

彩羽のチームの人間とマルギツテのチームである準が報告に来た。  
お互い伝令として休戦協定を結んでいるようだ。

「マルギツテ！こつちも半分やられたから後退したぞ。若の護衛は  
他の奴らに任せておいた！！」

2人はほぼ同時に数歩離れてジリジリと睨み合った。

「どうやらファーストアタックはこれまでのようだな・・・」

「ええ、一度体勢を立て直すとします。」

こうして両チームの戦いは兵隊の半分を失うという結果の下、一時  
小休止を挟むこととなった。

## マル、眼帯の向こうに（後書き）

やはり戦闘描写に難があるのか？

中の人で言うとマルさん、まゆっち、ワン子、ちかりん、総理、ユキ、京、心、板垣三姉妹・・・

マジ恋姫勢多いなw

感想・評価お待ちしておりますー

END OF (前書き)

さりげなく彩羽の技がでます



END OF

2 - F

「あれ？先生、それ『デスバト』じゃん。」

「ん？これか、これは大串から没収した物だ。」

「そんなことはいいから早く返してくれ・・・」

梅子は授業中にスグルが読んでいた本を取り上げ、1日預かっていたのだった。

「おお！ついに俺の手元に戻ってきたか！我が聖書よ！！」

スグルは返された本に頼ずりをし、感涙していた。

「なーにたかが1冊の本に泣いてんのよ、これだからキモオタの思考回路はわからないわー」

千花が鬱陶しそうに毒つく。

「黙れスイーツ！解るまいよ！人生を甘く見ているお前には、この本を通して出る力が！！」

「本を通して出る力？・・・そんなのがどうしたっていつのよ？」

『スグルは、その力を表現できる方法を知っている。』

「女の、声・・・？」

「まだ、抵抗するのなら・・・！」

スグルは席から立ち上がり千花に突進する。

「うおおおおおおお！！！！！」

千花はとっさのことに反応が出来なかった。

「体、動いて！体、何故動かないの！？」

そして千花とスグルの陰が重なり・・・

そのまま通り過ぎた。

「え？」

「外を見てみる！！！」

スグルに言われるがまま生徒達がグラウンドを見る。

「あれ？あれS組だよな？」

「たしかSは今日時間が1つ多いって言ってたな。」

「だけどアレはなにしてるんだ？」

すでにHRも終わっていたために梅子も一緒になって見る。

そして彼らがみたのは半々に分かれて対峙しているS組だった。

「あ、彩川君はっけ〜ん！」

片方のチームで指揮をとる彩羽を千花は目敏く見つけていた。

「彩川羽月か・・・色んな意味で気になるな。」

「あ、マルさんだ！頑張れ〜！！！」

クリスは我が道を行っていた。

グラウンド

「やっぱり勝つには相手の参謀、冬馬を潰さなくてはならない。何か意見のある者はいるか？」

「ハイ！」

「ハイ望月さん。」

今回だけ名前がついたモブキャラ、望月さんという女子が意見する。

「まずは護衛の井上君達をどうにかした方がいいと思います！」

「イグザクトリィ！」

確かに冬馬は頭は恐ろしいまでにキレるが本人の戦闘力はそこまで

でもない。」

しかし彼の護衛である準の戦闘能力はさわりだけでも強いと解る。

彩羽と心、小雪レベルにでもいかない限り倒すのは面倒だ。

「ハイ！」

「ハイ望月さん。」

望月さんは再び意見した。

「井上君はロリコンなので、そこにつけこめばいいと思います！」

「ラグジュアリー！」

準のロリコンという趣味を突けばいけるといふ望月さんの意見は確心を突いていた。

「じゃあ準を落とす作戦を考えないとな・・・」

彩羽だけが知る事実。

準は「裏切り者」ではない。

よってルールに則って冬馬は潰せないということなのだ。

「ハイ！」

「ハイ望月さん。」

「ここに井上君がいつも読んでる雑誌の最新号があります！」

「エクセレンツー！」

ロリコンの準がいつも読んでいる雑誌は勿論ロリ専雑誌。

その最新号を望月さんは持っていた。

(本当に階級モブでいいのかこの人！？)

主人公の立場がドンドン失われていくのを彩羽は指を噛んで見つめるしか出来なかった。

「よし、準には俺が電話しよう。」

「なあ、マルギッテ。」

「なんです？」

「これを・・・」

準のケータイにあったメール。

『1分後に電話する』

冬馬は彩羽の思惑が解ってた。

「どうやら、羽月君は私を倒すために準を狙ってるみたいですね・・・

・妬いちゃいます。」

「サラッと変なこと言わないでくれ。」

「どうするのです？私は無視することを推します。」

マルギッテはやはり疑ってかかった。

しかし冬馬は首を横に振る。

「いえ、無闇に蹴るのもまずいでしょう。一応電話に出ておくべきです。」

「む、参謀がそう言うのなら仕方ありません。電話に出なさい。」

既にBチームは見えない場所に移動している。

丁度良く準のケータイが鳴る。

『お兄ちゃん、電話だよ　お兄ちゃん、電話だよ』

かなり危ない着ボイスだった。

「・・・井上準、私の前では常時マナーモードにしておきなさい・・・」

マルギッテさえも頭を抱えていた。

構わず準は電話に出る。

『準か？』

「ああそうだ、羽月だな？」

スピーカーをオンにして皆にも聞こえるように話す。

『昇降口の前にプレゼントを用意しておいた。受け取ってくれ。』

それっきり電話はツーツと通話終了の音を立てるだけの物となっ  
てしまった。

「どうするんだ!？」

「これは・・・」

マルギッテの脳内に『プレゼント』の言葉が別の物として変換され  
る。

「おいマイケル！ファイルは盗んだんだ、さっさとずらかろっぜ!  
」!

「待ってくれよジョー、追跡部隊にちよっとお灸をすえてくるか  
らな〜!」

迎撃

「あらかた片付いたなマイケル！」

「うん、さあ逃げよう!」

「おうよ・・・ん？まだいやがったか、コイツはプレゼントだ！」「  
手榴弾投げ込み

ドカーン！！

以上、マルギッテの『プレゼント』でした。

「危険だ、行かない方がいい、っていない！？」

マルギッテが思案している間に準は冬馬と共に昇降口前に向かって  
いた。

昇降口前

「ここにプレゼントがあるはずですが・・・」

「なにがあるかな・・・ハッ！！」

「準、どうしました・・・準？」

準は素早くソレの前に駆けつけ手に取る。

「こ、これは・・・俺の愛読するロリ雑誌の最新号じゃねーかああ  
あー！！」

冬馬の回転の速い脳が彩羽達の思惑を紐解いていく。



「準！今すぐソレを捨てるんです！！」

冬馬は準の手から雑誌をはたき落とす。

「なっ、何をする若！」

「いいから離れますよ！！」

冬馬は抵抗する準を引きずって昇降口から離れる。

そして離れきったあとで落とした雑誌が爆発するのが見えた。

駆けつけたマルギツテが2人を下がらせながら爆心地を見る。

「やはり畏か・・・しかもこの手・・・」

以前見たことのある手だった。

蘇って来るのはまだ自分がいち兵士だった時代の中東・・・

「とりあえず今は早く皆の下にもどらないと！」

冬馬に言われるままに戻るマルギツテの視線は既に燃え終えた雑誌の灰に注がれていた。

しかし準はまだ荒ぶったままだった。

しかも2・Fの教室から覗く真与を見つけてしまったのだ。



あああああん！！2-Fうああああ！！

この！ちきしょー！やめてやる！！現実なんかやめ…て…え！？見…てる？教室の窓にいる委員長が俺を見てる？

教室の窓にいる委員長が俺を見てるぞ！委員長が俺を見てるぞ！憧れの委員長が俺を見てるぞ！！

脳内の委員長が俺に話しかけてるぞ！！よかった…世の中まだまだ捨てたモンじゃないんだなっ！

いやっほおおおおお！！俺には委員長がいる！！やったよ若ッ！！ひとりでできるもん！！！！

あ、2-Fの委員長ちゃあああああああああ！！いやあああああああああ！！！！

あっあんああっああんあ鮎川ああ！！ふ、ふうかー！！柚奈ああああああ！！ほのかああああ！！

うっうっうっう！！俺の想いよ委員長へ届け！！2-F教室の委員長へ届け！！

俺は全力で壊れた後、昇天するかのように気絶してしまった。

「……………」

冬馬とマルギッテは口にする言葉が見つからなかった。

「葵冬馬、これは……………」

「何も言わずに保健室に運びましょう……………」

結局、彩羽の目論見は図らずとも成功したのだった。

「よし、これで冬馬が手薄になる！！この機を逃さずに攻撃するぞ！！

「！」

準がやられたとの報告を受けてBチームの士気は高まっていた。

「しかし彩川よ、相手にはまだマルギツテに九鬼のメイドがいるのじゃ。いささか無謀にも見えるが・・・」

「大丈夫だ。その2人は俺がやる。ユキは冬馬の確保、不死川は「心じゃ」「へ?」

「此度のことでお主のことは少しは解った。特別に此方のことを名前で呼ぶことを許してやるのじゃ!!--」

「断る。」

「によわー!!--?」

心は意外とダメージを受けていた。

「な、何故なのじゃ!!--?」

「お前も俺のことを『羽月』と呼ぶんだ。そしたら俺も『心』とよんでやるつ。」

「は、まあ、それくらいなら快諾してやるのじゃ羽月よ!!--」

「んじゃ、九鬼英雄の撃退、頼んだぜ心。」

彩羽は教室にあったレプリカ刀を持ってAチームの方へ進軍した。

Aチームはいつでも迎撃出来るようにグラウンドの真ん中に陣取っていた。

「準がやられた今、おそらくBチームは勝負に出てくるはずですよ。あとは彼女が裏切ってくれば……」

「ええ、あの者のタイミングはあなたに任せます、私は彩川羽月を止める……忍足あずみ、協力なさい。」

あずみは予想通りといった感じに頷いた。

「まあ、あの野郎相手じゃ『獵犬』だけじゃ荷が重いかも知れねえしな。」

彩川羽月「組式彩羽ということを知っているあずみはマルギッテへの協力を惜しみなくするつもりだった。

そして校舎の片隅からBチームが現れる。

「来ました！敵はそれぞれマシンガン装備の模様です、英雄様！！」

「うむ、では我はこの『クッキーブレードVer.2』で薙ぎ払ってくれよう！」

英雄が持つのはクッキー第2形態が使うブレードの改良版。

しかし殺傷能力を極限まで捨てたので相手は斬られても気絶だけで済むという武器だ。

「私はマルギッテさんと彩川さんの迎撃に移るので……英雄様、



そしてついに両チームが激突する。

「冬馬を狙えー!!」

「ません!」

予定通り彩羽にはマルギツテとあずみに対応する。

「今度は武器持ちか・・・」

「お前ら2人に素手は流石にきついんでね。」

彩羽の剣術は他の者に比べて非常に卓越しており、マルギツテは押されていた。

「なにやってやがる!!」

あずみがすぐにマルギツテを助け出し今度は自分で彩羽を相手にしていた。

「二刀か、だが!」

彩羽の攻撃は止まらない。

あずみも二刀を駆使し攻撃を加えてはいるもののいかんせん相手が悪い。

「加勢します!左から攻めなさい!!」

マルギツテも加わりやっど互角になってくる。

「食らいなさい！この一撃おっつ！！」

「去ねやゴリアツ！」

2人の攻撃に彩羽ではなく刀が悲鳴をあげる。

それが目立ち始めてから彩羽は落ち着いたように刀を鞘に戻した。

「・・・そんなもんか。」

刹那、数々の戦場を渡り歩いてきた2人は彩羽から湧き出る殺気を感じずにはいられなくなってしまうた。

「・・・行くぞ・・・」

彩羽が姿勢を低くし、刀を鞘に納めたまま殺到する。

(ッ、居合いか！)

あずみは刀特有の技が来ると感じとつさに防御体勢をとる。

それに倣ってマルギツテも防御の動きをとつたが、2人とも遅すぎた。

「『アレス・マルス』・・・エンド・オブ・アームズ！」

斬ったのか斬らなかつたのか、それが解らないほどの超高速移動で彩羽は2人の間を潜り抜け一気に通り過ぎた。



「なにしゃがったんだ!？」

「体は斬られていない・・・では一体何を・・・」

「自分の武器を見てみたらどうだ？」

「「なっ!?!」」

2人は自分の手に収まる武器『だったもの』を見て驚愕した。

あずみの二刀は根元から折られており、マルギツテのトンファーは見るも無残な粉々になっていた。

「世界最高の樹を世界最高の職人に加工させたこのトンファーをいとも簡単に・・・!」

しばらく呆然としていたマルギツテだったが、思い直したようで咄嗟に拳銃を構えようとしてまた驚愕した。

「あ、お探し物はこれかい？」

そう言つて彩羽が手に持つのはマルギツテが先程教室で弾を入れ換ええた拳銃。

「なっ、それは!」

どうして持っていると言いたげなマルギツテは彩羽の技のせいだと理解するのに数秒の時間を要した。

「言つたる？エンド・オブ・『アームズ』つて。」

『アレス・マルス』 - - 彩羽のこの技は、

剣術の1つであり、使う剣は問わないという万能剣術だ。

そしてそれはその名前はその流派の名前であり、本当の技はその先、『エンド・オブ』へと繋がっていく。

彩羽の今放った技、『エンド・オブ・アームズ』は敵の戦闘能力だけを奪うという技だった。

「ま、今ので俺の刀もポツキリだけだな。」

「マルさんのトンファーを粉々に・・・！？一体何者なんだアイツは！」

マルギッテの武器のことを知っているクリスはこの出来事にかなり驚いていた。

「ていうか、アイツの動き見えなかったぞ！？やっぱり忍者ってのは本当かー！！！」

翔一は1人で盛り上がっていた。

一子は目をキラキラさせながらワクワクしており、大和は戦闘狂の姉が食いつかないかとヒヤヒヤしていた。

京はそんな大和を見てハアハアしていた。

「ク、ハハハハハ!!」

「なんだ・・・？」

突如笑い出したマルギツテに身構える彩羽。

いつまでも笑いを止めない彼女に呆れ、踵を返そうとした彩羽だったが当の本人が笑うのを止めたため、彩羽も動きを止める必要があった。

「流石です、彩羽。」

「え？」

今、何と言った？

その口に出す前にマルギツテが捲くし立てた。

「まさか、それほどまでの力を出しておいてまだ隠してるつもりだったのですか？」

「まあ、アタイは本人から直々に教えてもらったけどな。」

不利だ。

戦闘面ではない。心理面。

ここで否定することは簡単だ、あずみは話が解る女でもある。

だがその手段はあずみが今放った一言によって消されてしまった。

唯一の救いがこの場に皆がないことだろう。

「まあ、今は詮索はやめておきましょう・・・裏切りなさい！」

『裏切りなさい』という言葉。

その言葉がどのような意味を示しているか、彩羽は重々解っているはずだった。

しかし悪いことというものは重なるもの。

打開策を考えているために彩羽の挙動は一瞬遅れてしまったのだ。

そして彼女・・・『裏切り者』にとってその一瞬だけあれば充分だったのだ。

「悪いの、羽月よ。」

足に手を回され身動きが出来なくなる。

「全てはこの時のための布石・・・ちなみにコレもゴム弾です、安心しなさい。」

マルギツテは何処かに隠し持っていたのか予備の銃を向ける。

「ま、アタイ達は誰が『裏切り者』かは知ってたしな・・・お前らン所は誰にも知らせてなかったらしいけどな。」

確かに彩羽は仲間内の誰にも「裏切り者」の正体を明かしてはいなかった。

「だけど、そんなことはもう此方達にとっては些末事に過ぎぬのじや。」

「心……」

「黙れ、既にお前の負けは決定しておるのじゃから大人しくやられるのじゃ！」

敵側の裏切り者 - 不死川心は後ろから彩羽を拘束しながらマルギツテの方向に向けていった。

「じゃあ、冬馬は……」

「残念でしたね、羽月君。」

心の後ろから冬馬が現れる。

「全部、読んで……」

「ええ、羽月君の考えは全て読み取らせていただきましたよ。」

「……そうか……」

既にBチームのメンバーは心という戦力を失った状態で勝てるはずもなく、英雄のブレードの前に気絶させられていた。

まだ戦えるメンバーも3、4人ほどいるが全滅は時間の問題だった。

その様子を見た彩羽は頂垂れ、時を待つかのようにじっとした。

「潔い判断です。すぐに楽にしてあげましょう。」

「じゃあアタイは英雄様のところに行ってくるぜ。」

あずみが去った後でマルギッテが彩羽に近づく。

不意に、彩羽が口を開いた。

「なあ、ルールの確認。総大将を倒せば勝ちなんだよな？」

「何を今更……『敵の総大将を倒せば勝ち』とルールにはありません。」

「Aチームの総大将はエーベルバッハ、お前だよな？」

「ええ、私が総大将です。」

「そうか……ククッ……」

「何がおかしい？」

周囲の疑いの目の中、彩羽は確信めいた答えを頭の中に作り出していた。

「じゃあお前が倒れれば俺達の勝利って訳だ。」

「そうです、ですがそれも出来ないと知りなさい。」

彩羽はマルギツテから取った銃を構えようとするも事前に心に奪い取られてしまった。

「それは私が持つておきましょう。」

「うむ、頼んだのじゃ葵君。」

銃を冬馬に預け心は勝ち誇った声で彩羽に思うままに語っていく。

「どつじや羽月よ？信頼していた相手に裏切られる気分は。まさか一番近い者が裏切るとは思いもよらなかったじゃろつて。」

彩羽は黙って聞いていたがその全てが終わってから静かに笑い始めた。

「クツククククク・・・！」

「な、なんじゃ突然？」

「いや、やっぱり楽しいなと思ってな。」

心だけではなくマルギツテも不審感を抱く。

目の前にいる男は既に対抗する手段を持っていないのだ。なのに何故ここまで勝ち誇った笑いが出来るのか。

「全ての自称がパズルのピースみたいにはまっていく・・・これだから策を施すのは止められない！！」

何か危険だと察知したマルギツテは素早く銃を彩羽に向けて引き金

を引いた。

ズガンという重い音が辺りに響く。

その音を境に、グラウンドには静寂が訪れた。

「なっ、カハッ……！」

呻く声の主は片膝をつき腹を押さえる。

「残念でしたね、最後の最後でどんでん返しが待っていて。」

痛みに呻くマルギツテを撃つたのは、心から銃を受け取った冬馬だった。

「何故……まさか、葵冬馬、あなたが……！」

「ええ、『裏切り者』は私です。」

淡々と言い放つ冬馬。

「だが、葵冬馬は最初から今まで敵と接触したようなことは無かったはず……！」

その脇で心に拘束されたままの彩羽が全貌を話し始めた。

「最初から冬馬は俺の考えを読んでくれていたのさ。」

「だから言ったんです。『全て読み取った』とね。」



心は歯噛みをし、彩羽に関節技をかけようとするも冬馬に阻止された。

「それ以上やろうとしたら私もあなたを撃たなくてはなりません。」

「によわ!?・・・ぐうぐう!!」

「さて、止めといきましょう。」

冬馬は何のためらいもなくマルギツテに向かって連射し、気絶させた。

「しつかり顔は外しておきましたよ。」

あずみや英雄も、遠くから驚いた顔をしているのが解る。

「さあ羽月君、勝利宣言を。」

心から（銃で脅して）開放された彩羽は拳を上げ高らかに言った。

「俺達の勝ちだー!!」

その瞬間、生き残り（?）のBチームメンバーからの勝ち鬨が聞こえてくる。

こうしてクラスを半分に分けた戦いは、Bチームが勝利したのだった。

「流石だ・・・敵の慢心を突いた的確な一手・・・お前なら解るだろう直江!？」

スグルが彩羽の作戦を見て感動していた。

「あ、ああまあ軍師として気にはなるな。」

「だろう!？」

「いやー面白いバトルだったなー、ワクワクしたぜー！」

「にしては、性格の悪い戦いだっとなオイ。」

「はあ、流石だわー冬馬君に彩川君・・・どっちも欲しいわー!!」

「俺的には倒れたマルギツテを介抱してそのまま・・・グへへ・・・」

「ろくでなし軍団も彩羽達の戦いに何か感じ取った(？)ようだった。」

数日後

マルギツテへの事情説明と口止めも終わり、それなりに学園生活もエンジョイ出来るようになった頃、突如マルギツテから頼みたいことがあると言われてきた。

「今度クリスお嬢様が次の休日、仲間達と共に箱根に向かうそうで

す。護衛のためあなたもついてきなさい。」

仲間達というのは勿論風間ファミリーのことだろう。

個人的にも彼らの動向は気になる。

少し接触してみようとも思っていたのでマルギッテの頼みには応じることにした。

「箱根か・・・」

昼休み、パンをモシヤモシヤと食べながらひとりごちる。

「の、のお彩川？」

「ん？なんだよ、羽月でいいって言ったじゃん。」

そこに話しかけてきたのは心だった。

「その、この前のゲームではルールとはいえ少し酷いことをしたかと反省しているのじゃ。」

「まあ仕方ないんじゃない？冬馬だってバンバンエーベルバツ八を撃つてたことだし。」

「だからな、その・・・詫びに不死川の超一流の料理人達を作った弁当を少しわけてやるのじゃ！」

心が自分の弁当箱を差し出してくる。

超一流と自負する通り、名前負けしない豪華な食材が余すことなく使われた庶民の彩羽にはまず食べられないような代物だ。

「それって、俺と飯が食いたってことか？」

「え！？・・・ま、有り体に言えばそういうことにならなくも無いのじゃが・・・駄目かの？」

上目遣いに確認してくる心。

「まあいいんじゃないのかな。」

断る理由もないので彩羽は同席を許した。

「そうかそうか！なら特急料理師の作った料理をたんと楽しむのじやぞー！！」

少しじゃなかったのかと言いたい彩羽だったが心が楽しそうなので何も言わないことにした。

そして次の休日

彩羽はマルギッテとドイツアーミーの方々と共に箱根へと旅立っていった。

END OF (後書き)

原作と同じイベントがあるにはありますが全て彩羽視点なので色々違ってても気にしないでくださいな。

皆様の応援が作者の力になりますのでよ〜

## 深夜の襲撃（前書き）

今回は更新が遅れて申し訳ありません。

この話は少し短めです、ご了承ください。

## 深夜の襲撃

夜が好きな人間もいれば夜が嫌いという人間もいるだろう。

暗い、静か、不気味など、それを好む人間もいればそれが嫌いという人もいる。

だが中には特殊な理由で夜を好む者もいるのだ。

『アルファチーム、配置につきました。』

「よろしい、そのまま待機。」

『ブラヴオーチーム、降下準備完了。』

「解りました、次の命令を待ちなさい」

夜・・・特に深夜は日本人の生活基準では既に就寝時間なのだ。つまり人目につきにくい。

川神学園に取り付く緑色の軍服を着た男達。

グラウンドで指揮をとる女性は赤い軍服ではあるがいずれも軍人らしかった。

校内にはある教室の前に5人暗視ゴーグルを装備し自動小銃を持った隊が待機している。

屋上にはある教室の直前にこれまた5人が暗視ゴーグルと自動小銃

を持ってラベリングの準備を完了させていた。

計10人の屈強な軍人が夜中にこのような作戦にでるのには訳があった。

ひとつは翌日の最重要任務に向けて迅速に事を進めたいため。彼らにとって上司の娘の旅行となれば一大事なのだ。

『准尉、目標は教室の中央部で睡眠をとっている模様、突入しますか？』

「解りました・・・降下部隊、降下開始。突入部隊は降下部隊の突入と共に進行しなさい。」

もうひとつは相手が相手なことだった。

「降下を確認、突入します。」

教室の前で1人が慎重にドアを開ける。

2センチほど開けたところで教室の中に鈴の音が鳴り響いた。

「しまった！罠だ！！」

向こう側からは窓が勢い良く開く音も聞こえてくる。

2方向からの突入に心の隙が出来た突入部隊は一気にドアを開け、銃を構えながら突入した。

その瞬間、突入した5人は足に違和感を感じる。



「!? 飛べ!!」

見るとピンと張られた縄が足元に張られていた。

5人は流石訓練された軍人といったように避けてみせ、目標のいるであろう場所を見据える。

しかし目標であった人物はそこにはおらず、降下してきた部隊も見失ったようでありキョロキョロしていた。

「ぐあぁっ!!」

突入部隊の内1人が悲鳴を上げドサリと倒れる。

「な、なんだ!?!」

「情報にあつたステルスだ!」

「作戦こた! 急げ!!」

月明かりだけが差す暗闇の中、次々と隊員が気絶させられていく。

しかし4人倒された時点で残りの6人が陣形を組み、防御体勢をとった。

全員が何かの玉を持っている。

「投げます!」「よし!」

隊員達から投げられたその玉は、地面につくと眩い光を発した。

「閃光玉か!!」

どこからか声が聞こえてくる。

訓練された隊員達はその声の場所と、光で影になつてゐる部分をサングラスで見つけ、そこに一斉射撃を開始した。

暴徒鎮圧用のゴム弾ではあるが当たれば死ぬほど痛い。

これで目標もおとなしくなるはずだった。

「やり方は良い、だがまだまだだな!」

隊員には暗視ゴーグルがあつたから見えた。それに目標は既にステルスを解いている。

速すぎてよく解らなかつたが目標が刀と思われるものを使って銃弾を全て叩き落したのだ。

「なっ!!」「クソ、撃てー!!」

目標は今度は銃弾を叩き落しながら接近し、隊員達の銃に斬りかかった。

目にも止まらない斬撃に隊員達の銃が真っ二つになり、隊員達も倒されていく。

「お前で最後だなあ!!」

ついに最後の1人に斬りかかる。

しかし、その隊員は目標の斬撃を華麗に避けてみせ、目標に反撃も試みた。

驚いた目標はかるうじて避けたが隊員を倒せずに終わった。

「何処の組織だ、吐いた方が後々楽になるぞ。」

小柄な隊員だった。

目標と比べると頭1つは違っだろう。

一瞬少年兵か何かだとも思われたが研ぎ澄まされた気が若輩ではないことを教えてくれる。

隊員は何も言わないまま何かの拳法の構えをとる。

「無言かよ……まあいいけど。」

来る、と思った瞬間に目標は既に間合いを詰め斬りかかって来た。

「……甘い……」

小さな、溪流のような声でそう言った隊員は回し蹴りを目標ではなく刀に放つ。

目標の持っているのは鉄で出来た銃をいとも容易く切断してみせた刀だ。

普通なら蹴りを放った足ごと体も縦割りにされるだろう。

しかし隊員の蹴りは刀と接触する直前に変化し、真横から刀を蹴り飛ばした。

目標はそこまで動揺するわけでもなく舌打ちだけをし、蹴りを放つてくる。

頭を狙った蹴りの連撃は当たりはしなかったが隊員の暗視ゴーグルを弾き飛ばした。

月明かりに照らされ、素顔が明らかになる。

「……お前、まさか女？」

白い陶磁器みたいな肌にスウーと通った鼻。

ピッタリと閉じられた口に少し子供っぽさを残した目は間違いなく女性のそれだった。

目標の訝しげな問いにも無言の隊員は先程より迅い動きで目標に肉薄する。

少しだけ驚いた目標のことなどいざ知らず、隊員は膝蹴りを目標に叩き込む。

間違いなく深い手応えを感じたが目標は顔色ひとつ変えずに隊員の首を絞めにかかった。

「残念だったな、『そこは違う』。」

「う……くぁ……ッ」

苦しそうな声を出してはいるが表情はあまり変わっていない。せいぜい目が少し細められているだけだ。

もう少し力を込めれば気絶させられるだろうところまで手が止まる。

「そこまです、彩羽。」

首筋に当てられるのは木ならではのヒンヤリとした感触。

「・・・何故こんなことをした、エーベルバッハ。」

後ろを向かないまま部隊の目標であった彩羽が首を絞める手を緩める。

が、拘束は解かない。

「迎えに来ました。」

「迎え？」

首からトンファアの感触が離れる。

それと同時に今まで締めていた手を緩める。

隊員は瞬時に彩羽から離れ、身構えた。

「もう大丈夫です、彩羽は来てくれるそうですし。」

マルギッテは気絶していた隊員全員を起こした後で、彩羽に1枚の

紙切れを渡した。

「これは・・・へりの乗機券？」

「箱根まではへりで行きます。あなたも来るのだから早く準備しなさい。」

そこで彩羽にある疑問が浮かぶ。

「え、じゃあ今の襲撃はなんのために？」

「ただ起こすのではつまらないでしょう。察しなさい。」

「あ・・・そう・・・」

教室に張ったトラップが無駄に終わったことを知り、彩羽は少しへこんだ。

（あれ結構大変だったのに・・・）

翌日・箱根上空

「では、降下開始。」

「え！？なんでパラシュート？」

「つべこべ言わずに行きなさい！トンファーキック！！」

「それトンファー関係ねえグフオオ！？」

「Good Luck」

「なあ————！！！！！！」

彩羽は何故かスカイダイビングをしていた。

## 深夜の襲撃（後書き）

中間が近づいているので更新はまた遅れそうな気がします。

感想・評価お待ちしております！



ワンとなく頃に辛（前書き）

更新が遅れまくっていますがちやんと続くので眠りながら書いてきてください。

## ワンとなく頃に辛

9時間前・島津寮

『じゃあ、またな。』

近況報告と、ほんの少しの談笑を終えて、電話の向こうの彩羽は切ろうとしていた。

「あ、ちょっと待ってくれ！」

『何だ？』

大和は明日の箱根旅行のことを彩羽に話した。

『・・・そうか、相変わらずアグレッシブだな。』

彩羽がいなくなる前も風間ファミリーの活動は広く凄かったのだ。

『とりあえず、明日は気をつけろよ。』

「珍しいな、彩羽が心配だなんて。」

彩羽は昔は強気で、人一倍自分の力を信じている人間でもあった。そんな人間が自分達のことを心配してくれていると思うとすこしばかりこそばゆい。

「うん、じゃあ・・・まだ会えないんだよな・・・？」

『ああ、まだだ・・・』

「いつになったら・・・俺、待ってただぜ？俺だけじゃない、皆も・・・」

電話の向こう側からは無言という答えが返って来るばかり。

『ごめんな・・・じゃあ、また明日な。』

「!?!?・・・ちよ!・・・」

『また明日』という言葉に反応したが時既に遅く、電話からは通話を切られた時の音が流れるだけだった。

「・・・彩羽・・・?」

結果モヤモヤを抱えたまま大和は箱根への道を行くのだった。

30分前・川神上空

「それではこれより、ブリーフィングを始めます。」

ドイツ製輸送ヘリの機内で屈強なドイツアーミーの方々と彩羽がマルギッテのブリーフィングを受けていた。

「今回のミッションはクリスお嬢様の身の安全の保障の確認、または保障です。中将直々の指令だ・・・気を引き締めなさい。」

令嬢の防衛といえど中将直々の指令とのことで隊員の面々は固唾を

飲み込む。

ただ1人緊張感の欠片も無い者もいるが。

「なお、今回のミッションの為の助っ人もいる。安心して臨みなさい。」

「それって俺？・・・よ、よろしく・・・」

いきなり話を振られて戸惑う彩羽。

「ほう、アンタが中東で名を知らしめたっつーガキか！よろしく頼むぜ！！」

数人の男達は中東での彩羽のことを知っているらしく友好的に接してきてくれていた。

「それと・・・蓮！」

マルギツテがハッチ付近で体育座りをしている少女に話しかけた。

「お前は・・・タベの？」

少女は立ち上がり彩羽を真っ直ぐに見据えた。

「ご紹介に与りました、ドイツ軍マルギツテ隊隊員、来宮くるみや蓮れんです。以後お見知りおきを。」

「あ、ああ。俺は彩川・・・組式彩羽だ。よろしくな。」

淡々と捲くし立てた蓮と名乗る少女は彩羽のさしだした右手の握手

に応えることもなくコックピットの方に向かってしまった。

「アイツ・・・中国人か？」

「ええ、日本と中国のハーフで14歳の時に中東で拾いました。あなたも、覚えてませんか？」

ドアに入る蓮を見ながら記憶を手繰り寄せるが思い出せない。

「いや・・・だいたい14歳の人間がああ戦争にいて無事だったっていうのか？」

彩羽やマルギツテがいた中東の国々の戦場は常に銃弾が飛び交う所だったはずだ。

偶然拾ったなら解るがマルギツテ達はその時辺りを探索できるほど暇ではなかったと記憶している。

「・・・本当に言っているのか？」

マルギツテは凄く驚いているようだった。

「何だ、アイツと俺が何か関係するのか？」

「・・・いや、何でもない。」

マルギツテは彩羽の質問から逃げるように窓の外を見た。

「あと少しで箱根だ、彩羽も準備しなさい。」

箱根の街を遠くに見たマルギツテは回顧するように目を細めた。

1分前・箱根バス停

「お、アレがバスか！」

「アレで旅館に行くんですね。」

風間ファミリーは旅館行のバスに乗り込もうとしていた。

「ねえねえ大和！」

「ん？なんだワン子。」

一子は何故か体操着に着替え、ストレッチをしていた。

「さっきの地図を見たら旅館には森から行けると思っただけどー」

大和は電車の中で皆と見た地図をもう一度見る。

確かにバスは山沿いの道を走るため、山の中の森からでも旅館に行ける。

しかし見たところとてもそこから行くような道ではない。

「これも修行よー!!」

一子は旅行先でも熱心に修行している。

そんな彼女に浮かされたのかクリスマスも自分が走ると言い始めた。

「じゃあワン子とクリは森から行けばいいさ、私達はバスで行く。迷ったりするなよ?」

百代の言葉に頷いた2人はスタートの構えを取る。

「犬、私の背中を見ながら走るといいぞ。」

「そっちこそ! 離しすぎてついてこれなくなっても知らないわよ!」

2人は闘争心剥き出しで走り始める。

それを見送るか応援するかのようにエンジンをかけたバスもまた旅館へと出発した。

20秒前・バス停上空

「む!? クリスお嬢様、そちらは森です!」

クリスについた発信機の信号をモニターで見ながらマルギッテは作戦の修正に勤しんでいた。

それは射出用ハッチでパラシュートを装備した彩羽の無線にも届いていた。

「どうすんだ!?!」

『大まかな落下地点データの入力は完了した、射出する。あとデー

夕はカタパルトには反映されないから射出後に調整しなさい!』

簡易カタパルトが作動し固定されていた彩羽は外に投げ出された。

「ちょ!それはむず、あああああああ!!!!!」

彩羽の叫びは青い空へと吸い込まれていった。

「クツ、こうなったら・・・!!」

靴を起動させ空気を吸い込む。

「データ通りにするなら、こいつで!!」

気合と共に空気を出し位置を調整する。

何度かそれを繰り返してようやく彩羽は修正後の位置にいったのだ。  
った。

しかし気合が入りすぎて思わず気が流れてしまったのを彩羽は後で  
気づくはめになったのだった。

バス内

「oooooooooooo!!」

百代、京、由紀江の3人は突如上空に現れた強い気に警戒していた。

「この気は・・・かなりの使い手だな。」



「ええ、しかも今まで感じたことの無い質の気です。」

「甘えとかそういうのが一切ないね。」

大和達男勢は何を言っているのかは解らないが何を言おうとしているのかは解っていた。

「何だか嫌な予感がするな・・・せつかくの皆の旅行が壊される気がするよ・・・」

「な〜に言ってるんだモロ！せつかくの旅行だから皆大丈夫だぜ！」

ガクトはこういう時だけ頼りになる。

「それに、多少のトラブルやアクシデントは旅には付き物だぜ！ワクワクしてくんな！！」

翔一はいつでも我が道を行っている。

「まあ、天気も崩れないし自然の面では安心だろう。モロもせつかくの旅行だからこそ心配するだけ野暮だよ。」

「・・・そうだね、大和。」

「ああ、大和にだけなびくモロ・・・いいかも！」

「「よくない！！」」

森

「むむむ、中々速いわね！」

「ハツハツハ！私の速さは、世界一イイイイイ！……！」

一子はクリスに30メートルほど離されていた。

「うう、途中倒れそうな木に潰されそうな人みたいなのを助けようとしただけでこんなに離されるなんて！」

鍛えていたはずの体は前を走る金色の髪を眼前に持つてくることさえ出来ない。

ふくらはぎや太腿から迸る熱い何かが脳にも届くのかとも思われるほどに本気というものを自分の奥底から引き出す。

眉間に皺が寄るのを感じる。

視野も狭くなっている……そう自覚出来るほどにクリスしか見えていなかった。

そのせいだろう。

足首の辺りまで隆起した木の根に気づかず躓いてしまったのは。

「あつ………」

一瞬のことながらも本人には永遠とも一瞬とも言えない時間が流れていく。

一子は迫り来る地面を肌で感じながらもずっとクリスの後ろ姿を見ていた。

「つつー……！たたたた……」

我ながら情けないと脳内で悪態をつきながらすりむいたであろう痛みが襲い掛かる膝を見る。

普段は健康的な丸みをみせてくれていた膝は無残にすりむけて赤い血を流していた。

しかし一子にとって怪我は日常茶飯事だ。

彼女が気にすることは他にあつた。

「うつうつう……クリに勝てないようじゃお姉様みたいに強くないって川神院の師範代なんて無理よね……」

膝を擦りながら涙目になる一子。

頭がほんの少し絶望感に染められる。

「……どっにかして強くなって……でもどうやって強くなるのかしら……」

一子の前に天から助けが来るのはそんな時だった。

「おおおおおおおおあおおおおお！？！？！？！？！？！？」

ドスンという音と共に何かが一子の前に落ちる。

それは微かに見覚えのある面影を残した人間だった。

へり内

「む！彩羽め、お嬢様が離れて行ってるぞ！！」

無線で連絡するも応答が無い。

こちらの機器に異常が無い以上どうやら向こうに異変が起きたようだった。

「やはり森というのに無理があつたのか・・・蓮！」

「はい・・・」

「彩羽が心配です、準備が出来しだい追いかけてください。」

「了解しました。」

蓮は淡々とパラシュートのバックパックを着込む。

「チツ・・・クリスお嬢様の尾行には私が行きます。他の者は各自待機、すぐに出れるように準備しておきなさい！」

「ハッ！！」「ハッ！！」

マルギッテは2秒でバックパックを着込みへりから飛び降りた。

森

パラシュートを開く瞬間、彩羽は自分がミスをするなどとは思ってはいなかった。

中東でパラシュートの使い方やタイミングは解っていたし自分でも間違えるなんて思ってもいなかった。

しかし彼にも弱点はあるのだ。

開く前に降りる場所を見てみたところ、彩羽は自分が動揺するものを見てしまったのだ。

クリスは簡単に確認出来た。

しかしもう一つ人影を確認したのだ。

「なっ、ワン子!?!」

彩羽は戦場で生きてきた分風間ファミリーのことが人一倍恋しいのだ。

そこが彼の弱点だった。

言い切った後で気づいた。

一子に動揺したせいでパラシュートを開くのを遅らせてしまったのだった。

「やっべえ!?!」

開いたにも関わらず無情にも急速に地面が近づいてくる。

「仕方ねえ・・・よな!」

もう一度靴を起動させ空気を吸い込む。

彩羽は100%を待たずに空弾を発射した。

減速はした。

しかし完全なものでない上に元々攻撃用であって移動用や姿勢制御用でもないので効果は薄い。

結果彩羽はパラシュートを木に引っ掛からせ、その衝撃で外れたバツクパツクを横目に見ながら地面に衝突することとなった。

「いって~~~~!!!!!!」

背中から落ちたために衝撃が全身を駆け抜ける。

そんな彩羽のことなど露とも知らない一子は彼に近づいていった。

「人・・・かしら?大丈夫かな・・・」

(や、やっべえええええええええええええええ!!!!!!!!)

何か出来ないかとガサゴソと懐を探る。

(っ、こいつは・・・!!)

彩羽はそれを取り出し顔に取り付け立ち上がった。

「わわっ！？立った……！」

彩羽はクルリと一子の方を向きなるべく明るく話しかけた。

「こんな所で何をしてるんだいお嬢さん？」

長い髪の毛に隠されるように付けたのはサングラス。

しかもスタイリッシュなものではなくギャング映画とかでボスが使っているような物だ。

解らなかつたら焼きたてジャぱんの店長のをイメージしてくれればいいです。

「え？……えっ……！」

旅館まで友達と競争してたなどと素直に言っても気味悪がられるだけかと思った一子は答えるに答えられない。

「ランニングしてまし……た？」

（疑問系でどうする……）

だが彩羽には一子の頭の程度は解っている。

「なるほど……何故ランニングを？こんなうっそうとした森の中で……」

「それは修行です！」

一子は彩羽が言い終わったと同時に程速く答えて見せた。それだけ彼女が正直だということなのだろう。

「そうか、修行か。」

「ハイ！私、川神院で師範代になりたいんです！そのためにも修行しないと！！」

「だがそれにしてもオーバーワークすぎないか？」

一子の体を見る限り異常は無いが大和の話によると百代がそう思ったらしい。

「なんか最近よく言われるんですけど・・・でもいっぱい修行しないと！」

「フアーックこの野郎！！」

「ヒイツ！？」

いきなり指を突きつけられた一子は飛び上がって驚く。

「休むことこそ修行の最重要科目のひとつ！休み無くして修行は完成しねえんだよ解るか？ああん！？」

「は、ハイハイ！！！」

一子は無意識に正座をし、彩羽の講釈に耳を傾けていた。一方彩羽はつる星やつらのメガネの様に話を続けていく。



「だいたいだな、筋肉を酷使しすぎると段々と筋肉は〜（中略）〜だから修行には適度な運動、適度な休息が肉体的にも精神的にも必要不可欠なのだ、解ったか！！！」

「ハイ、師匠！！！」

いつのまにか師匠呼びわりされていた。

「そうか、じゃあ今から・・・ッ！」

瞬間、頭上に感じるものがあつた。

「組式彩羽と一般人1人を確認。ただちに組式彩羽を確保します。」

無表情でグライダーを操作しながら急速にやってくるのは蓮だった。風を上手く捉えながら一直線にこちらに向かってきている。

「師匠、どうしたんですか？」

「とりあえず俺がいいと言うまで向こうを向いている。」

一子は言われるがままに後ろを向く。

その間に彩羽はまたもや靴を起動させた。

「とりあえずめちやくちや強い風を出すだけでいいな。」

撃ち出す風の密度を調節し弾にせず風を撃ち出すようにする。

「今はせっかくの再会なんだ、悪いけど向こうに行っててもらおうぜ！」

彩羽は蹴り出し強烈な突風を発生させた。

「これは、風？何故こんなに強い風が・・・」

蓮はその突風に巻き込まれグライダーごと飛ばされた。

彩羽はそれを見送りながら一子に向き戻る。

「よし、じゃあ師匠として！少しお前に特訓をつけてやろう！」

「え、本当ですか！？」

「ああ、俺が薙刀の真髄を見せてやろう・・・！」

実際薙刀はそこまで使っていないが彩羽には一通りの武術が解る。

「じゃあ早速始めるぞ！！」

「ハイ、師匠！！」

「違うわー！！！！！！」

「え、えええっ！？」

「『ハイ』じゃなくて『ワン』な。」

「え、なんで・・・」

「強くなりてえんだろ！？それなら多少の無理を達成させてみせるんだよ！！」

「おおおお！は・・・じゃなかった・・・ワン！師匠！！」

その辺の木の棒を薙刀に見立てた彩羽は一子と森の中へ消えるのだった。

ワンとなく頃に辛（後書き）

ただ単にワン子にワンって言わせただけですw

過去は遠く(前書き)

- ・ アニメ版が好調?にも関わらずこの小説は相変わらず亀更新です...

意外とアニメ面白いですw

## 過去は遠く

昔、ワン子がまだ泣き虫だった頃だった。

よく俺やガクトに泣かされていたものだ。

「やーいやーい！なーきむーしワーン子ー！！」

「うっええん・・・待つてよーガクトー！」

主にガクトが。

俺は主にガクトに泣かされたワン子をケアする立場に回ろつとし、それでよく意味も無く好感度をアップさせていたものだ。

そんなワン子が俺は好きだったしワン子も俺のことを好きでいてくれた。

もちろん恋愛感情などではなく信頼や友情という意味でだ。

思い出すとワン子と俺は接触が多かったな。

多感期な頃にそうでなかったのが救いだ。

組式彩羽という男・・・俺もごく一般的な男子だ。

川神一子という女・・・ワン子もごく一般的な女子。

もしかしたら、昔俺は惚れていたのかも知れない。

ワン子に、川神一子という女性に。

だがそれはいつまで経っても過去の話だ。

俺もワン子も少しは大きくなって別々の人生を歩んでいる。

だが人間の三大欲求、子孫を残したいという本能からなる性欲というものはそう簡単には消せない。

かといって前面に押し出すこともしない。

俺は昔から、遠くから見守ることしか出来なかったのだ。

だから俺は――

「し、師匠？」

「……………」

若さ故の過ちとはこういいうことをあらわすのだろうか。

日の光が差し込む綺麗な山中。

蓮を吹き飛ばしてから何時間か過ぎた。

風間ファミリーの皆はワン子なら心配はないと思っているのか探しに来る気配は無い。

だからワン子なら俺を受け入れてくれると心の何処かで思っていたんだ。

「…………痛ツ…………」

そんな声を出させてしまうほどに強く彼女の手首を握り締める。

俺は森の中でワン子を押し倒していたのだ。

「ワン子……………」

「え!?!……………」

流石にワン子は純粋なままだったようで押し倒されたというのに慌てた様子はなく、ただ意味不明といった感じの顔をしているだけだった。

「えーっと…………師匠、これってどういう修行?」

そうだ、今の俺は彩川羽月。組式彩羽などという過去に囚われた男などでは無いはずなのだ。

「川神一子。お前は強くなりたいんだろ?」

唐突にそんな質問をされてワン子は困っているようだった。

「え?ええ、まあ……………」

「じゃあ、こついつこつにも慣れていかないな……………」

そうやって俺はワン子の手首を締める手に力を込めた。



「了解です。では引き続き彩羽の確保を優先して行動しなさい。」

『はっ……』

「確保については武力行使も厭わないと考えても構いません。」

蓮との連絡を終えたマルギッテは上司であるフランクの到着を待っていた。

今回の任務であるクリスの護衛兼監視は現在滞りなく続いていた。

「准尉。」

「何です?」

1人思案していた所に部下がやってきた。

「どうやら『網』に誰か引っかけたようです。」

それを聞いたマルギッテの目が狩人のそれへと変化していく。

「そうですね、では殲滅しましょう。」

「ハッ、では2箇所ですので准尉は片方をお願いします。」

「了解です。」

マルギッテは仕込みトンファーを撫でニヤリとしていた。

(そのマヌケも運がない・・・まさか我々の『網』にかかるとは・・・だが任務遂行のため、狩らせてもらう！)

マルギツテは嬉々として得物を求める猟犬の様に走り出した。

誤算だった。

組式彩羽がまさか抵抗してくるとは思わなかったのだ。

風弾に飛ばされた蓮は数百メートル離れた所に落下していた。

マルギツテへの報告と指示を受けた蓮はすぐさま彩羽の座標をつきとめ、走り出す。

その様はまるで感情の無いロボットのようだった。

## 旅館

風間ファミリーはクリスと合流し、一応部屋で寛いでいた。

「ワン子おせーな・・・どうしたんだ？」

「また修行じゃないのか？暗くなる前には帰ってくるだろう。」

誰しも一子の心配はしていない。

それは薄情ではなく、信頼によるものだった。

一子はたまに修行を思いついたりするとそれに熱中する。ファミリーはそれを承知しているからこそこうして付き合っているのだ。

「しかしワン子の方が心配でないわけではないんだよねー……」

百代はやはり修行ばかりの一子を心配していた。

昔からそうだったのだがここ最近の一子は輪をかけて厳しい。そんな一子をルーをはじめ川神院の皆は見守ってきたが百代は姉心から流石にもう限界だった。

(近いうちと言うか……あいつの夢を壊すことになっても……あいつの体を壊したくはない)

百代は一子にあることを言う覚悟を決めていた。

一子にとっての師匠、彩羽の提案。

それは押し倒されて抵抗しにくい状況でいかに打開するかというもののだった。

手首を掴む彩羽の手に力がこもるのが解る。

「さあ、この状況から抜け出してみろ。」

「は、はい・・・」

少し身じろいでみる。

彩羽の手はピクリとも動かない。

腕に力を込めて脱出しようとする。

だが彩羽の力の方が強いらしく、やはりピクリとも動かない。

「そんなんじや無駄だぞ・・・もっと本気を出せ。」

本当に本気を出してもよさそうだった。

彩羽から感じる『力』はちよつとやそつとでは崩れない。

ということを考えて不自然ではないくらい彼の力は凄まじいものだった。

「それじゃ、てやあー！！！」

「ちよ！まつ！！！」

一子が狙った場所。

それは男と対峙する上で一番狙うべき場所であり一番狙ってはいけない場所。

そう、それは足と足の間、股にある男の秘宝。

彩羽はすんでのところで一子の下からの蹴りを避ける。

「今！」

一子は避ける動作を行うことによって緩んだ彩羽の手を振り切ろうともがく。

「反則だろー今の狙い場所はー」

しかし彩羽はすぐさま元の体勢に戻り、一子の動きを封じていた。

「むむむ……！中々難しいわね……」

「じゃあお前は強くはなれないな。」

その言葉を聞いた一子は血相を変えて力を入れてきた。

「そんなことない！私は川神院の師範代になってお姉様の手伝いを……！！」

「ムリだ。」

彩羽はどんな刃物よりも鋭利さを誇った言葉で一子を切って捨てた。

「今のお前はオーバーワークでボロボロな体にさらに負荷をかけた最悪の状況だ。その証拠に、俺の縛りひとつからも抜け出せない……」

「それは師匠の力が強いから……！！」

「そう思うのなら本当にお前は師範代にはなれないぞ。フルのお前なら俺の縛りくらい簡単に抜け出せるんだ。」

一子からの反論が止まる。

「本当に強くなりたいのなら、俺に従え。俺ならお前の夢を叶えられる。」

彩羽は言ってから出すぎたな、と思った。

元々大和以外のファミリーとの接触は控えなければならないのだ。

一子の師匠となってしまうっては色々まずい。

それに……

「ワン子の師匠！？絶対強い！戦わせるー！ー！！！！！！」

狂喜する武神がやってくるに違いない。

それだけは避けたかった。

「だがそれには条件があるんだ……」

「何？強くなれるなら何でもするわ！」

川神百代との戦闘を避ける手段としては心もとないがコレしかなかった。

「俺のことは誰にも言っては駄目だ。」

「えー……お姉さま、川神百代に言えば喜ぶと思ったのに……」

(それが駄目なんだってば！)

やはりこの手段は有効だったと言えるよう。

「とにかく、それが守れなかったら今の話は無しだ。勝手に修行して勝手に夢破れるといいさ……」

「ま、待つて師匠！守るから、守るから私に修行をつけて!!」

その言葉を待つている自分に気づくのに彩羽は多少の時間を要した。

「ああ、なら目標を決めないとな。」

「目標？」

「そ、目標。」

彩羽は一子の目をジッと見つめ言った。

「目標は、川神百代だ。」

一子は目を見開き彩羽の目を見返す。

川神百代と言え言わずと知れた武神だ。

そして一子自身の義理とはいえ姉でもある。

「でも、それって……」

「無理だとも思うのか？」

返せない。

少なくとも一子にとっては高望みがすぎるのだ。

「私には・・・」

今度は彩羽からの返しがない。

「今から話すのは俺の独り言だ。」

1分ほどの沈黙の後、彩羽が急に話し出した。

「俺には昔、仲の良い友達がいたんだ。」

「師匠、昔って何歳・・・」

「言つとくが俺はお前と同じ年だ。」

「え!？」

一子が急いで彩羽を全体的に見る。

確かに背は高いが確かに自分と同じ年と言われても理解できる。

「俺には夢と言える夢が無かった・・・青春と呼べる物がなかったんだ。」

「だから、俺にはお前に、お前達に夢を叶えて欲しい。」



「それが俺にできる唯一の恩返しなんだよ。」

彩羽から伝わってくる言葉の半分も一子は解ってはいなかった。

しかし、今にも泣きそうな彩羽の顔を見ているとどうしても過去、自分に良くしてくれた人物の事を思い出す。

「私にも、そういう人はいたの・・・昔、凄く良い人で、でも、いなくなっちゃって・・・」

一子の顔が涙に歪みかける。

「皆で探したんだけど、見つからなくて・・・何処にいるんだろ・・・」

まだ、覚えてくれていた。

「そうか・・・見つかるといいな・・・ワン子・・・」

最後は小声だったが、確かに言ってしまった。

耳の良い一子には小声にも関わらず、その呟きが聞こえていたのだ。

「え・・・?」

彩羽はしまったという顔を隠そうとして隠せてないことにさらにしまったという顔をしていた。

「ししょ、いや・・・いろ・・・」

その瞬間、彩羽は背中に殺気が突き刺さるのを感じた。

「……………ツッ!!」

シュツという音が聞こえると同時に彩羽は一子を強く抱き締め、横に2回転する。

急いで起き上がり今まで居た場所を見ると、銀色のクナイらしき物が4本刺さっていた。

だが、クナイと言うには持ち手があまりにも小さく、最早刃を持っているとも呼べるくらい平たい物だった。

「准尉の命令を無視し、山中で女史を押し倒すとは……人としてずれていることをしていた、と報告させていただきます。」

「来宮、蓮……!」

蓮はやはり刺さっているクナイと同じ物を持っていた。

一子はいきなりの襲撃に状況についていけない。

「イーベルバツハは有能だ、俺がドタキャンしてもやってられるぞ。」

「軍たるもの、指令系統は確実なものであるべきです。」

「残念だが、俺は軍人じゃないんだ。」

「白々しい嘘を言う……」

蓮は無表情を崩さず、いや、無表情以外を知らない様な顔で彩羽を責めた。

だが彩羽はのれんに腕を押ししたかのようにかわす。

「准尉には武力行使も認められています・・・」

蓮はクナイを片手に3、4本ずつ持って構えを取る。

「ほう・・・だがお前の実力で俺を倒せるかと言えば、ノーだな。」

確かに、昨晚の襲撃の時も武器無しとはいえ最終的に彩羽が勝っていた。

「だからお前と武力で競うのは俺じゃなくて、コイツさ。」

彩羽は一子を指差した。

「え！？ちょ、ちよつと師匠！！」

「師匠？」

「あーその辺は気にしないでくれ。だが、蓮・・・コイツは来宮蓮っていうんだが、蓮とお前ならいい勝負だと思っただよ。」

確かに、立ち居振る舞いから一子は武人としての勘で目の前の軍人らしき人物は自分と同じか、それ以上だと感じていた。

そんな相手と戦ってみたくないと言えば嘘になる。

「蓮も、コイツ・・・川神一子を倒せたら俺をどうしようよと構わないぞ。」

蓮としては任務の難易度が下がるのは願ったり叶ったりなのだ。

いまいち意味は解らないが不服はなかった。

「ほれ、コイツを使え。」

彩羽は服に仕込んでおいた折りたたみ式の薙刀を広げ、一子に渡した。

「ど、どこから・・・」

「とりあえず休憩はすんだことだし、お前の力を俺に見せてもらおうぜ。」

「わ、ワン!!」

「准尉にはありのままの状況を伝えておきます。」

過去は遠く(後書き)

というわけで次回、ワン子vs蓮です。

せっかくのオリキャラなのでちょっとは推していかねばね・・・

感想・評価ドシドシ受け付けておりますー

(更新おせーよ以外で)

## ワン子vs来宮蓮(前書き)

原作はバトルシーン多ですがこの小説にはまだ数少ないバトルです。

## ワン子 vs 来宮蓮

彩羽から折りたたみ式の仕込み薙刀を借りた一子は森の中で蓮と対峙していた。

「その薙刀は一応刃を潰してある。死ぬほど痛い当たっても死なないぞ。」

蓮は蓮で、感情を全く感じさせない無表情のまま、クナイを両手に持って臨戦態勢をとっていた。

「じゃあ俺はその辺で見てるから・・・それじゃはじめ!!」

彩羽が跳ぶと同時に一子が前へ出る。

「先手必勝!でやああ!!」

一子の迅いその横薙ぎの攻撃を、蓮は避けようとも受けようともしなかった。

「・・・迅い。でもそれだけ。」

蓮は一子の攻撃をすりぬけるように、カウンターへと繋いだ。

「なっ・・・!!」

突如自分と薙刀の間に現れたクナイに、一子は咄嗟に薙刀を手放して避けるしか無かった。

急いで拾おうとするも蓮は休ませはくれない。

一子にクナイを投げて牽制しながら、薙刀を拾っていた。

「ちよ、返しなさいよ！」

蓮に向かって蹴りを放つも、蓮は跳躍してその蹴りをかわした。

「任務において敵の戦力を削るのは基本中の基本です。」

「そつちがその気なら・・・！」

一子は先程蓮が投げていたクナイを拾い上げ、投げる。

普段ファミリーで野球をしている一子にとっては、10メートルほど離れた蓮に向けて投げるなど簡単なことだった。

しかし蓮は薙刀を一子に投げつけ、空いた両手でクナイを全てキャッチしていた。

一子は一子で、向かってきた薙刀を掴み取る。

「なんで返したのよ。」

「日本には『お返し』というものがあるのでしょうか？」

つまり蓮にとっては『お返し』のつもりで武器を返したらしかった。

それは、クナイを投げられた程度で動じないということを表しており、薙刀を返すという行為は一子に薙刀を返してもそう脅威では無い。ということは無言で伝えていた。



それが一子の感情の高ぶりを誘うと、蓮には解っていた。

「アンタ・・・バカにしてんじゃないわよおおおお!!」

最初よりも勢いの増した突進。

しかしそれも蓮の計算の内だった。

感情が高ぶっている今こそ突撃は直線的になる。

蓮は闘牛士よろしく一子をヒラリとかわし、脇から攻撃をしかけた。

普通なら一子の脇に蓮の当て身が当たっていたところだが、一子はニヤリとして蓮の方向を向いた。

「待ってたわ、その隙を！」

「釣られなかった・・・」

一子は普段、テストで赤点のラインに立つほどのオバカだが戦闘となるとそれは一変する。

頭が良くなる訳ではない、直感が冴え渡るのだ。

蓮の釣りを見抜いていたと言えは嘘になる。

一子は見事に釣られていた。

だが一子はそれでもなお、蓮の動きに対応してみせたのだ。

「そこね！川神流・山崩し!!」

一子は頭の上で大きく旋回させた薙刀を斜めに振り下ろし、蓮の脛を狙った攻撃を繰り出した。

「迅い・・・これはよけられない・・・」

蓮は咄嗟にクナイを多く出し、一子の攻撃を防ごうとした。

しかし山崩しの威力は強く、展開したクナイ全てを弾き飛ばしていった。

蓮はクナイの雨を潜り抜けながら、たまにキャッチしたりして一子に再度接近する。

「させるもんですか！川神流・鳥落とし！！」

一子はしゃがんで蓮から投げられるクナイをかわし、近づいてきた所にサマーソルトを繰り出した。

刃の如きその蹴りは、蓮の顎へと吸い込まれるところだったが、蓮はすんでの所でかわす。

しかし、一子の薙刀は蓮を逃さなかった。

一子は飛び上がりながら薙刀で斬り上げ、蓮の肩口を狙った。

その攻撃にためらいは無く、蓮はその一撃を受けることになった。

「ぐ・・・！！」

肩をおさえて呻く蓮。

「当たった！このまま畳み掛けるわよー！！」

一子はそのまま次の技のモーションに入った。

「か、わ、か、み、流・・・！！」

グググとしゃがみ、力を溜める。

「地の剣！！」

鋭い回し蹴りが蓮を襲う。

しかし蓮はそれを避けず、受けた。

ガードもままならないまま、蓮は後方に引き下がる。

だが一子はそれを追撃した。

「川神流・天の槌！！」

跳んで距離を詰めた一子はその勢いそのまま踵落としをした。

蓮は両腕でガードするも衝撃が骨にまで響く。

だがその防御が功を奏したのか、蓮は一子と距離をとることに成功した。

両者はそのまま平行線の攻防を続けるのだった。

「やっぱあの2人は互角か・・・今はワン子が押ししてるな。」

彩羽は離れた場所で2人を観察していた。

武器の相性のせいかやはり一子が優勢だ。

「来宮蓮の力も解ったし、ワン子の方針も決まった。そろそろやめにするか・・・ん？」

彩羽から見たこのバトルはこのまま行けば一子の勝ちで決まりだ。

だが何かがおかしかった。

(おかしい・・・さっきからこっちはばかり攻撃してるのに、全然倒れない・・・)

一子は先程から蓮に数々の攻撃を当ててきた。

しかし、蓮からはダメージを受けたような感じがしない。

無表情なのは元からだからまだいい。

だがダメージを受けているのなら少しでも変化があるはずなのだ。

それすらも一切無い。

まるで機械のように変化が感じられないのだ。

蓮は疲れた様子を一切見せない。

だが一子は度重なる攻撃によって体力をいくらか消耗していた。

下手をしたら膝について休息をとってしまいそうな程だ。

「そろそろ決めてしまってもよろしいですね？」

蓮はそれだけ言って一子に急接近する。

「なっ！迅ッ・・・きゃあ！！」

密着寸前の状態ではリーチの短いクナイが物を言う。

それくらいは一子にも解っていた。

だが解っていても蓮の急加速に体がついていけてなかったのだ。

一気に薙刀を弾き飛ばされ、無防備になる一子。

「これでオシマイです。」

クナイを振りかぶる蓮。

一子は咄嗟に格闘へと切り替えることにした。

「ええい！これ使うの避けてたけど、やってやるわ！！」

構えをとると同時に蓮の動きより迅く動けることを確信する。

蓮はその自信に少し警戒しながらも、ためらうことはしなかった。

「無駄・・・」

振り下ろすと同時に一子の声も聞こえてくる。

「川神流・蠍撃ちイイイツ!!!!」

一子の神速の正拳が蓮の腹部を襲う。

「ぐ、カハツ・・・!」

蓮から初めてダメージを受けたと思われる声が出た。

その内臓のある場所を狙った正拳は相手を内部から破壊するための技。

いくら蓮でもこれには耐えられないだろうという計算からだった。

普通の相手ならまず立っていられないほどの攻撃だ。

「そんな、何で!？」

しかし、蓮は何も無かったかのように平然と立っていた。

下手をすれば病院行きの攻撃を受けて無事。

その事実は一子を、そして彩羽をも驚愕させていた。

「なんだアイツは!？」

彩羽は思わず立ち上がった。

(何であんな奴が俺の所にデータとして入ってきていない!?)

彩羽の所には大抵の武道家やチャンプの情報はデータとしてコントローラーに送信・蓄積される。

しかし、初対面の時も今も、来宮蓮という名前がヒットしないのだ。

「偽名？・・・いや、それはないな・・・エーベルバッハはそういうのが嫌いだし・・・」

彼女の正体はどうであれ、この戦いでの一子の勝算は薄くなっていた。

「クッ、アイツの攻撃が段々強くなってきてる！」

一子はどんどん蓮の攻撃に押されてきていた。

元々の一子の疲れに加え、ダメージを受けない蓮への驚きと言う精神的負荷が一子の気力に影響していた。

蓮のクナイ攻撃により、そこら中にクナイが散らばっている。

手に持つ薙刀が重い。

蓮に勝つには大技に賭けるしか無いと一子は判断していた。

だが問題は、当たるかどうかだ。

（でも、そんなことはもうどうでもいい！確実に当てる！！）

頭上で薙刀を回転させ始める。

1、2、3、4、と回転させていく度に薙刀の回転速度が上がっていく。

（ワン子は大技に賭ける気が・・・それに対してアイツはどう出るかな・・・）

蓮は一子にクナイを投げつける。

だが回転させたまま前面に薙刀を向けるとそれがシールド代わりとなり、一子はそれによってクナイを防いだ。

案の定、クナイは薙刀に弾かれ、明後日の方向へ散らばる。

蓮はそれでもクナイを投げ続けた。

（おかしい、こんな無駄な事をする奴じゃないはずだ・・・）

蓮のクナイの攻撃が弱まった時、好機とみた一子は回転の勢いを利用した攻撃に出た。

「川神流・・・！」

一子と蓮の距離が薙刀のリーチに入る。

（もらった！）

蓮は防御の仕草を見せない。

この技をくらってもなお立っていられる自信があるのだろうか、蓮は無防備に立っていた。



(だったらこれくらいなさい！)

一子の薙刀が蓮を捉える。

「大車輪！！！！」

一子にとっての一番の必殺技。大車輪が蓮を襲う。

刃を潰しているとはいえ、その強烈な攻撃は蓮に当たろうとし、

ピタリと止まった。

正確には攻撃だけでは無く、一子の動きそのものが止まったのだ。

それは一子自身の意思ではない。

「え・・・あ・・・？」

「武器がクナイだけだとも思ってたようですが・・・違いますよ。」

一子は力を込め、動かこうとするも、指先がチヨコチヨコ動くだけで他はほとんど動かない。

「切れませんよ、特殊化学繊維を幾重にも編んで作ってますから。」

一子の動きが止まった理由。

それは一子の体中に絡まったワイヤーだった。

蓮がクナイの持ち手部分にくくりつけた超極細のワイヤーが一子を捕らえていたのだ。

蓮は無作為にクナイを投げていた訳では無い。

薙刀の回転の加速度の規則性を瞬時に見抜き、なおかつ弾かれた後に飛ぶ場所も計算して投げていたのだ。

その計算の上、網の目に張りめぐられたワイヤーは完全に一子の一切の動きを止めていた。

「私の勝ちですね・・・」

「そんな・・・!!」

一子の手から薙刀が零れ落ちる。

勝負は決した。

少しして、彩羽がやってきた。

「データ採集、お疲れ様でした。」

(この女・・・)

確かに彩羽は蓮のデータを作成し、編集していた

「そう言う割には随分あっさりなんだな。」

「日本では『氷山の一角』っていうらしいですね。」

「なるほどな・・・随分ややこしい奴だ。」

一子を縛っているワイヤーを真剣の仕込み刀で切り、解放する。

「・・・ごめんなさい・・・勝てなかった・・・」

負けた一子はどよんと沈んでいた。

自分の力が弱いと思われてしまったと思っているのかその表情は暗い。

そんな彼女に彩羽がしたことは、頭を撫でることだった。

「いいさ、お前はよくやった。俺は評価するよ。」

「師匠・・・うん・・・」

一子はリラックスしたように目を閉じる。

それを見ていた蓮はつい口を滑らせた。

「飼い犬と飼い主みたいですね・・・」

結果、彩羽は蓮に動向することとなった。

「師匠、しばらく会えないの？修行つけてもらおうと思ったのに・・・」

「お前には仲間がいるだろ、早く行ってやらないと心配するぞ。」

「うん・・・解った。」

一子はそう言って旅館まで走っていった。

だが走ってる最中、一子は思っていた。

(あれ？私が皆と来たのって話したっけ？・・・ま、いっか)

彩羽は自分のミスに気づかないまま一子を帰していた。

ドイツ軍・キャンプ付近

彩羽を連れ帰るといふ任務から帰還した蓮とそれに同行した彩羽が目撃したのは、ドイツ軍の隊員が全員呻きながら横たわっているという地獄絵図だった。

「コイツぁ・・・どういふことだ!？」

急いで脈を確認したところ、生きてはいるようだったが全員が全員、

全治1、2ヶ月ほどの怪我を負っていた。

「襲撃……？」

蓮も無表情の中の余裕が消えているような気もした。

その時、森の中から悲鳴のような声が聞こえてきた。

「ぐあああああああ！！！！！！」

「クツ……！！」「……」

彩羽は咄嗟にステルスを起動して隠れ、蓮は無表情でクナイを取り出した。

森から出てきたのは、横たわっている隊員と同じ制服を着た男性。

「レン……逃げ、ろ……」

かすれる声で言い、倒れる隊員。

蓮はそれに目を見開くことで答えた。

そして森からまた人影が現れる。

「軍隊はこれで全員か……大したことなかったな……ん？」

長い黒髪の女性。

蓮はその女性を知っていた。

いや、世界中の人間が知っているであろう人間。

「お、何だか強そうなのがいるな・・・どうだ、私と戦わないか？」  
最強の武神として名高い、川神百代その人であった。

(モモか・・・ここは気配を消してやりすごすのが吉だな)

彩羽はまた余計な損害を出したくないがため、隠れ続けることを決断した。

「何故隊員を・・・」

「何か向こうから攻撃を仕掛けてきてな、降りかかる火の粉を払ったまでだ。」

「そう・・・なら、私も隊員を攻撃したあなたを・・・ッ！」

その瞬間、百代は蓮を右から攻撃していた。

だが蓮はソレをしゃがんで避ける。

「ほう、いい反応だ！他の奴らなら大抵この一撃で倒せてたけどな  
！！」

「強い、でも・・・それだけ、なんて言わせないぞ！」やる・・・」

百代の連撃は蓮としても避け切れない。

最初は防いでいたが、徐々に当てられてくる。

「ほらほら！攻撃が当たってきてるぞ！！」

「く……避けようもない……」

段々と蓮の体勢が弱弱しくなってきた。

（無理もない、流石にモモ相手じゃキツすぎる）

彩羽は隠れながら観察していたがあまりに一方的な戦いに唇を噛んでいた。

別に蓮に肩入れする気も無ければ百代に敵対する気も無い。

だが、蓮がこのままやられてしまうのは彩羽にとっては快いことでは無かった。

（おかしいな……なんで今日会ったばかりの奴に……いや……）

今日ではない、もっと昔。

生きるか死ぬかのあの時。

（思い出せない……だけど、アイツは……）

彩羽が考えている間、ついに強力すぎる百代の攻撃はついに蓮に膝をつかせていた。

「お前もこれまでか、じゃあこれで！」

やられる。そう思い瞳を閉じるが来るかと思っていた攻撃はいつまで経っても来なかった。

「なにが・・・？」

目の前に百代の姿は無い。

周りを見ると百代は数メートル先の木々を薙ぎ倒して吹き飛んでいた。

百代の代わりに自分の目の前に立っているのは、誰もいなかった。

いや、バチバチと青白いスパークを発しながら半透明になり、そのまま完全に姿を現す。

「思い出すまで、ちょっと付き合ってもらっぞ・・・」

彩羽はついに、蓮に手を貸すのだった。



## ワシ子vs来宮蓮(後書き)

今回は彩羽と蓮vs百代です。

相変わらず亀更新&読みにくい文章ですがよろしくお願いします。

感想・評価ドシドシお待ちしております〜

**多彩武器（前書き）**

今回もバトルです。

## 多彩武器

突然現れた男を、川神百代は知っているような気がした。

「川神百代、また会ったな・・・」

突然の殺気に思わず横っ飛びをする。

一瞬遅れて百代の居た木々が吹き飛んだ。

(この圧縮空弾・・・あの時の!?)

前、多馬川のほとりで戦った相手。

「彩川羽月・・・か？」

そついに終わるか終わらないかの瞬間、彩羽は百代に接近し、仕込み刀で斬撃を繰り出していた。

「『アレス・マルス』・・・エンド・オブ・ムーブ!!」

彩羽の攻撃が瞬時に迅くなる。

「凄い手数だ・・・クツ!？」

急いで防ぐがたまに入る。

百代はこの攻撃に対応しきれずに動けないでいた。

そう、ガードしても全てを防ぎきれない。

圧倒的手数の連撃による相手の動きを封じることだった。

それがエンド・オブ『ムーブ』。

「もらったぞ！川神百代！！」

その攻撃を致命傷とするために、彩羽は百代の脇腹を狙って斬りつけた。

「甘いな！彩川！！」

その刀をガシリと驚掴みにされる。

「なっ！」

「隙が生まれたな・・・川神流・無双正拳突きイッ！！」

百代の渾身の右が彩羽に飛ぶ。

（避けられるか！？）

彩羽はそれを肌で感じ、素早く刀を手放してその攻撃を避けた。

（あつぶねえ・・・！！）

当たっていたら間違いなく箱根とはおさらばであろう攻撃を避けたことは彩羽にとって大きいことだった。

「獲物が無くなったな！もらったぞ！！」

百代が刀を遠くへ放り投げ、彩羽を追撃する。

「そいつぁ・・・どうかな！」

仕込み薙刀を出して応戦する彩羽。

だが普段一子の相手をしている百代にとってはまだまだ熟練度が足りなかった。

そこで彩羽は薙刀を短く持ち、構えをとる。

「『アレス・マルス』、エンド・オブ・ロール!!」

彩羽は器用にも薙刀でフェンシングの如く突きを繰り返した。

突き、回す。

その行動を繰り返し、百代の連劇をどうにか防いだ。

だがソレと同時に、百代のあまりに強力すぎる攻撃に薙刀はその本来の武器としての役割を奪われていた。

(普通はそんなことないんだが・・・いい皮肉だな・・・)

彩羽はそんなことを思いながら刃こぼれしすぎて使い物にならなくなった薙刀を捨てる。

「だったら、次はコイツだ！」

彩羽が次に取り出したのは青龍刀と西洋の両刃剣の2つだった。

それを二刀流の要領で百代に突っ込んでいく。

刀と違い、重さと力強さを追及した剣で百代に対抗するには無理があると思えたがそれを気にせず彩羽は自由自在に両方の剣を使っていた。

「流石にこれだけじゃ倒せないか・・・『アレス・マルス』、エンド・オブ・ワルツ!!」

ここで彩羽はとっておきを出すことにした。

エンド・オブ・ワルツ。

アレス・マルスシリーズの中でも上位に入る技をここで彩羽は出した。

「左右からの攻撃か・・・!」

剣をクワガタのように左右から挟み込む。

「そんな攻撃で!・・・なっ!?!」

その攻撃は百代がガードする直前に消え、ガードに使用した腕をすり抜けて、百代の脇腹に直撃していた。

「ハアアアアッ!!」

「なっ、ぐああああっ!!」

このまま力を込め、百代の脇腹に剣を食い込ませようとしたが、何か違和感を感じた彩羽は咄嗟に剣から手を放し、後ろに跳ぶ。

その瞬間、百代のすぐ正面――彩羽がいた場所にはドンツという音と共に丸いクレーターが出来ていた。

「チ、失敗したか。」

（気を圧縮して円形に押し潰すつもりだったのか・・・）

2つの剣は既に百代に折られてしまった。

（ワルツでも駄目か・・・さて、どうするかな・・・）

まだまだ武器や技はある。

だが、百代にはいくら攻撃を与えても瞬間回復によってまったくの無傷で済まされてしまうのだ。

それを考えると、さらに体力を消費する上位のエンド・オブはリスクが大きかった。

（やっぱりまだモモに挑むのは無謀すぎたか・・・）

一時の感情に任せるものではないな、と今更ながらに思う。

そういえば、蓮はどうしているのだろうと彼女のいるであろう方向を見る。

(ツ・・・居ない!?)

「余所見とは余裕だな!!!」

一瞬の隙を見逃さず、百代は彩羽に攻撃を仕掛ける。

「川神流・炙り肉!」

百代が腕を気で紅蓮の炎に変化させて攻撃してくる。

「あつちいッ!!!」

服を掴まれる。

彩羽の服が百代の気によって燃えていた。

「あつっ、あつっ、熱いわぁ!!!」

彩羽は仕込んでいた短剣を使って服を切り裂く。

その曲芸によってなんとか炎の魔の手から逃れることは出来たが、彩羽の服は両腕の部分が無くなってしまった。

彩羽の比較的白い日焼けた肌が露になる。

「逃がさないぞ!川神流・致死蚩!!!」

百代から無数の気弾が飛んで来る。

(なんて数だ、避けられない・・・!)



そんな彩羽のことなど知らない気弾は高速でどんどん近づいてくる。

(避けられない、ならッ!!)

ズボンに仕込んであった刀を気でコーティングし、気弾をいなす。イメージ的にはルパン三世の五右衛門がマシンガンの弾を防ぐ感じで。

「隙が出来たのはそっちだ! もらったぞ!」

防ぎながら再度接近し、百代の肩口目掛けて突きを繰り出す。

「そんな突き、私が防げない訳が・・・なっ!」

カウンターをしようとして前に出した百代の両腕が、突如左右に開く。

それは百代の意思では無いようだった。

そして百代の後ろから現れる影が1つ。

「いかにコレでも止められるのは一瞬だろうけど・・・」

蓮がこっそりワイヤーを駆使して一瞬だけ百代を止めていたのだ。その手には刀。

蓮は最初に彩羽が使い、百代に遠くに放り投げられた刀を拾いに行っていたのだった。

その刀を使って百代を後ろから攻撃しようとしていた。

狙うは彩羽の狙う肩のちょうど裏側。

「はあああああッッ!!」

彩羽と八モるように声を出す蓮。

初めて蓮から気合の籠った声が聞こえた。

そしてその攻撃は見事、百代の肩に当たったのだった。

「くッ……なんて攻撃だ……!!」

洗練されたその突きは、前後から百代を襲い、衝撃を逃さず百代にダメージを与えることが出来た。

しかし、彩羽と蓮には解っていた。

川神百代の最大とも言っている理不尽な能力、瞬間回復というものがあることを。

「下がるぞ!!」

彩羽の言葉に、無言で頷き後ろに下がる蓮。

だが百代はそう簡単には逃がそうとしなかった。

「跳躍中は避けられないな!川神流・無双正拳突きイツ!!」

その相手を破壊しかねない拳の行き先は、無防備になった蓮……

では無く、そう行くだらうと思っていた彩羽であった。

蓮が無防備になっていると思っっている自分が一番無防備だということに初めて彩羽は気づいた。

だが時は既に遅く、百代の拳は目の前まで迫っていた。

しかし、彩羽と百代の間に割ってはいるものがあつた。

百代はすぐに気づいていたようだが、彩羽には、ソレが蓮だと気づくのに少しの時間を要していた。

「なっ、何でッ!？」

「・・・・・・・・・・守る・・・・・・・・」

蓮は後方に下がっていたのでは無く、最初から2人の間にはいるつもりで行動していた。

彩羽は自分が百代の攻撃を喰らっても大丈夫だという自信は一応あつたが蓮にはそんな防備があるとは思えない。

「やめろ！何で俺を・・・・・・・・！」

「守る、アナタを、私が・・・・・・・・」

このままでは蓮に当たる。

それだけは避けたい彩羽はなんとか蓮をどかそうとするが、百代の拳はそれよりも迅かつた。

「やめろおおおおッ!!」

何故ここまで自分が蓮に気を使うのか、彩羽には解らなかった。

蓮が失われていく。

中東での記憶が蘇ってくる気がした。

(蓮・・・俺は・・・!)

すべてがスローモーションになっていた。

百代の気が視覚的に広がっていく。

それはまるで、自分の頭の中のフラッシュバックのような光で。

(これ以上、俺から奪わないでくれ!!)

思いが喉から出ない。

蓮に百代の攻撃が当たる、その瞬間だった。

「そこまでです!トンファーシュート!!」

何処からかトンファーが飛んで来る。

それは百代の腕を的確に狙っていた。

「チツ、気を籠めた武器じゃあ少しは警戒せざるを得ないな・・・」

百代が咄嗟に腕を引いてトンファーを避ける。

そのお陰で蓮に当たるハズだった拳は、彼女の髪を揺らす程度で終わっていた。

「トンファー・・・エーベルバッハ!？」

やってきたのは、誰か人を肩に背負ったマルギッテだった。

「2人とも無事ですな。他は・・・間に合わなかったか・・・」

マルギッテの眉間に皺が寄る。

「そっちからやってきたんだ。アイツらを倒すのは正当防衛だぞ。」

百代の言い分はもつともだ。

それを解っているからこそ、マルギッテは終始苦い顔をしていたのだった。

「一応、事情を話しましょう・・・」

マルギッテからこの戦いの理由が話され始めた。

## 多彩武器（後書き）

やっぱりバトルシーンは苦手です・・・

感想・評価お待ちしております

## オリキャラ紹介（前書き）

今更ですが頃合だと思ったのでオリキャラである彩羽と蓮のスペックでも・・・

## オリキャラ紹介

組式彩羽（偽名：彩川羽月） 男

4年前行方不明になっていた風間ファミリーの8人目の男。

身長180前後の長身。

髪型は肩まであるくらいのもみあげで、少しだけはねている。

普段は普通と言えるが、本気になったりすると眼光がキツと変わり、恐ろしい物になる。

メガネをしているが、伊達目で逆に目は良い方。

目が悪いという弱みを見せて周りの油断を誘おうという彩羽の作戦でもある。

本人はメガネを気に入っており、休日にはたまにメガネを買う旅に出る。

頭が非常に良く、一時的なら中学の内容と高校1年の教科書の内容を暗記出切るほど。

知力でも大和が95なら彩羽は89くらい。

また、戦闘能力も高く、武器があればまゆうちと互角以上に渡り合える。

過去にある組織からスカウトされ、中東へ。

中学時代と言える思春期的年齢を中東の戦場で過ごしたため、価値観や考え方が一般とは少し異なる。



本人は極めて冷静に努めようとしているが、ファミリーや自分の正体など身内・過去からの人間に対しては事あるごとに動揺を隠せない。

基本は明るい人間だったが、前線で人の死を見続けてきたため、次第に回りに対して心を閉ざし、本当の意味での人付き合いはファミリーの人間が殆どだった。

現在は昔のノリも取り戻してきたお陰か、それなりにコミュ能力高。戦場での働きぶりが評価されたため、本人の希望もあって組織から川神にミッションとして派遣された。

戦場を渡り歩いてきたため、同じ軍人であったあずみやマルギツテとは旧知の仲。

しかし、マルギツテの上司であるフランクとはあまり面識が無い。

中東の仙人に伝授してもらった剣術『アレス・マルス』を使うため、基本的に剣系統の武器（主に刀）が多いが、基本的に何でも出来るオールラウンダー。

数々の武器を体中に仕込んでいる。そのストックは四次元ポケット並み。

装備としては彩羽の中で一番重要なのは組織から支給された2つのアイテム。

コントローラーと靴である。

コントローラーは、普段は左手首のリストバンドに収納されており、使用時に展開し使う。

イメージ的にはGANTZのコントローラー（画像検索すれば出る・・・かな？）で。

ホーム画面には彩羽の各部位の状態が記されており、隠し武器の残りも表示されている。

機能としては、主にステルスモード、敵データ収集、地図、砂漠でも使える衛星通信、組織からのメールの送受信、小型PC代わり、などなど色々なスペックが詰まっている。

ステルスモード時に、どこを隠すか決めることが出来るので、武器だけ隠して持っていないかのように見せることも可能である。だがステルスモード時に攻撃されたりと、機能を大きく阻害されるような事態に陥った場合エラーと判断し、再起動して機能が一時的に使えなくなることもある。

靴は周囲の空気を吸収・圧縮して撃ち出す機構となっている。

吸収時に、空気を動かす訳なので彩羽の周りには風が発生する。

撃ち出す時に強烈なエネルギーにまで圧縮するので、移動手段や攻撃手段としてよく使われている。

最近の悩みは金欠と、同じ夢を良く見ること。

そんな彩羽にもまだ誰にも話していない秘密が・・・

来宮蓮 女

中国人と日本人のハーフ。  
身長161センチという小柄な体躯だが、スピードがあり、ワン子のような戦い方が出来る。

感情という感情を一切表情や行動に出さない機械のような少女。

マルギツテがたまに着ているような迷彩服を常時着込んでいる。

中東を彷徨っていたところをマルギツテに発見・保護された。

そうなった経緯と、中東で何をしていたかは本人は誰にも話しておらず、謎である。

だが彩羽とは中東で何かあった様子。

基本は素手で戦うが、軍人という身の上、重火器も使える。

本人が好んで使う武器はクナイとワイヤーだが、本人曰く「氷山の一角」とのこと。

その場にある物を全て武器に出来るほどの柔軟性を持つ。

おっぱいはざんねん。

髪は流れるような黒髪を肩まで伸ばしており、イメージ的には恋姫無双の黒髪版呂布（恋）。

## オリキャラ紹介（後書き）

え？パクリデザインが多いって？・・・そうでもしなければ絵に描いて想像出来ないからです・・・

まだまだ設定を思いついたら追々説明していきます！

## モロの勇氣（前書き）

クリスマスも終わった途端に年越しムードですな

## モロの勇氣

一子と蓮が戦っていた頃、ちょうど別の場所でも戦いが起こっていた。

「ね、ねえ京・・・本当に僕たち2人でよかったのかな・・・？」

「別にモロ1人で帰ってもいいんだよ？」

「う、解ったよ、行くよ。」

翔一が提案した「探検に行こうぜー！」によってファミリー全員が森を彷徨っていた。

「大和がキャップに取られたから・・・こうしてモロを使っていると言うのに・・・!!」

「僕どういう扱いなのさ!？」

そんな他愛の無い話をしながら歩いていると、少し開けた場所に出た。

「うう、どこなんだろうね・・・皆とまた合流できるといいけど。」

だが案外、卓也はこの状況を満喫していた。

(京と2人きりか・・・ハッ!いけない!僕は一体何を考えているんだ・・・!!!)

京は大和に執着している。自分の入る余地は無いはずなのだった。

（そうだよね・・・いくら想っても意味が無いんだし、それに僕なんか駄目駄目だし）

卓也は若干ネガティブ思考になっていた。

その時、京が急に止まる。

「どうしたのみや、こ・・・？」

「シッ、誰か近づいてくる・・・」

誰かと言っても自分たちに近づいてくるのはファミリーの内の誰かだろうと卓也と京は想像していた。

京に至っては是非大和であってほしいという願望がある。

「流石大和！私に会うためにはるばる森の中を来たなんて〜！」

京は無理やり大和と断定して音のする茂みに近寄った。

（大和だったら声くらい出すはず・・・ってことはこれは！）

「京！駄目だよ！！」

卓也は京を押しよけるように茂みと京の間に入る。

その時だった。

卓也は茂みから現れた何かによって3メートル程吹き飛ばされてい

たのは。

「うわあああああー!!」

「モロ!?」

数回転がってやっと卓也は止まる。

脇に攻撃を食らったので卓也は動けず、呻くことしか出来なくなっていた。

「モロ、大丈夫!?!」

「み、京・・・」

卓也は茂みの方向を指差す。

京がその方向を見たとき、茂みの前に1人の人間が立っていることに気がついた。

「中々の仲間を思いやる心です、少年。」

長い赤毛の髪に紺色の軍服と思われる服装の女性。

京はトンファーを手に持つその女性への対処よりも、卓也の安否を優先させた。

「とりあえずモロは下がって・・・コイツ、手強い!」

「う、うん・・・京も気をつけて。」



京はその言葉に答える暇を与えられることもなく、女性の攻撃を回避しようとしていた。

女性も卓也を非戦闘員と判断したのか、狙いを京に定める。

「この攻撃を避け続けるとは、中々やりますね。」

「弓使いだから目はいいの。アナタ、一体何者!？」

京が迫り来るトンファーを避けながら女性に問いかける。

「私はマルギッテ・エーベルバッハ。」

「弓使い、椎名京。そう簡単にやられたりはしない!」

「ほう、だが『網』にかかった不幸を乗ろうがいい!!」

「『網』・・・?」

「私は今、軍の重要な任務中だ。そのためにも邪魔者には消えてもらおう!!」

マルギッテの攻撃は的確に京を捉えていた。

にも関わらず、京は避け続けられる。

「狙いが正確なほど読みやすい、それはどの世界でも一緒!」

獵犬の牙を避けつつ、京は必死に打開策を探していた。

手元に弓は無い、が。

(パチンコを使う?・・・でも攻撃が迅すぎて・・・)

マルギツテの攻撃は迅い。

見えないわけでは無いがかとって余計な動作をするにはあまりにも余裕が無いのだ。

そして、余計なことを考えている暇も無い。

「貴女に恨みは無い。しかし任務遂行のために障害は排除する!」

「なッ、急に迅く!?キヤア!」

マルギツテの塞がれた眼帯の下から睨まれるような感覚を受けた京は、下段から襲い掛かるトンファアの餌食になった。

「京!?!」

京の体が一瞬硬直する。

その隙を見逃さずにマルギツテはもう一撃京にいれて卓也の近くに吹っ飛ばした。

「京!大丈夫!?!」

多少動けるようになった卓也が京に寄る。

「う・・・あつくっ・・・」

気絶してしまった。

相当のダメージは食らっていたのだろう。

「貴方も、少し眠りについてもらいます。」

マルギツテが次の得物に止めを刺そうと近寄ってくる。

「や、やめてくださいよ!！」

卓也が腕を広げて京を庇う。

目の前に来たマルギツテは鋭い目を卓也に向けた。

「そこをどきなさい、怪我しますよ。」

「どかない!！」

マルギツテに向き直った卓也は真っ直ぐ彼女と対峙する。

「京もこんなだし・・・大体、なんでこんなことになったんですか!！」

卓也の目は怒りに満ち溢れている。

「あなた達が任務遂行の障害となりうる可能性があった、ではどうでしょう?！」

最初から理由など無いという風な言葉に、卓也はさらに激昂した。

「そんなことって・・・そんな・・・ふざけるなあああッ！！」

非力を体現したような卓也の身体はその通り、非力なパンチを繰り返す。

当然、マルギツテも卓也の体つきから攻撃力などは予測していた。

「ふん・・・」

体を捻らせて卓也を捌く。

一方卓也は、攻撃の勢いに任せたのでそのまま前へ倒れこんでしま

う。

「無駄なことはお止めなさい。」

確かに無駄なことだ。

しかし、卓也はそれでもなお立ち上がりマルギツテに殴りかかった。

「うわあああ！」

「無駄だと言うのが・・・！」

先程と同じように、またもや卓也はパンチをかわされ、倒れこんだ。

「う、く・・・！」

立ち上がり、かわされ、倒れ、立ち上がり、同じことの繰り返し。

「いい加減にしたらどうです、彼女がそこまで大切だとも言うのですか？」

「……………そうさ……………」

卓也は残った力を振り絞るように立ち上がった。

「京は、ファミリーなんだ！皆で支えあってやってきた……………皆を……………！」

「それは、本当に『皆』ですか？」……………」

「私はそういうことに疎いから何とも言い難いが、貴方のその気持ち……………」

「言わないでください……！」

卓也は涙が出そうで、出なかった。

マルギッテが言った通り、卓也は京に気があった。

こういった状況がファミリー内では皆無のため、行動に出せず皆からは（鈍感組からは特に）気づかれなかったただけだ。

幸い、当の京は気絶しているので聞いていない。

「僕だって、1人の女の子くらい守れるようになってみせるんだ……………！」

再び卓也がマルギッテに殴りかかる。

「はぁ・・・何度無駄だと言えば。」

今度はかわす代わりにカウンターを仕掛けた。

まともに食らった卓也の体が宙を舞う。

「うぐう・・・」

「流石にこれで・・・ッ！」

まだ、と言いながら立ち上がる卓也。

気絶させるつもりで放ったカウンターで気絶させられなかったのは彼女にとって些かの屈辱を与えた。

「まだ、まだあああああ！」

走って殴りかかろうとするが、ダメージのせいで卓也は足を纏れさせ攻撃する前に転んでしまった。

「まだ・・・」

何かにとり憑かれたかのように立つ卓也には、執念の色が濃く表れていた。

「貴方は、そこまでして彼女を・・・」

「当たり前です・・・だって、大切な人なんですよ・・・」

マルギツテはそうですかと呟くと悟ったように、卓也に向き直った。

「今度は手加減はしません、確実に仕留めます。」

「僕は・・・うわあああああ！！！！！」

恐らく彼の最後の力なのだろう。

マルギツテはそのパンチを避けることなく、受けた。

力は無い、ただのパンチ。

マルギツテからしてみれば蚊のとまったかのようなパンチに、彼女は執念という力を感じ取った。

そして手加減無しの特攻を卓也の体に叩き込んだ。

衝撃が卓也の中を通り抜け、彼を呻かせる。

「貴方の力は解りました、名前は？」

「師岡・・・たく、や・・・」

それっきり、卓也は力尽き、マルギツテの肩にのしかかる形で気を失った。

「・・・貴方のことは少しだけ覚えておきましょう、戦士タクヤ・・・」

マルギツテは卓也を背負い直し、京ももう片方に背負って仲間のいるであろう場所に向かっていった。

「……以上が、この2人の話だ。」

卓也のことを思っただか、卓也が京に気があるといったこと以外は全て話した。

百代はその話を聞いて納得したようなしてないような、そんな氣でいた。

「要は、俺とドイツ軍のコイツらの任務地点に、お前らが来て、ソレを排除しようとして逆にお前にやられたってことだよ。」

彩羽が噛み砕いて説明すると百代はやっと納得したようだった。

「おおーなるほどな！ だけどお前だって私の仲間を氣絶させたんだからこれでおあいこだよな？」

「っざっけんなッ！」

2人氣絶させたのと、十数人をしばらく動けなくしたのではまた度合いが違うだろう。

「そっぴゃ、話を聞く限りでは2人1組っばいがお前の相手は？」

「あ、そーいえば忘れてたな……まあ大丈夫だろ、大和だし。」

(大和……！)



彩羽の心の中は打ち震えていた。

ファミリーがいる中でさらに大和まで来るといふのは状況としては非常によろしくない。

どうにかしてこの場から去ろうと思っていた彩羽に追い討ちをかけるように後ろの方の茂みから音が聞こえた。

「ひどいなあ姉さん、大丈夫じゃなかったよ……ったく、って……何この状況は……」

やはり現れたのは大和だった。

しかし、大和がそういうのも無理はない。

そこにいるのは百代と、何処かで見覚えのあるような男と、見知らぬ女性2人と、積み重なった十数人の気絶した男達だったのだから。

「あ、あの……どちらさん？」

大和が戸惑っていると、そのまた後ろから声が聞こえた。

「それについては私から教えよう、少年。」

「誰だ……ってうおあっ!?ク、クリスの親父さん!!」

そこに立っていたのは、位の高い軍服を纏った中年の男性だった。

(確かアレは、フランク・フリードリヒ……)

彩羽のファイルにもデータがある。

フランクの後ろには、翔一と岳人、クリスに由紀江も居た。

（ワン子以外勢ぞろいってか・・・まあワン子にはさっき会ったけど）

フランクも含め、全員にもう一度事情を話すのだが年末の忙しさもありカットされるのだった。

モロの勇氣（後書き）

しづといがまだ続きます！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8483v/>

---

真剣で私が恋した8番目！！

2011年12月28日03時50分発行